
draw

かっぱ同盟

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

d r a w

【Nコード】

N 8 4 6 8 X

【作者名】

かつば同盟

【あらすじ】

不思議な老女に出会ったオノダ・キクマサは、その出会いによって美術の道を極めようとルネ・ヴィルトン美術学校に入学する。ルネ・ヴィルトン美術学校にはルネ・ヴィライアーと言う特殊な特待制度があり、キクマサもそれを目指す……。個性豊かなヴィライアーを中心に、世界の文化、遺産、神話を交え、美術と言う視点からそれぞれの問題と向き合っていくリアル＆ファンタジー。

プロローグ

一生涯において、出会える美しい物の数って決まっているのだろうか
人によって、差があるのだろうか

美を極めた者にしかたどり着けない場所ってあるのだろうか
そういう人にしか見えない物ってあるのだろうか

世界って広い

僕らが思ってる以上に奥深く

僕らが思ってる以上に美しい

「それなら君にとって、美術って何だい？」

細かい金の細工のイスが、またギシツと音を立てる。50代前半ほどの男の教授が、長い机の向こう側から聞いた。最後の質問であった。

彼はこの質問を、3年前に聞かれたことがあるけど、その時は答えられなかった。

向かい側、教授の座っている金のイスが、再びギシツと音を立てる。

「それは……世界の美しいものを、ちゃんと見つけれられる力だと……」

彼の目の前の紅茶が、イスがギシギシ鳴くたびに、少しゆらぐ。でも、それで現れた水の模様だって、彼には美しく見えた。

教授はダリのような髭を撫で、

「……よろしい……的を得ていて」

満足そうに笑う。そして、付け加えるようにさりげなく。

「そうですね。君にはなかなか、どうにも良ろしい天性のものがあるようで。それは、沢山の美術品を見ることで、更に良ろしくなるもので」

「……はあ……、 “良ろし” ですか……」

彼は、どうにもこの教授の言い回しについていけずに反復してみた。
教授は、片眉根を上げて、彼の書類に印を刻んだ。

「ようこそ、ルネ・ヴィルトン美術学校へ。それならばきみがこ
こで……」

「世界の美しいものを、見極められますよう」

教授が立ち上がったことで、また金のイスが鳴いた。

* シーズン1の登場人物

< draw シーズン1の登場人物 >

シーズン1のキャラクターを大雑把に説明します。読んでいる途中に「こいつ誰だっけ……」となったら見てみてください。気になった時に覗いていただけると嬉しいです。

> i 1 7 0 4 4 — 4 8 8 <

〈 絵画科ルネ・ヴィライアー 〉

* オノダ・キクマサ（ルネ・アメジスト）／二年生
主人公。クールそうに見えて案外天然。記憶力が病的に無い。

* ルナシー・ミディエム（ルネ・トパーズ）／二年生
ヒロイン。金髪美少女。いつも笑顔でおっとりしているように見えるが……

* フォルテ・ゴットバルト（推ルネ・クリスタル）／二年生
キクマサのルームメイト。雑学が多い。考古学オタク。

*レイデル・リローズ（推ルネ・ペトリファイウッド）／二年生
二年生一の天才。フォルテの幼なじみ。感情的。

*ハク・リュオン（ルネ・テクタイト）／五年生
みんなの団長。恐い事で有名だがそうでもない。可哀想なくらい
運が無い。

*メルベリー・セレネーム（ルネ・パール）／五年生
副団長。メルベリー嬢と呼ばれている。ミス・絵画科

*ティアン・レーゼス（ルネ・ターコイズ）／五年生
団長補佐。実際はこいつの天下。鬼畜メガネ。

*サイオンジ・ナギ（ルネ・ダイヤモンド）／五年生
日本画留学生。アトリエが腐海の森。ミハーである。

*レッドリー・ヘッドバーン（ルネ・ルビー）／五年生
貧乏だがイケメンの男子寮長。人気者。ウインクが癖。

*シャンデリー・リオール（ルネ・ガーネット）／四年生
ルネ美新聞による学園ランキングで、全てにおいて一番輝いてい
る男子部門一位。

*シルフィード・ケイド（ルネ・カーネリアン）／四年生
リオの彼女。メンバーにお母さんとも言われる。世話焼き。

*フレイ・レステヴァン（ルネ・エメラルド）／四年生
プレイボーイ。不真面目そうで、意外と仲間思い。

*シャルロ・グレディア（ルネ・アンバー）／四年生
賞金女王。女王様気質で、勝負事に強い。

*スノーフリーク・ロズベルト（ルネ・オパール）／四年生
絵画科きつての天才。基本ローテンション。

*カイ・ヴォストン（ルネ・ハウライト）／三年生
ヨーロッパの鑑定王子。学校にいるよりテレビに映ってる事が多い。

*ジェイル・クォーシャン（ルネ・サファイア）／三年生
男嫌いで有名。強がっているが案外臆病者。

*クレハ・ドルフォード（ルネ・コーラル）／一年生
野生児系電波少年。なぜか会話が通じない。チヨコレート中毒。

* ヘルクロウ・ラヴィーニ（ルネ・アクアマリン）／一年生
名家のおぼっちゃま。小心者でクレハに振り回されている。

《イメージボード》

> i 1 4 3 6 9 — 4 8 8 <

> i 1 4 3 7 2 — 4 8 8 <

〈彫刻科ヴィライアー〉

* パリス・ヴァレリー（ルネ・ゴールドロッド）／五年生
彫刻科団長。表は優しそうだが、絵画科の研修地などを裏で操る。
鍵を探している。

* ロードルーン・アイスキネス（ルネ・シルバーロッド）／五年生
彫刻科副団長。淡々とした青年。

* エマ・ベリル（ルネ・プラチナロッド）／五年生

よくパリスに意見する。タロット占いを得意とする。

*アルマ・カイザード（ルネ・アイアンロッド）／四年生
気の短い青年。パリスには忠実。

*フィル・レグール（ルネ・ブロンズロッド）四年生
知的で落ち着いた青年。

*ブリジット・バルーン（ルネ・スチールロッド）三年生
太ったおかつぱ娘。おしゃべり。

*シャトー・オークラン（推ルネ・ウッドロッド）二年生
穏やかな天然少年。いつもニコニコしてる。

*スカーレット・マリーニ（ルネ・グラスロッド）一年生
無口な少女。言うときは言う。

〈他学科団長〉

*リーベル・キルマー（ルネ・XIE）／五年生
デザイン科団長にして、団長総会長。さわやかぶっているが腹黒そう。

*オペリア・フォード（ルネ・ミカエル）／五年生
ファッションデザイン科団長。モデルでもある。高飛車。

*ジーク・ウィリアムズ（ルネ・シリウス）／五年生
映像科団長。ハリウッド俳優を両親に持つ。アホ故のカリスマ性を持つ。

*レクサ・ホープキンス（ルネ・サンフラワー）／五年生
建築ガーデン科団長。団長の中で基本空気。しかし人は良い。

～教師陣～

*エリック・オーデイル（理事長）

ルネ・ヴィルトン理事長。この職にストレスを感じている。

*エリーゼ・オーデイル（絵画科ヴィライアー主任）

カトレアの娘。やり手の教師。厳格で、無表情。

*ネイリー・ドールマン（二年生担当教師）

キクマサ達の担任。基本優しい。

*ガイル・アンドリユー（絵画総主任）

ですぞ口調のおじいちゃん先生。変人。

*ヴィンセント・フレジール（彫刻科ヴィライアー主任）

名前だけ。詳細は不明。

くエジプトプラン編く

*セティさん

観光案内人だったはずだが、謎多いまま消える。

*ツタンカーメン

悲劇の少年王。キクマサと仲良くなる。

*アンケセナーメン

ツタンカーメンの妻。夫を強く愛する。

*アクエンアテン

ツタンカーメンの前のファラオ。アマルナ改革を強行する。

*ネフェルティティ

アクエンアテンの妻。現代で有名な“ネフェルティティの胸像”のモデルである。

*宰相アイ

アクエンアテン、ツタンカーメンと仕えてきた老宰相。ツタンカーメンの次のファラオである。

*ホルエムヘブ
若き將軍。宰相アイの次のファラオである。

*タハール
ラーの神官。勇ましい若者であつたが、後に呪いの化身となる。

*タハール少年
タハールの息子。

*カーロン
ラーの神官団の長。タハールの父。黄金のマスクの隠し場所を知っている。

*セト神
黒い神官とされていたが、後に神だと分かる。タハールを呪いの化身に変える。

〈その他〉

*カトレア・オーデイル
キクマサに絵を教えた師匠。

*ジェシカ・バーナード
キクマサ達の同級生。レイにコンプレックスを抱いている。

*レミオ
キクマサ達の同級生。情報通。

*マクナスさん
学校内の画材屋の老人。

*ミハエル先生
大御所鑑定士。カイの力を認めている。

*マルティン

評論家。ルネ・ヴィライアーを嫌っている。

*オノダ・キクジ
キクマサの父。日本の外務省大臣。

*カツキ・サキコ
キクマサの母。画家であつたが自殺した。

*オノダ・ミチコ
父の再婚相手。

*オノダ・キヨシ
父の隠し子。ミチコの子供。

01：色の無い時代

人生に色ってあるのだろうか

例えば、バラ色の人生とかって言うし、画家のピカソには、青の時代とか、あったって言う。

意味合いが違うかもしれないけど、人々はきっと、時代時代によって、彩られて生きている。

何と美しいこと。

ガタン…ガタン…

木製のイスの趣のある汽車。「世界の車窓から」とかでよく見るあれに近いと思う。

オノダ・キクマサは16歳の日本人だった。茶髪に焦げ茶の瞳、い

かにも今時な輝かしい年頃を王道に楽しんでいるような、ちょうどいいくらいに垢抜けた少年。この髪と目の色は母親譲りで、日本人にしては少々華のある顔立ちである。

彼は今、とても虚ろな顔で窓から外を見ていた。

見渡す限りの小麦畑。青い空、広大なプスタ。

ちょうど、ハンガリーくらいだろうか。

『全くあの人は、一体何を考えているのだろうか。ギリシアへ行かないといけないのに、オーストリア行きの航空チケットしかくれなかったじゃないか。おかげでそこからギリシアまで、長い長い列車の旅だ』

キクマサは淡々とそんな事を考えていた。文句のような、不満事のような、しかしどこことなく異国の空気に取り入れながら、何だかんだ言ったって楽しんでいるようにも見えた。

突然黄金のプスタが途切れ、暗いトンネルに入った。入ったと思ったら、再び青い空。

しかし、小麦畑は淡い金色から姿を変えていた。

何とまあ広大な、どこまでもどこまでも続くヒマワリの畑。

太陽の花だ。

虚ろだった瞳が、一変して色を得る。

「…うそだろ……」

ポツリと呟いた。

だって今は3月中ほど。

日本でも、今年は桜さえ見ないで出てきたというのに。

桜を待たずに、飛び出したというのに。

やっぱり世界って広い。

広大な太陽の花は、地平線の遙か彼方まで広がっていて境なんてわからない。

やっぱり気候が違うのか。はたまた土が違うのか。

日本だったら、この時期にこんな景色見られるはずがない。

キクマサは、じわじわと心の中の焦燥感に気がついた。

ああ、まただ。

またしても、あの人にしてやられた。

敬愛する、カトレア・オーデール先生。

あなたはこれを見せたかったのですね。

世界には美しいものが沢山ある。

あなたはいつも、そう言っていたから。

列車の汽笛の音がする。

あれは、3年前の雨の日のことだった。

そうだ。あの日こそ、自分にとって幸せだった日はない。
人生の色を塗り変えたあの日。

あのアトリエを見つけたあの日。

美しい世界に足を踏み入れた日。

あこのろの自分はただ弱くて、滑稽なほどに愚かだったから、今は
思い出すだけでも恥ずかしい。

世界の美しいものを見たこともなくせに、見ようとしなかった
くせに、

勝手に世界は真っ黒だと思い込んでいた。

真っ黒でも何でもなかったのに。

ただ、色の無いつまらない、くだらない時代だったただけなのに。

雨の止まない一日だったと思う。

キクマサは体中傷だらけで、とにかく奴らから逃げていた。

とにかく奴らから逃げていた。

中学生になって、そうそうのことだった。

学校なんてほとんど行かなかった。

不良の中でさえ有名な、手に負えない不良だった。

今となっては、かなり馬鹿げたことだと思っけど、

ちよつとしたことで、本当に地獄を見るような、そんな暗い世界だった。

言えない様な悪事もしてきたし、

他人が傷つくのを見て、嘲笑っていた。

そんな、色の無い時代だった。

こんな抗争よくあることだったけど、とにかく今日はひどいものだ。

雨の音が、やけに耳に付く。

キクマサは街角のビルの、灰色の壁に手を当て、息を整えた。
壁に血が付くけど、すぐに雨に流される。

まるで、自分たちみたいだ。自分たちみたいにあっけなく跡も残ら

ない程意味の無い存在。

足音が聞こえる。

早くここから立ち去らなければ、奴らに見つかる。

血が落ちる。

足がふらつく。

ああ・・・だめだ。目がかすむ。

あちこちで耳障りな争いの声。まだ子供であるくせに、粹がって強がって、くだらない事ばかりやっている。

金属バットを引きずるような、叩き付けるような音。

誰かがキクマサを見つけたようで、何人もが追いかけてくる。キクマサは舌打ちをして、痛む足を引きずって逃げた。

捕まってたまるものか。

あんな奴らに。あんな奴らに。

自分もあんな奴らと何も変わらないくせに。

ビルの隙間をぬって、行く当ても無く逃げた。

ふと、目の前の色が変わる瞬間をキクマサは見抜いた。暗いビルが立ち並ぶ通りを抜けたら、そこには、不思議なくらいに

場違いなレンガの壁。なぜだかそれにハッとさせられる。

ひび割れたところから、庭が見える。

何とも異様な空気。

でも、不思議と吸い込まれるような。

洋風の庭、静かな霧。呼ばれているような、ぬるい雨。

誘いの風。

ここが、誰かの家で、誰かの庭だなんて考えてなかった。
キクマサはレンガをよじ登る。

その小さな庭に降り立ったとき、無意識に深呼吸した。

レンガの道と、雨にぬれた花々。
道に沿った木々と、不思議な霧。

こんな空気初めてだ。

しんとした、たった数秒の沈黙。
音の無い存在感。

あまりにも不思議な感覚に、キクマサは傷の痛みや、奴らから逃げ
ていたことを忘れていたが、急に目の前がふらついてひざまずいた。

息が荒れている。やっぱり、傷は酷いのか。

その時だった。

空気の流れが変わったように思えたのは、きっと勘違いなんかじゃない。

目の前に誰かが現れた。

「……………誰だい？」

長いスカートに、長い長い銀の髪。

誰だ……………？

意識は途切れた。

暗い闇に、銀の粉がチラチラ降り始めた。
綺麗で胸騒ぎがする。

切ないくらいに美しい。美しくて苦しい。

いつたい自分は何を求めていたのだろうか。

砂を手を取った。

「……………」

息を荒げ、キクマサはソファから飛び起きた。

「おや、起きたのかい。ああ、まだ動いちゃいけないよ、酷い傷なんだから」

「……………」

その人は、髪がすべて真っ白になった老女だったが、とても不思議なムードを持った人で、キクマサはいまいち自分の状況が読めずにバツの悪そうな顔をしていた。

「あんた、私の家の庭で倒れていたんだよ。いつたい何だっそんな傷を負って。血だらけだったんだもの、驚いたよ」

老女はポットで、ティーカップにお茶を入れ、キクマサの前に置い

た。

ふわりと、濃いハーブの香りがする。

キクマサは相変わらず、顔も上げずに黙りこくっていた。

「…私の名前は、カトレア・オーディール」

キクマサはドキツとして顔を上げた。異国の名前だったからだ。

初めてしつかりと、そのカトレア・オーディールの顔を見た。やはり外人のはつきりした顔立ちであった。すらつとした体に、長く緩やかな白髪。

カトレアはゆつくりと笑った。

「不良少年達と喧嘩でもしたのかい？　オノダ・キクマサ君」

「……！？　何で俺の名前……」

キクマサは顔をしかめる。

カトレアはくすくす笑うと、エプロンのポケットから黒い財布を取り出した。

「……！！？」

それは、キクマサの財布だった。カトレアはニヤアと愉快そうに笑うと、財布の中から1つのカードを取り出し読み上げた。

「オノダ・キクマサ……ふーん、この歳でカードをもっているとはけったいな。今は学校の時間じゃないのかい？　…まあいいか」

カトレアはカードを財布の中に戻して、キクマサのほうへ投げ返し

た。

キクマサはとても複雑な顔でそれを受け取り、そしてまた、その女を見上げた。

ここから出て行きたい。

こんな所に居たくない。

それなのに、体中が痛くてどうしようもない、そんな自分に腹が立つ。

自分はいったい何をしているのだろうか。こんな見ず知らずの外人の所に居たって、何にも得な事は無い。

「私、あなたの名前が好きだねえ。“キクマサ”って、この国でも珍しいだろ」

「……………」

「この国、日本の美しい花だ。菊の花から付いているのなら、なおさら……」

キクマサは、冷めた目でカトレアを見上げた。その視線はこれまでの会話の中で一番鋭かった。

「あんだ、この花がいったい何なのか知ってんのかよ」

「……………」

「…菊の花が美しいもんか」

キクマサは、声を絞り出すように言った。

カトレアは、最初は驚いたように目をぱちぱちとさせたが、その後はなんだか落ち着いた瞳でキクマサを見つめる。

「…どうして？」

「死んだときに、捧げる花だからだ」

キクマサは、もうそれ以上に答えなんて無いんだ、というように断言した。

カトレアは一時、じっとキクマサを見ていたが、視線をそらす。

「…なんだ。あんた死が美しくないとか、言うのかい？」

「……………」

「死は人生の終わり。締めくくり。自分のすべてを白紙にもどす。綺麗じゃないか」

カトレアの物言いに、キクマサは睨む様に彼女を見る。

「死んだら終わり。何もかもだ」

「そうだ。でも死んで、残るものだってある」

カトレアはそう言うと、ぼろぼろのエプロンから何かを取り出した。それはバラバラと音を立て、テーブルの上に色とりどり美しく散らばっては、規則な形で静止した。

ただの絵の具のチューブだったのに。もうほとんど絞り出したようなものまで。

「人々に植え付けられた、鮮明で色鮮やかな記憶」

そして彼女は立ち上がった。

「…まるで絵のような」

キクマサは言葉に詰まった。まさかそのように言い返されるとは思っても見なかったから。

自分の状況に翻弄されてあまり意識していなかったが、この部屋はオイルの匂いで満ちている。

しかしまあ、なんと懐かしい匂いがするものだ。

油の古い、その香り。

キクマサは、部屋のその奥を見た。そこには、先ほどのような、絵の具や油、筆などが雑においてある。

後ろ向きに立ちぼうけのイーゼル。
物言わぬキャンバス。

「あんだ、油絵を描くのか…？」

キクマサは不意に尋ねた。

「ああ…よくわかったねえ。あんだみたいなのが油絵だって」

カトレアは少し驚いたように。

キクマサは、なんだかよく解らない焦燥感にせかされ、立ち上がった。

た。彼の視線は一直線に、背を向けたキャンバスの方へ向いている。体は痛いのに、わざわざ堪えて引きずって、それでも、その絵を見たいと思ったのだ。

「……………」

それは、F50のサイズ。割と大きなキャンバスである。

青の色を基調として、菊の花が描かれていた。

“ 青菊 ”

死してなお、生き続ける花よ。

私をいつか、彼の国へと。そしていつか、この国へと。

それを繰り返し、何度この花を軽蔑したか。

再び、戻れる日まで。

／以下省略

キクマサの頭の中で、何かが途切れた。
まるで、急にテレビが壊れたみたいに。

コンセントを抜いたみたいに。

何だったんだ、今のは。

絵を見て引き込まれたのだ。その世界に。

何とも言えぬ衝撃にクラクラしたキクマサは、その場に座り込んだ。座り込んだまま、それでも目の前の絵から視線を逸らす事が出来なかった。

訳も分からず涙が出た。ただ、目の前の絵を見ただけなのに、押し寄せる感情は嘘をつけない。

これが、感動というだけで終わらせられるものなら苦労はしないのに。

「あんだ…もしかして……」

カトレアは、キクマサに駆け寄ってから、その様子をジッと見た。そして、その先の言葉に詰まった。

それくらい、彼は泣いていた。

ただ、その絵を見ただけ。それだけで心の中は乱され暴かれたのだ。

そういう絵だったのだ。

今思えば、そう言った“感動”という名の物語を直に見れたことは、この上なく幸せで稀なことだったのかもしれない。

そういう絵と出会えたということ。

キクマサは、“絵”をみるのが初めてではない。
彼の実の母は、昔日本で名の知れた画家であつた。

母の絵が、キクマサにとって唯一の“絵”であつた。
今までは。

|
d
r
a
w

02：情熱を知っている

絵を描きたい、描かなければと願っていた自分が居る

自分は情熱を知ってたはずだ

「へえ、あんたあの“カツキ・サキコ”の息子かい？」

キクマサがようやく落ち着いて、自分の話をポツポツと言い出した。カトレアは、有名な画家の息子だと言っ彼に驚く。

彼女は長い外国の葉巻を吸いながら、そんな彼をまじまじと見ていた。

「それは何とも奇運なことだ。私も一応あちらでは名の知れた画家だったんだよ。それで、あんたは絵を描くのかい？」

「もう…とつくの昔にやめたよ。……見たらわかるだろ、今じゃ喧嘩ばかりの不良だよ」

「そりゃそうだ」

カトレアは大声で笑った。彼女は何だかとても御機嫌で、一方的にキクマサと馴染んでいる。

「それならもう、絵を描く気は無いのかい？」

「……………」

キクマサはハツとして、一瞬目をそらし、

「描くわけないだろ…絵なんて…。母さんは絵にのめり込みすぎて…あの男に捨てられたんだ…。絵って残酷だよな…」

どこかを酷く睨んでいる。過去の向こう側を。

「母さん…自殺したんだよ」

美術は時として、人を惑わす。そういう力を持っている。

カトレアはキクマサ向かって静かに、でも意味深な笑みを浮かべるとテーブル越しに身を乗り出し、キクマサにとって、きつと一生ついてくるであろう質問をした。

「それなら…あんたにとって、美術って何だい…？」

「……は？」

「怖いかい、美術が…」

カトレアの声はよく響く。痛いくらいに。

キクマサは言葉が出ずに、ただ、その質問への驚きに瞳を揺らしていた。

「…何だって？」

「怖いかいって聞いたんだ。美術は時として残酷。お前の言っていることは正しいよ、キクマサ。私はそれをよく知っているのだから。お前は母を殺した美術が怖いかい？ だから絵をやめたのかい？ お前も父親に捨てられるのがこわかったんだろ？」

カトレアは、まるでわざとキクマサの心の奥を引きずり出そうと、ズバズバ言いたい放題だった。

しかし、キクマサは何だか疲れきったように、少しだけカトレアを睨むと、

「だったら何だって言うんだ。お前に何の関係があんだよ」

声を低めてそう言った。

目の前の彼女は口元に妖しい笑みを浮かべ、「ほお」と満足げにしている。

「あれだけチクチク言ったのに、熱くならないねお前は」

「おあいにく様、俺はもう父親には捨てられたも同然だね。今や一人で他のマンションに住まされているからな。…あいつはさっさと新しい家庭作って、幸せにやってる」

キクマサはいたって冷静だった。

でもその分、落ち着いた声で自分の現状を口に出すと、何だか少しだけ胸が痛かった。

キクマサは次の日もここにいた。何だかこの場所から離れられないのだ。

きつと、懐かしい。懐かしすぎるから。

母と同じ香りが、絵画を描く空間の匂いが、このアトリエには溢れている。

カトレアもキクマサを追い出さなかった。この外国の老女は不思議な人だ。キクマサは今まで、こんな人に会ったことがない。

彼女はよく、自分の庭を散歩してスケッチして回ることが多かったから、キクマサはその間に、この家のアトリエをこっそり見て回った。

白い石膏像が並ぶ部屋。油まみれの古臭い部屋。
ガラス張りの日当たりの良い部屋。

この家の中はどんな場所でも不思議な力を帯びている。

キクマサは油絵の道具が沢山置いてある部屋の、あるキャンバスの前で立ち止まった。それは白い、無のキャンバス。

変な衝動にかられるのを、自分自身良く分かっていた。

久しく絵など描いてないし、長い間描きたいとも思わなかったのに、昔の、絵が好きで好きでたまらなかったころをどうしても思い返してしまうのだ。

母はキクマサに絵を教え、彼が絵を好きになるのを見守ってくれていた。

しかしそれだけでなく、外で自然と触れあったり、様々な生き物を見たり、音楽を聞いたり、そういうことも一緒にしてくれる人だった。

キクマサは絵が好きだ。

本当は今でも。

キクマサにとって、絵とは母だったから。そして、母とは憧れだったから。

だからこそ母が死ぬと、自分の中の絵だって消えてしまう。
絵を描く意味も、理由も目標も無くなったのだ。

「……………」

彼は、ただその白いキャンバスを手でなぞった。
手触り、こすれる音、それは今も昔も変わってなどいない。

そして、その場に転がっている筆を取る。
もう、筆を取る意味などなかったのに。

ただ、がむしゃらに、ただ自分の思うままに、

絵を描く怖さに負けたくなくて、

油の光、色の魔力に翻弄されながら、彼はただ夢中で色を乗せた。
その白いキャンバスに。

神様

美術の神様

どうか、絵を描かせて下さい

カトレアはスケッチから帰ってきて、そのキャンバスを見た瞬間に息をのんだ。手に持つスケッチブックを落としてしまうくらいに、力が抜けていった。
何も描かれてないはずのキャンバスに、見知らぬ色がのっている。しかし、それは到底無視出来るようなものではない。

それは言葉より確かな、訴えだったから。

“ 罪 ”

僕が再び筆を手にしたことをお許し下さい。

母さん

彼女は、その絵から目をそらすことなく、頭に強く響く訴えを直で感じ取り、へなへなと座り込む。

『……何と……』

震える手を握りしめ、ニヤリと笑うと、胸に湧くザワザワとした感覚に鳥肌を立てた。

『素人の絵で、“イマジン・ストーリー”を見ることになるとは……』

それは、歓喜の歌。驚きと裏表の喜び。

ただの色をざんばらにのせただけの、デタラメな絵だ。

なのに。

「…なのに…あんた… 本当に絵が好きなんだねえ…」

疲れきって、ソファで眠るキクマサに向かってそうつぶやいた。技術とか、上手い下手とか、そういうレベルの話ではない。

そうではないのに、他人に訴えかける絵が描けるのだという事。カトレアは原石を見た。

この、良くも悪くも、強い絵への執着心。

これがどれだけ、この少年の感性と才能への大きな武器となることか。

キクマサはソファで静かに涙を流した。眠りの中で涙した。やはり、自分は絵を忘れてはいなかった。

体が覚えていて、今か今かと待っていたのだ。

ごめん。

ごめんね、母さん。

あなたを殺した絵を、俺は諦められなかった。
あれだけ、落ちるだけ落ちて、色の無い時代を生きてきたというの
に。

次の日の朝、カトレアはキクマサに言うことになる。

「…絵を描きな、キクマサ。あんたは絵を描かなきゃだめだ。…こ
こで絵を教えてあげる」

彼女の視線は、彼を一心に捕えている。

「私があんたに、絵を教えて、そしてその先を示してあげる」

教えてあげる。

世界には、美しいものが沢山あるのだと言うこと。

「…見せてあげる、世界の広さを」

君のような子こそ知らなければいけない。
見極められなければいけない。

この世界の、あらゆる姿を。

後に彼は彼女の手を取り、美術という紙一重の世界に足を踏み入れることになる。

この出会いから約三年間、キクマサは彼女の元で、彼女の弟子として、絵画の技術や美術の精神を叩き込まれる。

時は彼を待っていたのかもしれない。

彼の力が目覚めるのを。

キクマサは16歳になる。

ある日の朝、カトレアは二人で過ごしたテーブルに、一通の手紙を残してアトリエから消えて居なくなった。それは前触れも無く突然の事で、キクマサはと言う気持ちにもなれなかった。

彼はこの空虚な空間で、彼女の手紙を読んだ。

“キクマサへ”

私はもう、次の場所へ行かなくてはいけません。
私の旅は、まだまだ続くのですから。

あなたはこれから知るでしょう。美術の本当の意味を。

あなたにとって、美術とは何なのか。
今なら答えられますか？

私はあなたに、次の舞台を用意します。
もう手続きは済ませているので、心配せずに、世界の広さ、美しさを
知りに行きなさい。

カトレア・オーデールより

弟子 キクマサに、私の全てを込めて

次の紙は、ある美術学校への入学手続きであつた。

汽車の音がキクマサを現実の世界へと戻す。
キクマサは窓から、その目映いばかりの白と青を。ギリシアの海を
見て、絶句した。

「……エーゲ海って、こんなに青いんだ」

世界って広い。

だからきっと、あらゆる姿の中に、美しいものがあるって信じたい。

世界には、沢山の美しいものがある。

あなたはいつもそう言っていたから。

その本当の意味を知るために、ここまで来たのだから。

l
d
r
a
w

03：ルネ・ヴィルトン美術学校 上（ルームメイト）

様々な歴史、因縁を掲げた

我が偉大なるルネ・ヴィルトンよ

> i 3 3 4 8 3 — 1 3 6 5 <

キクマサはアテネにいた。

何とか、あの言い様の無い旅を終え、この場所に着いた次第である。

「すごいなあ…これが学校と言えるものなのか……」

都心外れの丘の上に、その学校はあった。広大な敷地であると言うのは、校門の大きさから既に伺える。レンガ造りの小道の向こうに、白い大きな建物が覗く。

とにかくその学校は、学校と言うよりは古い城のようでヨーロッパの情緒を思わせる。

キクマサは初めての空気に胸が躍った。

静かだ。

校門から本館までは遠く、長い広い道が続く。両側はきれいに手入れされた庭で、芝が光に照って美しいグリーンを彩る。そして芝生のさらに向こうは、ずっと森のようであった。緑とレンガの赤と、城の白い色がとても良い調和を作っている。

そして、ふと思う。ここにはやたら噴水が多い。

形は様々、いたるところに噴水があるのだ。常に耳には水の流れる音が聞こえる。

道の途中、今まで見たのよりそれは大きく立派な噴水を目の前にした。

道の分かれる、開けた中央広場のようになっている所に、その噴水はがんとして佇んでいるのだ。

しかし、キクマサが息を飲んだのはその噴水のせいではない。

「……………」

噴水の外に漏れる微かな水しぶきを、ただひたすら見つめる少女がいた。

ブロンドの緩やかに波打った髪が、その景色に見事に映えるのだ。

ポロン…

銀色の高い音が胸の底に落ちた。

ふと、少女はキクマサの方を向いた。キクマサはあまりに凝視していたので、慌てて目をそらしたのだが、彼の動揺は見取れただろう。彼はそのまま通り過ぎる。

二人のすれ違い際に、何かとても不思議な空気が、ふわりと無色のミストを天に放った。

その時の時間の流れは、やけにゆっくりで、印象的であった。

中央棟のガラス張りの玄関の前に、一人の女性が立っていた。キクマサはその女性にペコリと頭を下げる。女性は上品に、にこりと笑う。

「ルネ・ヴィルトンへようこそ。歓迎致しますわ、オノダ・キクマサさん。私は絵画科の教師をしているネイリー・ドールマンです。あなたの担任というわけです」

ネイリー先生はキクマサを招いて、2人で校内へ入った。入ったとたんに、パイプオルガンでも聞こえてきそうなほど、厳かで、神聖な空気。中央ホールと言ったような、最上階まで筒抜けのバロック

調の建築。

キクマサが呆気にとられているのを、ネイリー先生は頷くと、

「今はまだ春休み中だから、新学期まで人は少ないでしょう。新生は、入学式一週間前から、寮に入るのを許されるので、これから次々と寮入りするわね。あなたのルームメイトも今日来るのよ。仲良くなれると良いですね」

見知らぬ土地、見知らぬ世界に戸惑った様子のキクマサに優しく語る。

その後も彼女は、その校内を案内しながら、これから先のことを話してくれた。

「まだ新学期は始まっていないけれど、新生は別として、生徒たちはきつと作品づくりに取りかかっているでしょうね。もうすぐ大きなイベントがありますからね」

「……大きなイベント……ですか？」

「ええ……そうですね」

ネイリー先生はキクマサをチラツと横目で見ると、

「この学校はね、新学期早々大きなコンテストが開かれるのです。そうね…、キクマサさん、あなたも出して見てはいかが？1年生で出す人も少なくはないわ。あなたはあの方が推薦してきたのだから、大きな期待がかかっているのですよ」

さりげなく、でも嫌みに聞こえないよう心がけた様子だった。

「あなたは一応、推薦入学という形でこの学校の入学を許されています。明日、少しばかり面接をしますね」

「はい…」

キクマサは、ふむと思ったくらいで、興味はむしろ校内のあちこちの美術品に向いていた。

ふと、その中でもひとときは目を引く大きな絵があつた。

キクマサには、その絵が誰のものであるか見ただけで分かったから。

「……カトレアさんの絵……」

それは、柔らかいタッチと優しい色あいの風景画。雰囲気はまさしくカトレアのものである。この学校の庭…あの噴水を描いた絵。違うな…と思う。やはり高見の人物なのである、あの人は。

「……分かるんですね。その通り、これはオーデール夫人の描いた絵画」

「オーデール夫人…？ カトレアさんのことですか？」

「ええ。この学校の旧理事長の奥様でいらつしやいますわ、あの御方は」

キクマサは、これにはやはり驚いた。

しかし、なるほどと納得したのも事実、そうであるからこそそのキクマサの推薦入学なのである。

「ネイリー先生!!」

その時、廊下の向こう側から、先生を呼ぶ声が聞こえた。キクマサとネイリー先生は、同時にその方向を見る。

「まあ… “ルネ・ルビー” …… ご機嫌いかが？」

「ご機嫌は良いですよ、先生。それよりも、さっき教頭先生がネイリー先生を探していました。…何か急ぎの用事っぽかったけどなあ…」

キクマサは、目の前にやって来た、“ルネ・ルビー” と呼ばれた男を見上げた。

長身で、スタイルの良いかなりの男前で、彼はキクマサに気付くと、愛想良く笑いかけてきた。

「まあ、どうしましょう…。今からオノダさんを寮へ連れていかなければならないというのに。そうですね…ルネ・ルビー、あなたにお任せしてもいいかしら。一応、絵画男子寮の副寮長ですものね」

ネイリー先生はその男子にお願いすると、慌てた様子でチラッとキクマサを見る、

「彼は、絵画科の四年生、レッドリー・ヘッドバーンです。…一応“ルネ・ヴィライアー” の1人でもありますので、分からない事があつたら聞いて下さい。さて、ルネ・ルビー…新入生のオノダ・キクマサさんを、男子寮に連れて行って下さい。先輩らしく、親切に…。まあ…あなたには言うまでもないですけど」

レッドはネイリー先生の顔色を伺うように、ニコリと笑った。

「わかりましたよ、先生。…てか、先生僕について“一応”多すぎますって」

ネイリー先生は眉を上げ、粹に笑うと、クルリと姿勢良く立ち去ってしまった。

この場所には今やキクマサとレッドリー・ヘッドバーンだけで、それ以外は静かな廊下の日の光だけだ。

「…さて……」

レッドリー・ヘッドバーンはキクマサのほうに向き直ると、

「オレはレッドリー・ヘッドバーン…ってさっきも言ったけどね。レッドでいいよ。この絵画科の寮のことなら、知らないことは無いから」

「……よろしくお願いします。オノダ・キクマサです」

キクマサはレッドを探るように見上げ、当たり障りの無いあいさつをした。

彼とは4つ差となるが、とても大人のように見える。

二人は並んで、男子寮まで歩きながらいろいろな話をした。というより、レッドが上手い具合に話を運んでくれているのだが。

この先輩は、人に好かれやすいだろうなと、キクマサは密かに心で思っていた。

「キクマサ君は日本人かい…？」

「……分かるんですか」

レッドの唐突な質問に、キクマサは多少面食らった。

「うーん……名前の響きから何となくね。俺の友達にも日本人がいるから」

キクマサは隣のレッドを見上げた。

彼は相変わらずだが、視線はやはり大人びていて、片耳についている十字架のピアスが印象的であった。

「ありがとうございました。…先輩」

キクマサは、レッドに導かれるまま部屋の前に着いた。

レッドは顔の前でひらひら手を振って、陽気で爽やかな空気を壊さない。

「いやいや、これも先輩の役目の一つだよ。俺、四階の一番端の部屋だから、わかんない事があつたらいつでも聞きにおいで」

彼の滄刺とした笑顔は、とても清々しい。

キクマサは正面きつて、やっと気づいたことがある。

「……………」

彼の胸には、赤い美しい宝石のついたブローチが。それはとても目を奪われるような。

見ていると、変な魔力に包まれてしまう…。

「おい、キクマサ君」

レッドの呼び声で、ハッと我に返った。
今のはいったい何だったのだろうか。

「大丈夫？」

「あ……………つすいません…」

キクマサは少し頭を叩いた。不思議な感覚はいまだ体に残っているのに。

彼は知る由もなかったのだ。今感じたものへの圧倒的違和感を。美術品の本当の意味も、恐ろしさも。

レッドの胸に付けていた、赤いルビーのブローチ。
この学校の象徴。

歴代の“ルネ・ヴィライアー”の意志を含んでいる、我々の誇りと
因縁の印よ。

キクマサは部屋に入ろうとして、ふと名前の標識に目が止まった。

「……フォルテ・ゴッドバルト……？」

キクマサの名前の下に、もう一つ名前があったのだ。ルーム・メイ
トという事だろうか。

部屋を開けると、温かい空気が溢れてきた。日当たりのよく、簡単
な作りだがとても清々しい部屋だ。白くて窓の大きなせいで、ギリ
シアの青い空がそのまま部屋を飾る絵画になっている。

静かで、窓から差し込む光に乗って、キクマサは何だか胸の奥の温

かい物を感じた。

新しい世界

新しい環境

カトレアのアトリエを見つけた時と、同じ何かを感じる。このワクワクはとても気分の良いもので、それでいて落ち着いている。

キクマサはカバンをベットの脇に置いて、自分の机の表面をそっと撫でた。

その時、扉の外でガタガタと物音がしたので、キクマサはその方を見た。

ガタガタ音はするものの、なかなか開かないのでもしかしたら思っ
つて、中からキクマサが開ける。

「……あ……」

扉の外には、黄色に近い茶髪の少年が、重そうな荷物を両脇に抱えて立っていた。

額には太いバンダナをしていて、背が高い。

「うわ…ごめん。荷物とかスゴくて、俺。ごめん、ありがとう」

「え、いや……どうぞ」

キクマサは扉を全開にしてあげた。

ズルズル入ってくるその少年を見流しながら、なるほど、彼がルームメイトかと心で頷いた。彼は「やあやあありがとう」とばかり言っている。

彼こそが、フォルテ・ゴツドバルト。

この先、キクマサと共に美術の道を歩んでいく、無二の大親友となる男であった。

「そうか……君は日本人なのか。あ、俺はベルギーから来たんだよ」

フォルテという男は、特に臆することなく、キクマサに色々話しかけてくる。

「へえ…ベルギーか…」

キクマサは、『ベルギーってどこだっけ…』とか、実は心の中で思っていたけれど、そんな事とてもじゃないけど言えなかった。

フォルテは、自分のベットのの上に気楽に座り、何だか楽しげにあちこちを見渡している。

「いや、俺まさか、このルネ・ヴィルトンに現役で受かるなんて思っちゃいなかったからさあ。これで“ルネ・ヴィライアー”になれたら最高のなあ」

「ルネ・ヴィライアー…？」

先ほどからチラホラ聞く言葉であつた。ネイリー先生もレッド先輩もごく普通にその言葉を使っていたけれど、キクマサにとっては未知なる言葉でしかない。

「…え？ 知らないのかい？ ルネ・ヴィライアー制度さ。このルネ・ヴィルトンの最大の特徴！」

フォルテはベットから身を乗り出し、キクマサに訴えかけるようにキクマサは慌てて頷く。

フォルテは口をあんぐりさせていたから、キクマサは気まずそうに視線を斜め下に向けた。

これを知らないのは、かなり有り得ないのだろうな。

「…この学校はね、全5学年で、絵画科だけでも1000人以上はいるんだ。その中の絵画科トップ16人を“ルネ・ヴィライアー”って呼ぶんだよ。要するに特待生だ。“ルネ・ヴィライアー”になると学費が免除されるし、進路の幅も広がるし、何より世界中の研修に行ける。この学校の生徒は皆、この枠を目指しているんだ」

「……へえ」

キクマサは、いまいちピンとこない様子で、他人ごとのような反応であつた。フォルテは顎を支えていた腕をズルッと滑らせ、呆れた顔でキクマサを見る。

「本当に何も知らないの??」

「……うん。」

「じ、じゃあ逆に聞くけど、何でこの学校を選んだの？ 大抵はルネ・ヴィライアーを目指してやって来てるのに！！」

フォルテの信じられないというような顔を前に、キクマサはフムと腕を組んで、堂々と無知をさらす。

「…日本で絵を教えてくれた人が、ここの旧理事長の奥さんだったらしくて。まあ俺もさっき知ったんだけど……いつの間にか入学手続きされてたんだよ」

「まじ？ それってスゴくない？ ……旧夫人ってカトレア・オーデイルだろ??」

「…知ってるんだ」

キクマサは顔を上げた。

「知ってるも何も、このギリシアでは超有名な画家じゃないか。なんか世界中回ってるって聞いてたけど、…日本でお前に絵教えてたんだな。いいなあ…」

「……」

確かにあの人は、どれくらい高見にいるのか分からないくらい絵が上手かったし、自分でも画家だって言っていた。

だけど、あのアトリエでは自分とあの人だけで、それ以外はなかったから実感が無かったんだ。

あの人は、やはり世界を舞台に立ち振る舞っていた人。
世界を震撼させた画家であつたと。

「……ま、いいか」

フォルテはコロツと気を直すと、

「話を戻すけどね、とりあえずルネ・ヴィライアーになるのって本当に難しい」

憂いを込めるように、ハアと溜め息をついた。

「もうすぐ、この選抜の“ルネ・ヴィライアー・コンテスト”があるけど。略してルネ・コンね。今年は…何卒だっけな。毎年枠数は去年のヴィライアー卒業者の数で決まるからね…。ほとんど上学年が取っていくしなあ…」

フォルテの話で、キクマサは、さっきネイリー先生が言っていたコンテストの意味を、やっと理解した。

「ルネ・ヴィライアーとは、言わばこの学校の象徴。みんな憧れるんだよ。絵画科のルネ・ヴィライアーは宝石の異名をもらえるんだ。…主な16色を基盤にしてね」

「……宝石の異名…？」

キクマサは待てよと思った。宝石と言えば、思い当たる節がある気がする。

「そう。宝石。…確かルネ・ダイヤモンドって日本人じゃなかったっけな。初の日本画特待生で話題になってたから…」

フォルテは斜め上を向きながら記憶をまさぐっていた。キクマサは探るような口調で、

「…じゃ、ルネ・ルビー…っていうのもその一種？」

「え？…うん。何だ知ってんじゃん」

「知ってるってどうか…、さっき会ったってどうか」

あの長身で、ハンサムだった、レッドリー・ヘッドバーン。確かにルネ・ルビーって呼ばれていた。

そうか、あの人はこの学校の象徴である“ルネ・ヴィライアー”の一人だったのか。

やっと色々なことが繋がりだしたキクマサ。

「へえ！！ 凄いな、会ったんだ！！」

フォルテは、この例の“ルネ・ヴィライアー”というのにとっても懂れているようで、反応に熱がこもっている。

キクマサでさえ、確かにこの制度は面白いなと思ったし、何よりそんな、この学校の代表のような人たちの絵を見たら、きつとどんなに凄いのだらうと思う。

“ルネ・ヴィライアー”か…。

高い音を立て、心の奥底に、一つの鍵が落とされた。

見てみたい。

見てみたい。

手が届かないかと思いたくもないのに、そのくらいの衝動を絵に求めている自分もいるから。

鍵が落とされた音がした。

l
d
r
a
w

04：ルネ・ヴィルトン美術学校 下　く美しきものの世界く

落とされた鍵を、そのまま触れずに沈めておくのも、

水から引き上げ、鍵穴を求めるのも自分次第。

キクマサとフォルテは一時談話した後、このルネ・ヴィルトンの校内を見て回る事にした。入学式はまだ5日後だとはいえ、早々に、この広く複雑な学校を覚えてしまわなければ。

絵画科の寮は絵画棟の隣だ。

「ルネ・ヴィルトンは全部で7つの棟に別れているんだ。中央棟と…六つの科だね。…六つの科があることだって今知ったんだろ、お前は。へえーそうなんだー、とか思ってたんだろ、どうせ」

「うん」

キクマサは平然とした顔で、当然のごとく頷いた。

フォルテは「しょうがないな…」とか言いながら、少し嬉しそうに、

「いいかな、キクマサ君。この学校は主に六つの科から成り立っている。その中で選択別に分かれたりするけどね。…例えば…」

フォルテは廊下をキョロキョロと見て回ると、実技室と書かれた表札の前で立ち止まり、それを指差した。

キクマサも、彼の指先に視線を移し、その表札を見た。

それは、実に見事に造られた、金属と木を用いた素晴らしい彫刻であることは一目瞭然であった。

「こういう表札は、確か彫刻科の奴が創ったはずだよ。凝ってるよなあ…」

「…彫刻科…か…」

キクマサはゆっくり頷いた。

なるほど、美術は決して一つではない。絵画だけではないのだ、と納得する。

「他には、ファッションデザイン科とか、映像科とか。珍しいのが建築ガーデン科だな。“庭”を扱うのはうちの学校くらいだよ…。あとは、絵画科と並ぶほど規模の大きいデザイン科だね。デザインも幅が広いからなあ」

フォルテとキクマサは校内を歩きながら。

「それでもやっぱり、ルネ・ヴィルトンって言えばファイン系だけだ」

二人は廊下を抜け、絵画科の中央ホールに出た。

広々高々と筒抜けていて、バロック調の造りが厳かで、やはり校内にも噴水があった。その噴水の中心に立つブロンズ像の女性が、黒く艶かしい光沢を内々に秘めているように謎めかしく、ゾクツとする。

水の、ザアアと流れる音に、キクマサとフォルテは一度立ち止る。

これが、ルネ・ヴィルトンなのだ。

学校とはいえ、空間や空気を全てを材料に美術品を作り出している。

その時、フォルテが急に噴水の向こう側に駆け出した。何かに気がついたように。

「え…、おい!!」

キクマサは少し驚いて、彼の後を追った。

「……………」

フォルテは、三枚の絵の前で立っていた。

その絵は真ん中のものを一番高見に、左のものを二番目に、右のものを三番目に掲げ、それは堂々として、とても目を引きつけられた。

「……これ……」

キクマサはその3つの絵を見上げた。

「今年の受験者トップ3の絵だ。……毎年ここに飾られるらしいんだ。……凄いや」

フォルテは三枚の絵に釘付けだった。特に、真ん中の一番高くにある絵に。

「……凄いや、レイ……トップ入学だったんだ」

「……レイ？」

「うん、あの中央の絵。あれはレイデル・リローズっていう子の絵だ。俺、同じ美術学院出身だからわかるんだ……。あいつはいつか、ルネ・ヴィライアーになるよ……」

フォルテの表情からは、何というか、悔しさや後込み以上に、尊敬のまざった喜びに近いものを感じた。

「……」

キクマサは再び絵を見上げる。例の中央の絵を。それは、キクマサが今まで見たことも無いような絵。

一瞬で目に焼き付き、離れない。
何だこれは…。

たくさんの子供が一人の大人の女性を囲み、本を読んでもらっている（ようにみえる）絵。

なんと美しい色、優しいタッチと強いタッチの絶妙なバランス。

なんと焦がれる絵であろうか。

“夢の話―前夜―”

孤児院を出たいかい？

いいえ、ミセス・リローズ。私はもう帰るところはございません。

孤児院を出たいかい？

いいえ、ミセス・リローズ。僕はもうあんな寒い夜を、一人で耐えたくありません。

それなら望みは何なのだい？

（少年と少女は顔を見合わせる。）

ずっとここにいたいのです。

（ミセス・リローズは困ったように笑う。）

それは無理だよ。大人になるのは出ていくということだから。あなたたちが戦争を終わらせなくちゃ。

／以下省略

呆然とした。

頭の中に、鮮明なイメージが叩きつけられたからだ。

イマジン・ストーリーだ。

イマジン・ストーリーとは、美術品から展開する物語のことで、あらゆる種の想像、妄想、そうせざるを得ない魔力である。描き手と鑑賞者の両方に、美術の力を必要とする。

感性だ。

フォルテはその絵を見つめながら、呟いた。

「…凄いよなあ…、相手に訴えかける絵が、もう書けるんだから…」

キクマサはまさにそのとおりだと思う。

技術があるとか、よもやそういう所の評価じゃなくて、いかに相手に語りかけてくる絵なのかという事。ダイレクトに印象強く、はたまた心にじわじわ来るような水の水面のような衝撃でも。

それが、どんなに感動を生むのかという事。

「ほら、レイの絵があるわ」

「ちょっと、待ちなさいよ、ルナシー」

その時、中央噴水越しに、二人の女の子の声がした。
キクマサとフォルテが振り返る。

「…あ、レイだ…」

フォルテは少し後ずさるような態度で顔をしかめたから、キクマサは不思議に思った。

二人の少女が、フォルテとキクマサに気づく。

「……あら、フォルテ・ゴッドバルト。ご機嫌いかが」

黒髪ショートカットで猫目の少女は、フォルテを見つけるやいなや、少し間をあけわざとらしく挨拶をした。

「やあ…、レイデル・リローズ」

フォルテは相変わらずたじろいでいる。
キクマサはフムと思った。

そうか。

この子があの絵を描いた子。

ふと、レイの隣の子が目に入った。

フワフワの金髪で、肌は透けるように白く、まるで西洋人形のような絵本に出てくるお姫様を地で表しているような美しい少女。

「……………あ……………」

見覚えがある。

さつき、外の大きな噴水の前にいた子だ。

金髪の少女はキクマサを見ると、やはりキクマサと同じような反応をして、そのままふわりと微笑んだ。

「レイ、この人たちどなた？」

金髪の少女は、背の高いレイを見上げて尋ねた。

「…ああ、このバンダナの奴は、フォルテ・ゴットバルトっていう、幼なじみよ。家が隣なのよ、やんなっちゃう」

「……………」

キクマサはフォルテを見上げた。

フォルテは何か言いたげで、でも何も言えなそうにして、口をつぐ

んでいる。

「それと……、そっちの茶髪の彼は、あんたのルームメイト？　へえ、あんたと違ってハンサムね。紹介してよ」

レイはニヤリと笑うと、猫目でキクマサを見上げる。

「オノダ・キクマサだよ。日本人だから、キクマサが名前ね。お前の言うとおり、俺のルームメイトだ」

フォルテはしらじらした顔で、キクマサを紹介した。
キクマサは「どおも」と頭を下げる。

「そう、よろしくね。私、レイデル・リローズっていうの。こっちの子はルナシー・ミディエム。私のルームメイトよ」

レイは隣のルナシーを紹介した。

「へえ、君と違って超美人だね」

フォルテは先ほどの事を言い返すように逆手に取った。
レイは右頬をひくつかせたが、フンと鼻で笑うと、

「さ、行きましょう、ルナシー。こんな所で足止め食らってる時間が惜しいわ」

彼女はフォルテを睨み流し、ルナシーを連れそこから立ち去ろうとした。

「あ、待ってレイ」

ルナシーは少しばかり振り返ると、

「ねえ、キクマサ君…私さっきあなたに会ったわ。そうよね」

鈴のような声でキクマサに聞いた。

キクマサは驚いたが、そのまま頷く。

「…ああ、噴水の所でだろ？」

さっきの、あのゆっくりした時間。

何とも印象的な空気は、今でも覚えているから。

君は、美術品のようにだった。

ルナシーは、何だか嬉しそうに顔を輝かせ、一度笑うとレイを追って行ってしまった。

金髪が揺れて、空気に光を落としていく。

感嘆の声を、心で呟くしかなかった。

フォルテは口笛を一つ吹いていたし。

「あんな子、実際にいるんだな…」

物語から抜け出したような、人離れた不思議な美しさが、あの子にはあった。

あの噴水での出会いは、決して偶然ではなかったと思う。

世界には美しいものが沢山ある。

それは、とらえ方次第で、なんとも言えるのだから。

この4人の出会いは、彼ら自身にとってとても大きな財産である。
後のキクマサにとって、なくしては有り得ない出会いだったに違いない。

彼らが踏み入れる世界は、万華鏡のように色鮮やかで、何万何千と
見方を変えていく。

妖しく際どい、美術の世界。

歳が近く、絵のレベルも近く、または遠く、それでもそういう人たちの絵を見て、

期待、不安、喜びを心に秘め、

微かな焦燥感を感じ、

今、美しきものの、未知なる世界への扉を開いたのだ。

I
d
r
a
w

05：セレネの祝福 上

月の女神セレネよ

今日の良き日を、我々の未来に繋いでください。

キクマサはベッドから飛び起きた。

昨日はひどく寝つきが悪かったから、何だかいまだに眠いけれど。

長い夢を見ていた。

一年前、この学校へ来た時の夢だ。

向こう側のベットで、フォルテがいびきをかいて寝ている。

「おい、起きろってフォルテ。今日は“新一年生”の入学式だぞ。レッド先輩に言われたじゃないか、今夜の歓迎会の準備は、俺ら“二年生”に任せるって」

キクマサは寝起きの頭のままで、フォルテを揺さぶった。

彼は布団にくるまったまま、小さな声で唸っている。

キクマサは溜め息をついた。

こいつとルームメイトになって一年たつけれど、朝起こすのにはいまだに苦労する。

一年前に、出会ったあの時の事を、俺は夢で見た。
噴水の隙間、合間からのぞく、色鮮やかな記憶。

そう。あれから一年たったのだ。
俺たちは今日から二年生だ。

窓の向こうから、朝日が見える。

一年前から続く、今日も何と、美しい朝。

このような朝が、いつまでも続きますように。

「見てみるよ、キク。新入生がたくさんいるぜ」

「そりゃそうだろ。入学式だからな、去年だってそうだった」

キクマサは、薄黄色と青の、ななめボーダーのネクタイを結びながら、フォルテの背中越しに下界を見た。

寮の部屋の窓からは、ルネ・ヴィルトンの正門あたりがよく見える。

いつもは静かで厳かな学校も、今日は打って変わってにぎやかで華やか。

「俺らもやつと先輩か。いいね、今年はどんなやつらが入ってくるかな」

フォルテはバンダナをつける前に、ワックスを手のひらで伸ばし、髪を立てたり飛ばしたりしていた。キクマサも当然、こういった作業は髪を洗う並に必要な事項である。

「あらー、やっぱダメか。ねえ、キク。お前の貸してくれよ。日本製の味を知ってしまったら、その他なんてただのでんぷんだよね、でんぷん」

「…でんぷんねえ」

キクマサはベット越しに、ポイと投げた。

「ところでキク。今年のルネ・コン、一次審査用の絵どう？　良い感じ？」

「…どうかな、あと二週間あるし何とかなるんじゃない。去年よりましだよ」

「去年なあゝ、あの時は無知だったよ。よもや入学して、たったの二週間で、一次通過できる絵が描けると思ってたこと事態が間違っていた。道理で歴代ルネ・ヴィライアーに一年生がいなかったわけだよ」

去年のことを、フォルテはしらじらと思い出していた。
確かにあの時は、本当に無知だったと思う。

上の学年は、もうずっと前からルネ・コン一次審査用の絵を用意していたのだから、一年生が入学して、たったの二週間でどうにかなるようなものでもない。

一次審査では、約三分の二が切り捨てられる。
たとえ一次で残っても、二次ではより強い先輩と競うのだから、なかなか生き残れない。

ルネ・コンは全部で四次まである。最後までとてつもない根気と集中力を要する。

ルネ・ヴィライアーになれるのは、本当に選ばれた人だけだ。
去年はそれがよくわかった。

「まあ、今年は二年生だけの推薦ヴィライアー枠も2つあるし。これ狙いしかねーだろ、実際」

「…推薦ヴィライアー枠？ 何それ」

キクマサは、一年たった今でも、分かっていることがたくさんあった。

フォルテはもう慣れたというように、平然と説明する。

「基本的に、ルネ・ヴィライアーになれるのは16人だけど、+2人分、推薦ヴィライアー枠ってのがある。なかなかチャンスの巡ってこない二年生の中で2人、一年契約のルネ・ヴィライアー見習いさ。これは一次の通過作品の中から選ばれる。だから二年生はとにかく、一次に命をかける。推薦ヴィライアーになれば、次の年でのルネ・コンは、そのままストレートで正規ルネ・ヴィライアーになれるのがほとんどだよ」

「…へえ……いいね、それ」

キクマサは、今始めて知った、なかなかおいしいシステムに感動した。

でも、冷静に考えてみて、二年生だけでも200人はいから、その中で2人っていうのも、なかなかの確立である。

「2年生で普通にルネ・ヴィライアーになった人っているの？」

「そりゃあ、稀にはいるさ。四年生にルネ・ガーネットがいるだろ、リオ先輩。あの人確か二年生でなつてたはずだよ。5年に1人って言われてんだぞ、二年生がルネ・ヴィライアーになれる確率は」

いったい5年間に何人、ルネ・ヴィライアーが入れ替わつての一人なのか、あまり知りたくないと思った。

シビアな世界だ。

一年生の入学式があっている間、二年生は男子寮の広間で、歓迎会の用意をしていた。

さすがは天下のルネ・ヴィルトン。

豪華なご馳走も目を輝かせるばかりにあるし、装飾だって妙にこだわっている。

キクマサはテーブルの向こう側で、ルネ・ルビーことレッドリー・ヘッドバーンが行き来しているのが見えた。

「さすがは今年の男子寮長。忙しそうだね、レッド先輩」

隣でフォルテが顔をのぞかせる。

その通り。去年四年生だったレッドは、今年五年生となり、しかも絵画科男子寮長となったのだ。

人望のある人は、肩書きも多いこと。

忙しそうではあったものの、彼は相変わらずにこやかで、周りにはたくさんの人がいて、

キクマサにとって、去年から憧れのまなざしは変わりようも無い。

新入生とは初々しいものだ。

去年の自分たちって、こんなだったのだろうか。絵画科の男子寮の寮入りは、やはり大いに男子寮であった。

「えー、新入生の諸君。入学おめでとう。俺は、絵画の男子寮長のレッドリー・ヘッドバーンです」

レッド先輩のあいさつに、周りの男子は無意味に歓声を上げている。

「こら、男うるさい。…えーっと、何言おうとしたんだっけ…、まあ、堅苦しい挨拶は抜きにして、それじゃあ始めー…っと、っと、っと」

レッド先輩が、うるさい男子をなだめながら、緩い挨拶を終えようとしたその時だった。

横から、黒髪で切れ長の瞳の、なんだか怖そうな五年生が、レッド先輩のスピーカーをもぎ取った。

胸には、黒い宝石。

「かりるぞ、レッド」

「ーっだ、団長!!? ま、まあいいや。…はい! 皆さん、静粛に。絵画科ルネ・ヴィライアーの“団長”から挨拶です。団長は短気で怖いから、言うことは聞いたほうがいいと、俺は思うね」
スピーカーの無いレッドは、できるだけ大きな声で言った。

キクマサでさえ、あの黒髪の男は知っている。

絵画科じゃ、レッド先輩並みに有名人だ。

「うおー、リュオン先輩だ。やっぱルネ・ヴィライアーの団長ともなると、オーラがすごいね」

フォルテはオーバーにのけぞって、キクマサに向かってつぶやいた。

いや、でもそうとしか言いようが無い。

彼は、黒のテクタイト。

絵画科ルネ・ヴィライアーを統べる、団長なのだから。

鋭い瞳は、会場を見渡した。

「俺は、絵画科ルネ・ヴィライアー団長のハク・リュオンだ。基本

的に、俺が今から言うことは絶対に守れ。最低限のルールだからな。守れなかった奴は、即、パルテノン神殿からバンジージャンプさせるからな」

その言葉に、会場中が、ざわざわしている。

これは嘘じゃないぞと、高学年ほど知っていた。

一年生は脅えている。

「一つ、規則は守れ。二つ、校内及び校外で問題を起こすな。三つ、他科ともめたら死んでも負けるな。以上」

リュオンは「ん」とスピーカーをレッドにおしつける。

レッドは小刻みに頷いて、苦笑いでそれを持つ。

「……はい。団長の言うことはちゃんと聞いてね。じゃないと団長が先生に、俺が先生と団長に怒られるから。まあ寮の細かい規則はパンフレットに書いてあるし、後で説明もするから、とにかく歓迎会を始めようか」

いつもは厳かな広間が、今日はいつになく騒がしかった。男子って何でこう、バカにド派手な演出が好きなのだろうか。コークやシャンパンを新入生に振りまいている。

皆が通る道なのだろうけど、（去年されたけど）ちょっとしたイビリだよな、とキクマサはしみじみ思っていた。
全5学年だから、歳の差もかなりあるし、五年生から見たら一年生なんてかわいいもんなんだろうな。

二年生は、去年のうつぶんを晴らすがごとく、飲み食いに一生懸命だった。

「おい、二年生！！ ちょっと蔵からシャンパン持ってこい！！
いくらあっても足りねーから！！！」

4年生のとある先輩が向こうから叫んでいた。
キクマサとフォルテは顔を見合わせると、

「俺らもまだまだ下っ端だな。取りに行こうか」

口をもごもごさせながら、フォルテは言う。

「……そうだなあ」

キクマサも“ノンアルコール”のシャンパンを飲み干した。

蔵は、会場から、少しだけ離れたところにあった。ほこりっぱくて、ひんやりしたところだ。

「それにしても、リユオン先輩は恐ーよな。見た目もだけど、雰囲気も」

フォルテはシャンパンのビンが入った箱を持ち上げようとして、重かったのか2、3本抜いてから、もう一度持ち上げた。

キクマサは目を光らせ、2、3本のビンを彼の箱に再び入れ直す。

「……おい」

「ま、あれだな。恐いけどオーラは確かにあるだろ。圧倒されるもんな……レッド先輩とは真逆だけど。陰と陽って感じで」

キクマサはしらっと話を流して、自らも一箱シャンパンをもちあげる。

その時だった。

バタバタとした足音と、悲鳴が聞こえて、2人は驚いた。

「助けてー！ー！ー！ー！」

甲高い少年の声。

ヒーヒー言っつて、泣きながら逃げている新入生が、蔵に駆け込んできてキクマサとフォルテの後ろに隠れてしまった。

「待て待てー！ー！ー！」

向こうで三、四年生くらいの男子生徒が、テンションMAXhigh

h で新入生を追いかけている。彼らは頬を輝かせながら、こちらに気づかず通り過ぎていった。

「……」

三人は多少の沈黙を守っていたが、フォルテがピンときたように、

「あ、そつか。…儀式だ」

「儀式…？」

「ほら、去年されたじゃん。この寮の伝統行事。新入生は先輩に追いかけられて、捕まったら、めちやくちや高く胴上げされる。お前、超平気そうだったけどな。オレは恐かったよ、やつぱ」

キクマサは一年前の今日を思い出して、苦笑いをした。

「ああ……あれか」

後ろでガタガタしていた、その一年生は、頭を抱えていまだにしゃがみ込んでいる。

「おい、大丈夫か？ もう先輩たちは行ってしまったぞ」

「あ…、ありがとうございます」

少年はスクツと立ち上がると、かぶっていた黒のベレー帽を取って、ぶかぶかと何度もお礼を言った。

銀の細かい、フワフワした髪をしている。

「俺、ヘルクロウ・ラヴィーニって言います。お世話になります」

その少年は、相変わらず丁寧に挨拶をした。しかし、その名前を聞いた瞬間、フォルテはとても驚いたように、

「ええ！！　ラ、ラヴィーニって、あのイタリア名家の……？」

ヘルクロウ・ラヴィーニは「えっ」と気まずそうに顔を背けると、

「まあ……自分の家なんですから……、そうですね一応」

フワフワの髪を掻きながら、呟くように言った。

「名家なの？」

キクマサは相変わらずのテンポだが、フォルテはかなり興奮気味に、熱弁する。

「そりゃ……！　だってラヴィーニ家っていったら、イタリアフィレンツェの名門中の名門だよ。芸術に事關しては当然……！！」

「……………」

なるほど、その少年は、多少決まりの悪そうな顔をしていたものの、やはりどこことなく高貴な雰囲気があった。

芸術の縁がいくつもいくつも絡み合う、名門ラヴィーニ。

我々を巡り合わせた月の周期。

I
d
r
a
w

06：セレネの祝福 下

月の光

それは神様が産んだ美術品

それは、魔力を秘めた美術品

「もう大丈夫だよ、ヘル。儀式はとつくに終わったみたいだ」

フォルテは、キクマサの後ろに隠れている、ヘルクロウ・ラヴィーニを呼んだ。

「ほ、本当ですか？ 大丈夫かな…」

ヘルは多少ビクつきながら、小動物のように顔を出して、あたりを

見渡した。

会場では騒ぎ立てている先輩たちと、儀式によりぐったりした一年生だけが、過激な温度差の中に存在している。

『…地獄絵……』

キクマサは持ってきたシャンペンの箱を目の前のテーブルに置くと、周りの様子を見て素直にそう思った。

「一年生の歓迎会なのに……現実って厳しいね」

フォルテは何とも言えない表情で、ため息をついた。

歓迎の時間は刻々と過ぎていき、夜も更けてきたようだった。

「さあ、みんな。明日からは新学期だ。休みボケは今日で抜けたと信じているから、気を引き締めて臨むんだぞ。二週間後にはルネ・コンだつて始まる。いくらしやぎすぎて疲れたからって、さぼる余裕はないんだからな。はい、お開き！！ 散れ散れ！！！」

レッド先輩の締め言葉で、会場の人々はリズムカルに散り始めた。新生はげっそりと、高学年はガヤガヤと会場を後にする。

あんなに騒がしかった広間は、こうしていとも簡単に静かになってしまふのだ。

ただ、あらゆる散らかり様だけを残して。

「何で二年生が片付けかな。準備もそうだったけど、ある意味で一番キツイ学年かもね。あーもー眠いんだけど」

フォルテはぶちぶち文句を言いながら、何か必要に、しつこい汚れ

を見つけては、生真面目に磨いている。
なんだかんだ言っつて、やっぱりフォルテはA型だな。

「俺、ゴミ捨ててくる」

キクマサがそういうと、フォルテは熱心に床を拭く手を止めることも無く、「ん」とだけ言った。

ゴミ捨て場は寮の外にあった。キクマサはゴミ袋をせっせと持ってきては、投げ入れた。

背中に感じる、ルネ・ヴィルトンの森のざわめき。

今夜は、それがやけに響いてくる。

キクマサは振り返って、その木々のさわさわ動く様子やモノトーンを見渡した。

夜の空は、月明かりでとても明るく、雲の形がくつきり見える。

幻想的な空だ。

「……」

キクマサはとても不思議な感覚におそわれた。

絵を描くようになって、周りの物事や流動、すべてに目を向けるようになってやっとわかった、この感覚。

色の無い世界にいたときは気づかなかった、この世界の美しさ。脆さ、儚さ。

風は、世界を行き来する。

大地のにおい、季節の香りを乗せていく。

あの、運命を変えた出会いから4年たった。
カトレア・オーデール師匠。

俺は、変わったのでしょうか。

世界の美しさに気づけるようになったのでしょうか。

今夜は白い満月だ。

「……あれ？ キク…？」

その時、風に乗って、きらきらした鈴のような声がした。横に目を向けると、少し先で、ルナシーがゴミ袋を引きづりながらやって来ていた。

「……ルナ」

キクマサは彼女に駆け寄ると、重そうなゴミ袋を持っていった。やった。

「女子も、もう終わったの？」

「ええ……そうよ。みんな楽しくやっていたわ。男子は凄いいんでしょね」

「……うん、まあね」

キクマサとルナシーは、入学当初からの友人だ。ルナシーのルームメイトであるレイは、フォルテと幼なじみである繋がりから、4人は程なくして仲良くなった。

彼女のブロンドの髪は、ウェーブの波を作っては月の光を浴びて実に見事に美しい。

「ねえ、見て、キク」

ルナシーは急に立ち止まった。森の少し向こうを見ている。2人が廊下をあるいているときだった。

「あのような所にも、噴水ってあるのね」

彼女が指差す方向を見ると、学校裏だというのに、確かに噴水があった。

2人は顔を見合わせ、そそくさとそちらに足を向ける。

それは、ブロンズで造られた古い噴水だった。
中央にある噴水ほどの大きさ、派手さはないが、忘れられた産物という雰囲気は何とも言えない。

今日の強い月の光に照らされて、何かの象徴的な姿が、目から離れないのだ。

「…凄いわ…。この学校って、いったいいくつかの噴水を持っているのかしら…。それも全部…何て……」

何て、吸い込まれそう。

まるで、魔力みたいに不思議を取り巻いて。

キクマサは、彼女の言わんとしていることが分かっていた。

確かに、この学校には噴水が多いのだ。絵画科内でもこうやって、いまだに知らない噴水があるのだから、他科まで行くといくつになるやら。

月の光の演出。

キクマサは急に、一年前のことがフラッシュバックされた。初めてこの学校に来た時、初めて君に会った時の事。

「…ねえ、ルナ。君は去年も噴水の前にいたよね。俺たちは、初めてそこで出会ったんだ」

きらきらと、水しぶきを浴びながら。

あの時俺は、もっとも美しい絵を見ているような気分だった。

「覚えているわ。中央の大噴水の前でしょう？」

ルナシーはキクマサを見上げると、ニコリと笑う。

「私、この学校に来て、あの噴水を始めてみたとき凄いなって思ったわ。…感動して、ずっと見ていたかったの。…時間が止まった気がした……」

美しい物の魔力は計り知れない。

我々は知り得ない。

ザアアと、風が、木々の枝葉を巡る。

ルナシーの髪も、その方向へと流れて、空へと向かう。

月へと。

「でもね、キクが来てハッと気づいたのよ。だからよく覚えてるの、あの時の空気は印象的だったから」

空間、色彩、時間をすべて飲み込んで、美しい物は極みへと昇る。あの時の空気は、普通ではなかった。

「…そうだな。確かに印象的だったよ…」

キクマサは目を細めた。
あれは何だったのだろうか。

君と俺を巻き込んで、あの瞬間、美しき姿は確かにそこにあったのだから。

一年生のヘルクロウ・ラヴィーニは、早々に自分の部屋に戻って、そのまま寝てしまいたいと思っていた。
彼にとっては、とても心臓に悪い歓迎会であつたので、疲れきってしまっていたのだ。

部屋に入るやいなや、ソファーに深く座り込み、黒いベレー帽をすべるように取った。

その時だった。

「よお」

二段ベットの上から、ひょこつと赤毛の少年が顔をのぞかせ、ソフ

アーの上のヘルを見下ろしていた。

ヘルは同室の人がいたのをすっかり忘れていたのか、驚きで口をあんぐりさせている。

「俺、同室のクレハ・ドルフォード。よろしく」

クレハは、屈託のない笑顔で挨拶をしてきた。

ヘルはクレハを探るように見上げ、おずおずと、

「俺は…ヘルクロウ・ラヴィーニ…」

クレハは目を見開いた。口をまん丸くして。ヘルは、またしても名門攻撃か、と息を飲んで構えていたが、

「……ラヴィーニ…？ お前変な名前してんのな」

「……」

はて、彼はラヴィーニ家を知らないのか、知っているからこそなのか、真意のほどは理解できなかった。

「ヘルでいいよな、なっ！！」

「え…う、うん」

ヘルは、クレハの勢いに押され、小刻みにうなづく。

クレハの笑顔は混ざり気無く無邪気で、ヘルにとっては非常に新鮮であった。

ラヴィーニ家という鎖が、彼にはコンプレックスであるから。

「おい、ヘル。お前もシャワー浴びてこいよ。俺もう入ったから」

「……そうだな、そうしょつか……」

よく見たら、クレハの赤毛が濡れていた。ヘルは、忘れかけていた疲れをやっと思い出したように、ズルズルとシャワー室へ向かった。

ルームメイトがああいうやつで、良かったなと思った。

今までは、自分「ラヴィー」二家として見る奴ばかりで、あのように、1対1で接してくれる人なんていなかったから。

ヘルはシャワーを浴び終え、タオルで雑に、そのままふわふわの銀の髪をふいていた。

「……………」

体が温かくなって、何だか眠たい。

シャワー室を出て、やはりまず二段ベッドの上のクレハを見上げた。

彼はヘルが上がったのに気づくと、パツと表情を変えて、

「おっ、やっと上がったな。」

奴はなんと、二段ベットの上から、「とう!!」と飛び降り、

「10・00!!」

スタツと着地した。かなり見事だ。

ヘルには考えられなかった行動だが、そのありえなさ、やはり彼には魅力で、瞳を輝かせた。

「す、すげえええ!!!!」

パチパチ手を打って感心する。クレハはたいそう自慢げに腰に手を当て、気取っている。

「俺、ドイツの森の中で育ったからな。典型的な野生児だから」

自分で言うのも何だかなと思ったが、やはりヘルにとって、正反対の香りに興味を持たずにはいらなかった。

クレハには、温室育ちの自分には無い、何だか強いものを感じる。

二人の部屋の窓からは、まっすぐに、今夜の満月が見えていた。

美術は魔力を秘めている。

月だって。

クレハはちょうどその時見てしまった。目を逸らすことができなかった。

今夜の満月を。

ガチャン――

「！！！！」

ヘルとクレハの背後の花瓶が、何の前ぶれもなく急に割れたのだ。砕けた花瓶は、机の上から床に落ち、水が線を描く。

「な、ななな何で…っ！！？」

ヘルは明らかに動揺していた。クレハは顔をしかめ、花瓶の破片と、水がゆつくりこちらへ流れてくる様子をじっと見ている。

目の前の惨状は、意識よりも遅くにやってくるから。

しかし急にクレハは、複雑そうだった顔をくるつと変え、驚いたように、

「あれ！！？　何で急に花瓶が割れちゃったんだろ！！　恐！！」

彼らしさを装い、焦る心を抑えていた。

落ち着け。

たかが月を見たくらいで。

「なあヘル！！ 俺ここのガラスとか片づけとくからさあ、モップと箒を 借りてきてよ」

「えつつ！！ わ、わかった……」

ヘルは大慌てで、バタバタと部屋の外に出ていった。
足音が遠のいていく。

「……………」

クレハは開けっ放しのドアを、ゆっくり閉め、そのまま背をつけた。
額に手を当て、崩れるようにしゃがみ込む。

「…………ダメだ……こんなのじゃ……………」

額の手が震えて仕方がない。
唇をきつくかみ、心の中でせめぎたてる何かを、必死で抑えつけていた。

「…………隠して……いかなきゃ……………」

誰にも知られてはいけない。
見られてもいけない。

花瓶の水が、クレハのもとまで伝っては、月の光を導いていた。

その水を見て、花瓶の残骸を見て、そして、自分の手を見つめる。
一時その手を見ては、何かをずっと思いめぐらせていた。

月は、美しさの中に、秘密めいた力を宿している。

時には祝福を、時には残酷さをもたらすから。

クレハには、誰にも言えない秘密がある。後にそれがこの物語に、
どんな色を添えるのかは、本人すらも知り得ない。

白い孤独の月夜。

それはいったい何を暗示しているのか。

l
d
r
a
w

07：ルネ・ヴィライアー・コンテスト1～遠い人～

絵を描く楽しさを忘れそうになる事だっである

だからこそ

思い出した時、きっとそれ以上に絵を愛していける

絵画棟の中央ホール、室内噴水の前で、小柄だが表情の凛とした女子学生が、腕を組んで立っていた。

今年の入学生の、優秀者3名の絵を見上げながら。

流れるようなバロックの空気の中、1人の男子学生が、彼女に気付く。

「……シャルロ……」

彼は淡い髪と、淡々とした表情を持つ青年であった。
シャルロと呼ばれた女子学生は、深い色の巻き毛を揺らして振り返った。

「……スノー」

「何してるの？ そんな所で……」

スノーと呼ばれた青年は、シャルロの隣に並んで、彼女の見上げていたものを知る。

シャルロは、背の高い彼を横目で見上げ、

「ねえ見て。今年の優秀者よ…素敵よね…」

意味深に、赤めのルージユが弧を描く。

「…懐かしいな」

「へえ、あんたでも覚えてるのね。四年前は、一番上にあんたが、次に私が、三番目にフレイのが掲げられていたものね」

シャルロの言葉に、スノーは彼女を見下ろした。

スノーフリーク・ロズベルト（4年生）、現ルネ・オパール。
シャルロ・グレディア（4年生）、現ルネ・アンバー。

共に現役ルネ・ヴィライアーであり、“激動の学年”と呼ばれた四年生の中でも特に、天才と言われた二人である。

「私、あの時あんたの絵を見て、凄く衝撃を受けたもの。初めてだったわ、私が絵であんなに動揺したの」

「…僕もそうだよ…。だって君の絵、普通じゃなかったから」

「…どういう意味よ」

シャルロは苦笑いで、淡々と述べる彼を見上げた。しかしスノーは相変わらずマイペースで、

「普通じゃなかったよ。僕にとってはね」

確かに、貴重に、微笑んだ。

シャルロは鼻で笑った。

5年生から、ルネ・ヴィライアーになろうと思う人は、思いの外に少ないけれど、全くいないわけではない。

4年生は今年が勝負だと思ってるだろうし。

3年生からルネ・ヴィライアーになる人は歴代でも多く、2年生はもっぱら推薦枠狙いである。

1年生は何事も経験という感じだ。

「わかるかね、キクマサ君。2年生には一次こそが大切なだよ」

「わかってるよ、黙れよフォルテ。気が散るだろ」

キクマサは一次の絵の期限に間に合うかどうかという点で、せっぱ詰まっていた。取りかかりは、フォルテ、レイ、ルナシーと共に早かったというのに、終わりは皆一緒というわけにはいかないのだから。

一次の締め切りまで、あと3日。

終わらないというよりは何か足りない気がして、それを気にしながら描き続けるのが、心に変な色の沈殿物を落とし続けるのだ。

フォルテの絵も、ルナシーの絵も悪くないし、レイのにいたっては脱帽だ。技術も表現力も構成も、やはり2年生の中ではトップだと思う。

一年もたっていたら、誰かが彼女を抜いてもおかしくはないのに、彼女は、あの一番上の、高みに掲げられた絵のまま。さらにその上へ。誰にも王座を譲ってはいない。

キクマサは、誰かに勝ちたいなんて思ったことはないけど、誰よりも良い絵を描きたいと思ったことは何度もあるのだ。

フォルテは、実技室の端にある小さな台所で、お湯を沸かしていた。ここは寮のすぐ隣の、自由に使える実技室だ。

キクマサたち4人は、一年生の時からずっとこの444号室を使っている。

フォルテはインスタントコーヒーを作っていた。

「キクはブラック？ シュガー？ ミルク？ ちなみに俺はシュガ

「&ミルクで」

「ちなみに俺はそれと同じで」

キクマサは、彼の言い回しを利用して早口で言った。こんな時に苦いコーヒーは飲めない。

その時だった。ドアの開く音と共に、四月の涼やかな風が流れ込む。フォルテとキクマサは、ドアの方に目をやる。

「やあ諸君。はかどってるかい？」

モデルのようにスラッと背が高く、男前な五年生が、愛想の良い笑顔で現れた。

この男子寮を統べる、レッドリー・ヘッドバーン寮長であった。

「あ、レ、レッド先輩……！」

二人は立ち上がると、軽くおじぎをした。一年間男子寮にいるし、キクマサにいたっては、ルネ・ヴィルトンで最初に出会った先輩だ。面識くらいはある。

それでも今はまだ、彼らにとってこの人は、遠い雲の上のような人だった。

レッドリー・ヘッドバーンは“ルネ・ルビー”でもある。

彼の胸には、その象徴である、ルビーの埋め込まれたペンダントが淡くきらめいている。

「な、何か用でしょうか」

フォルテはたじろきながら、コーヒーを他のマグカップに入れ、レットに手渡した。

彼は

「どうも」と、嬉しそうにとると、

「うん。ねえ、確かキクマサ君は日本人だったね」

「…はい。そうですけど…」

キクマサは不意に“日本人”という、懐かしい単語を言われ、多少面食らった。

「俺ね、知人に君の話をしたんだ。その人も日本人なんだけど。もしたらキクマサ君連れてこいつてさ。ねえ、今時間ある？」

「……………えっ」

キクマサは言葉に詰まった。時間は、どうしたって無い。フォルテは空気を読んで、

「あ、レット先輩。こいつ、ルネ・コンの一次に出す絵、まだ出来てないんですよ。俺はもうこれでも良いんじゃないかと思ってるんですけど。どうも本人から見たら、何かが足りないらしくて」

レットは目を丸くして、「へえ」と顎をなでると、ズンズンキクマサのキャンバスの前にやって来た。

キクマサは緊張した。先輩に絵を見られるなんて、嫌な汗以外何も出てこない。

「へっえー、なかなか良いじゃん。構成も良いし、青の色なんて凄く綺麗だよ。…でもまあ、本人が何か足りないって言っんなら、何か足りないんだろっけど」

レッドの言葉に、心半ばキクマサは頷く。

「…はい。俺にも、何が足りないのかわからないんです」

何かが足りないという事だけが分かる。それがこの絵にとって、一番大切であることも。

レッドはにっこり笑うと、

「やっぱり君は、あの人に会いに行くべきだ。こういう時は、少し違うものを見るといいよ」

さあさあと、手でキクマサの背を押し、慌てふためくキクマサを実技室から出した。

フォルテが中から、何ともいえない顔で、彼に手を振っていた。

キクマサが連れてこられたのは、彼らの実技室から少し離れた、五年生用の実技室の並ぶ階であつた。

更にその奥には、噂でしか聞いたことのない伝説のルネ・ヴィライアー専用のアトリエがあつた。

「5年生のルネ・ヴィライアーはね、一人一部屋アトリエが貰えるんだ。リッチでしょ…」

「…凄いですね」

キクマサは呆気に取られた。みんながこぞつてルネ・ヴィライアーになりたがる理由がよく分かる。

レッドは、自らの“ルネ・ルビー”と表示された部屋ではなく、その隣の、“ルネ・ダイヤモンド”と記されている部屋をノックも無しに開けた。

「入るよ、ナギさん」

キクマサは驚いてレッドを見上げた。キクマサだつて新入生じゃない。今のルネ・ヴィライアーの名前くらい知っている。彼らは有名な人だから。

ルネ・ダイヤモンドの事だつて、勿論知っている。

日本画専攻の日本人。サイオンジ・ナギ先輩だ。

でも、彼女は女性だ。こうも気安く部屋に入るほど、この2人は親しいのだろうか。

何より驚いたのは、その部屋の在りようだった。キクマサはバツと

レッドの方を向いて、青ざめる。

「勝手に入っちゃっていいんですか!？」

「…え? うん。いつものことだし」

「“ここ”は部屋ですか!？」

「え? うん。すごい物置みたいだけどね」

レッドの言葉は適切だった。入った側から、道はどこだと言った感じで、落ち着く場所もないし、部屋の大きさもわからない。

「おーい、ナギさん、どこだい」

レッドは“それら”を慣れたように分け入って、彼女を呼ぶ。キクマサは顔をしかめながらも、レッドの後ろについていった。

カトレアさんのアトリエですら、これほどひどくはないけれど。一応中央にはスペースがあつて、レッドはそこで周りをキョロキョロしていた。

「あつれ〜、おかしいな。さっきまでここにいたのに」

彼は、頭の後ろに手を回し、眉根を寄せる。

キクマサは、その部屋を見回した。

油の香りはないけれど、所々に点々とある顔彩の器が、音も無くそこに静止している。

油画とはまた別の、緊張感のある空間だ。

そんな風に、キクマサが視線を移しているとき、ふと、奥の大きなパネルに気がついた。

「……………」

吸い込まれる。

吸い込まれるかと思った。

もはやそれは、自分の知っている絵画ではなかった。

油とは違う色、光、深み、あらゆる空間性。

細かく複雑な味付け。

それは見事に美しい赤と白の花。
日本画でしかあり得ない透明感。

“紅白”

私たちは共に“あの人”の病状を告知されました。

その時私はあなたを見ることができなかったのです。

それでもあなたは“あの人”の前ではいつも笑顔で

いつものように白い花を手渡しました。

あなたには紅が

“あの人”には白がとても似合う

／以下省略

キクマサは息を飲んで、それでも動けずにいた。

不意に訪れた衝撃に、それでも守られた静寂の時間に、彼の心は乱された。

イメージ・ストーリーだ。

ルネ・ヴィライアーとは、こうも次元の違うものなのか。

そう思わざるをえないような質の高さ。

さざ波のように静かなのに、
じんじん染み込んで、
なんて、

なんて遠い。

l
d
r
a
w

08：ルネ・ヴィライアー・コンテスト〜ルビー&ダイヤモンド〜

一生で一番の奇跡は、俺が再び絵に出会えたこと

その情熱を、もう一度思い出さなければ

「どうかした？ キクマサ君」

レッドの呼びかけに、キクマサは我に返った。

あの一瞬は、とても長く感じられた。

「い、いえ…何でも…」

何でもないわけではないが、今はこうとしか言えなかった。レッドは何て事無く、「そうかい」と答えた。

その時だった。

ドアを開ける音と共に、一人の女子学生が姿を現した。

彼女はとても優雅な身のこなしの、上品で美しい日本人女性だった。

長い黒髪に、淡く赤い唇。

遠くから見たことは何度もあるし、噂でも聞いたこともあったから、美人だとは知っていたけれど、実物は圧倒される。

キクマサにとっては、同じ国の人なのだから、受け入れやすい美しさなのに、実際に日本で、ここまで和風美人をお目にかかったことはない。

「やあ、ナギさん。どこへ行っていたんだい」

「花瓶の水をくんできただけよ」

ナギは顔を上げ、手に持つ細長いビンをレッドに見せた。

「さつき廊下で、メルベリーに会ったわ。何か、今団長たちとエリ―ゼ先生で、会議してたみたい。どうやら次はエジプトのようね」

「次って…ヴィライアーの研修かい？」

「そうよ。今年のメンバーが決まり次第、エジプト研修よ」

ナギは、ごまごました道を分け入りながら、中央のテーブルに花瓶を置く。

その時やっと、キクマサの存在に気がついた。

彼女はキクマサを見て、一瞬驚いていたが、再び彼をじっと食い入るように見て、一人勝手にうなずいた。

「なるほど、君が例の日本人か」

微笑みながら言うから、こちらにとっては心臓が痛い。

彼女は艶っぽい。

「ごめんなさいね、キクマサ君。レッドに無理やり連れてこられたのでしょうか？ まったくこの男はお調子者だから」

ナギは長い黒髪を結い上げ、制服をすっかり着替えて、部屋では薄手の浴衣だった。

レッドはニヤリと笑うと、紅茶のカップを差し出しながら、わざとらしい口調でもの申す。

「おや、お気に召さなかったかい？ お姫様」

「いいえ。有り難いですけどね、王子様」

ナギも負けずに嫌みを返す。

キクマサは当初から、この二人の関係がととても気になっていた。

ルネ・ヴィライアー同士というだけにしては、親密すぎる。

それに二人は美男美女で、とても絵になる。

「ねえ、キクマサ君。あなた今年ルネ・コンに出るの？」

「あ……まあ……はい」

不意に質問され、紅茶のカップを前のテーブルに置くと、キクマサはなんとも言えない返事をした。

「……でもまだ、一次の作品できてないんですよ」

「そ。でも俺が引っ張ってここに連れてきたという展開」

キクマサの言葉に、レッドが付け足す。

ナギはいかがわしげにレッドを見ながら、でも彼には何も言わずにキクマサの方を優しく見た。

「……ちよつと、行き詰まっている感じがしら」

「……はい」

キクマサは苦笑いで頷いた。そこにすかさずレッドが割って入る。

「だいたい行き詰まっているときは何もしないのが一番なんだって。俺なんて二年生のルネ・コン、時季はずれのインフルエンザで間に

合わなかったからね」

「ふふ、そんな事もあったわね。こいつね、一応トップ入学してるのよ。二年生では推薦枠は確定だろうって言われていたにも関わらず、一週間ドクターストップよ。運がなかったのよ」

ナギはつんとして、レッドの痛い所をつつく。しかしレッドは相変わらずにここにこして、平気そうだった。

「ねえ、キクマサ君は、ルネ・ヴィライアーになりたいのかしら……？」

ナギはテーブルに肘を立て、その手の上に顎を添え、赤い唇に弧を描いた。

キクマサは少し考えると、

「……どうなんでしょうか。……本当の所、よく分からないですね。……実際この学校に入る前まで、ルネ・ヴィライアーについて知らなかったですし」

「へえ。予備校とか、美術学院とか行ってなかったのかい？」

「はい……話せば長くなるのであれですけど、俺、ここへ入学できたのは半分コネなので……」

苦笑いで、多少皮肉っぽく言ったつもりだったが、ナギはパツと黒い瞳を大きくすると、

「あら、私もそうよ。推薦入学だもの。新しくなった理事長が日本

画びいきでね。うちの父と知り合いなのよ」

臆することなく、笑顔で言った。

ルネ・ヴィライアーだから言えることなのか、はたまた元々そういうものだと受け入れているのか。

その余裕が羨ましかった。

「そもそも、絵に順番や点数なんてつけられないのよ。見る人によっていくらでも変わるんだから。ただ、やっぱり受験やコンクールでは、しょうがない……」

ナギは紅茶の水面を揺らした。

「この世界で生きていきたいなら、自分の表現を、相手に認めてもらわないと……」

自己満足を芸術とは呼べない。

かといって、真似や流行り、一般受けの良い表現に流されたって、何の意味もない。

常に新しいものを追い求め、それが認められるか認められないかで立場の変わる、紙一重で難しい世界。

「ちょうどいいじゃない。ルネ・ヴィライアーになる事にこだわらないのならば、思いつきりやれるわよ。何を描きたかったのか、もう一度考え直してごらんなさい。何か足りないって言うのなら、そ

れは、あなたの表現したいものへの思いじゃないかしら。忘れてしまいたいになるもの、いまだに私だって」

キクマサは、顔を上げた。

目から鱗というか、衝撃というか、難しいパズルの解き方に気付いたように。

何を表現したかったのか。
なぜ、絵を描いているのか。

もう一度思い出さなければ。

「よく言うよね。ナギさん、あれでもルネ・ヴィライアーになる気なんてまったくなかったんだよ。三年生の時まで」

「……そうなんですか？」

ナギの研究室からの帰り道、レッドとキクマサは並んで歩いていた。

「うん。彼女も君と同じ。ルネ・ヴィライアーについてほとんど知らなかったし。ましてや日本画で、ヨーロッパに留学に来てるわけだしね。ルネ・ヴィライアー否定派だったよ」

「…否定派？ そんな人いるんですか…？」

「いるよぉ、実力あっても最後までコンテスト出ない人だっているし。嫌なんだよ、そういった“格付け”が…。まあ…分からなくもないけどね」

キクマサはレッドを見上げた。

「でも、ナギさんの場合、俺が説得して、ルネ・コンに出させて…
…無欲の強みというか、結果的になっちゃったんだけどね」

レッドは少し、昔を思い出すように目を細めた。その表情が、とても大人っぽくて印象的だ。

キクマサは少し戸惑いながらも、一番気になっていた質問をした。

「あの…その、お二人ってどういう関係なんですか？ …何というか、前から仲良さそうなので」

「…ハハッ、何？ お付き合いしてますか？ ってこと」

「…はあ。まあそうです」

レッドは少しおどけたように首をかしげると、

「よく聞かれるけどね。俺たちは親友だよ。そんな色っぽい関係じゃない」

キクマサは多少ショックだった。二人はとてもお似合いだと思うのに。

男女を親友と呼べるのは、外国ならではのうとしみじみ思った。

それにしても、何だか心が晴れやかだ。

「ありがとうございます。レッド先輩。：言われた通り、今日は行って良かったです」

「そうかい。お役に立てたなら何より。ナギさんも喜んでいたしね」
444号室の前で、2人は別れ際に話していた。キクマサはレッドの背を見送った。
不意にレッドが振り返る。

「そうそう。無欲の強みとか何とか言ってたけどね、でも俺は、ルネ・ヴィライアーになって損は無いと思うね」

「……………」

夕方の窓のシルエット。
立ちぼうけの人影。

レッドの笑みはオレンジに溶けていた。

「世界の美しいものを見に行ける」

言葉を残し、足音が遠ざかっていくのを聞いていた。
キクマサは思い出す。

カトレアさんの言葉を。

444号室に入って、人のいないその空間の中で、キクマサは自分の絵と向き合った。

自分は何を描きたかったのか。
それは、かつてカトレアさんに教えてもらった、あのアトリエから見上げた空だった。

カトレアさんの教えを、言葉を、きつと絵に託せるだろうと思って描き始めた。
いつしか焦燥感の中で見失っていたもの。

あの日、あのアトリエで、一生で一番大切なものを見つけた瞬間。

一生できっと、一番幸福な瞬間。

世界の美しいものを見せてあげる。

あなたはそう言って俺を、この世界へと突き落とした。

09：ルネ・ヴィライアー・コンテスト₃基礎について

僕と君は、違う星の元で生まれてきた

同じように、絵を描いていたって

「……なんだ、レイか」

フォルテは少し目を細め、不満そうにつぶやいた。視線は444号室の入り口に立つ、黒髪でショートカットの少女だ。

「何よ、それ」

レイは拗ねた口調でフォルテを睨みながら、444号室に入る。

「私が来ると、いつも嫌そうにするわね、あんたは」

「嫌そうじゃない。嫌なんです」

フォルテの口調はさっぱりしたものだった。

「何よ……」

レイは、今度は少し大人しい口調で言った。顔を複雑そうに歪めて、フォルテを見下ろしている。

フォルテは彼女を見もせずに、鉛筆をナイフで削っている。

「何の用だい、レイデル・リローズ」

彼は改めて聞く。

「別に……ただ……。私もルナシーも、あんたもキクも、四人とも一次受かったって聞いたから、どうしてるかなって思ってた」

「キクマサは売店だ、速乾剤を買いに行っている。二次は受験と同じように時間が短いから。一次は作品提出だったけど。……推薦組には不利だよな」

フォルテはいつもの明るい調子ではなく、淡々と流れるように話した。そんな彼の態度に、レイは難しそうな顔をしている。

「ねえ……あんたは今年、ルネ・ヴィライアーを目指してるの？」

「……………」

フォルテは鉛筆を削ぐ手を止め、じつとレイを見上げる。優しくでも睨むでも無い、嫌に冷めた視線である。それはレイにとって痛いものだ。

「今年は絶対にならないよ。推薦ヴィライアーは別として」

「……………」

はつきりした彼の強い口調に、レイは口をつぐんだ。

彼は視線を手元に戻すと、それ以降彼女を見なかった。

「ただ、来年は絶対になる。来年を逃せば、“ルネ・テクタイト”にはなれないかもしれない」

「……………あんたは“テクタイト”にこだわるのね」

「そうだ。そうでないなら、俺がこのルネ・ヴィルトンに来た意味がまるで無い」

フォルテはいつになく重い口調だった。

彼がこの学校に来た、一番の目的。その理由は、全て、ルネ・テクタイトという称号の中にある。

「…レイ、君とは所詮、目的が違うんだ。君は絵に生きなくちゃいけない」

フォルテは再び、手元のナイフと鉛筆に視線を落とした。レイはうつむきがちに、

「ルネ・ヴィライアーになりたいっていうのは同じじゃない……」

彼に聞こえるか聞こえないか程度の声で言った。

「……いつたい何を言いたいんだ、君は」

「……」

一時して、フォルテが冷めた口調でそう呟いた。

いつからか、こうだ。

幼なじみで、家も隣でいつも一緒にいたのに、彼は急に冷たくなった。

レイは一度口を開いたが、思い直したように口をつぐんだ。

何が言いたいか、だって。

あんたはそんな事も分らないのね。

「……もういいわ」

レイは444号室を早足で出て行った。

彼女が出ていった後に、フォルテはやつと顔を上げ、さっきまで彼女の居た場所を、ため息混じりに見ていた。

レイは唇をぎゅっと結んで、押し寄せる胸の痛みを押さえていた。

あいつは私が邪魔なのだ。“目的”を果たすために。

私はただ、一次に受かって、あいつの喜ぶ顔が見たかったただけなの

に。

一緒に頑張ろうって、言いたかった、ただそれだけなのに。

「フォルテのバカ」

歯を食いしばって、怒りと悔しさを絞り出すように言った。

彼女の早い足音は、カツカツと長い廊下に響いていた。フォルテはその足音が遠ざかるのをじっと聞きながら、天井を見上げた。

キクマサは売店で速乾剤を買おうとしていた。

二次は、その場でお題が出され、6時間で描くといういわゆる受験風で、そのような特訓をしてきていないキクマサには、何とも未知数な領域であり、試練であった。

とてもじゃないけど、六時間で一枚の油絵を描くなんて考えられない。

でも、この競争率の高いルネ・ヴィルトンを受かってきた人たちには、慣れた分野なのだろう。

「…さあて…、速乾剤って言っても色々あるんだな…」

キクマサは、顎に手を添え、フムと思った。

メデイウム状、液体状、溶き油状と、形は様々。

どれをどう使うのが一番良いのだろう。

「何かお探しかね」

その時、背後からふと声がした。

しわがれた、落ち着きのある声主は、キクマサたち、ルネ・ヴィルトンの生徒には、よく知られた人だった。

「あ…、マクナスさん。こんにちは」

キクマサは小さくあいさつをした。

マクナス・ベンシー（71）は、このルネ美の画材販店の主人で、
どういう時にどういう画材を使うのが良いか、生徒に教えてくれる、
親切なおじいさんだ。

薄くなった白髪の上から、今日みたいな肌寒い日は、よくニット帽
を被っている。

彼に話しかけられると、とても落ち着く。

「速乾メディウムとシツカチーフか…。一番妥当な所だね。マクナ

スさんいた？」

「うん。よくわかんなかったから、選んでもらったよ」

キクマサは買ってきた画材を見比べながら、

「で、どうやって使うの？」

いつものようにフォルテに説明をもとめた。

フォルテもまた、ハイハイと。いつもの事ですね、と。

「速乾メディウムは、油絵の具にダイレクトに混ぜて使う。量に気をつけてね。…シツカチーフは油の一種だから、溶き油に混ぜるだけ。あんまり入れすぎないようにね」

彼は速乾メディウムとシツカチーフを片手ずつに持ち上げた。フォルテの説明に、キクマサは何度も頷きながら、試しにメディウムを油に混ぜてみた。

油絵の具をナイフで練る感触がいつもと少し違う。

「キャンバスのきれっぱしにでも塗ってみなよ。完璧に乾くのは時間がかかるけど、2時間後には違いが分かんと思うよ。速乾って言うてもね、アクリル絵の具ほど速くは乾かないから」

そついうものなのか、とキクマサは半分納得したように頷く。メディウム入りの絵の具を筆につけて、キャンバスの切れ端にスツと走らせた。

鮮やかなカーマイン。

教官たちが腕時計を見ながらうろつろしている。
生徒たちも、木の丸イスに座って、油絵の具や下地用のアクリル絵の具を準備している。

ああ、なるほど。

このソワソワした空気や、ピリピリした空間が、緊張感を誘う受験
と言うものか。

キクマサは初めての経験に、一度深呼吸した。

昨日まで練習していたメデイウムとの相性は思いの外によく、速く
描くというのには、そんなに嫌気は感じなかった。

あとは、自分の感性和努力を信じるだけ。

10時を知らせる、ルネ・ヴィルトンの鐘の音。
先生が黒板を隠していた布をバツとめくった。

お題は、“過去、現在、未来”

このお題をどのように受け取るかは、自分次第。

「出来たと思う？」

「まあ…、やるだけはやったかな。ここで落ちたって未練は無いよ」
試験が終わって、さっそく学食を食べに行った2人。集中した後で、なんでこんなにお腹が空くのか。

「“過去、現在、未来”か…、こりゃ技術を見るよりも、発想力や構成力重視だろうな。このお題なら、100人いたら100通りの

絵ができるよ」

「それで差って出来るものなの？」

キクマサは落ち着いた口調で、パンをちぎりながら聞いた。

「あとは先生次第さ。ルネ・ヴィライアーとなり得る個性が有るか
どうか……。ただし、変な絵を描きやいってものでもない。基礎だ
って大切だよ。三次は石膏デッサンだしね」

フォルテはミネストローネのスプーンを持ったまま、オーバーに言
って見せた。

キクマサはミネストローネをふきだしそうになり、驚いた口調で聞
き返す。

「……石膏デッサン？　今更？」

「そ、今更。でも山場。意外と出来ないやついるよ」。ルネ・ヴィ
ルトンの入試には無かったから、今まで個性で押してきた奴なんて、
特に落とし穴。俺を含めて」

キクマサはポカンとしていた。散々絵画をさせてきたのに、今更石
膏デッサンとは。

でも待てよ、とキクマサは思った。

昔カトレアさんのアトリエで、石膏デッサンは散々やらされた。
あのアトリエには、なぜか一通りの石膏像があったから。

キクマサはその日の夜、今日の二次がどうだったか、とかより、昔カトレアさんに言われた言葉が頭から離れなかった。

「基礎があつての個性だよ」

キクマサは、嫌というほどのデッサンをさせられてきた。石膏像だつてそうだ。

近寄つて、触つて、空間を計つて。

「たとえ最終的に、正確に描くような絵画じゃなくなつて、デッサン力があつてのそれを越えた“表現”なんだからね。どんなに才能があつたつて、基礎があるか無いかは思いの外に大きいよ」

「……………」

ベッドの中で一度寝返りをつつた。窓の外からは、月の光に照らされた雲が、くつきり見える。

あの頃俺は絵の具を使いたくてたまらなかった。

なんでこんな、誰だかわからないような、マルスやらジョルジュやらを描かなきゃいけないのかって、本気で思っていた。

しかし、カトレアさんは分かっていたのだ。これがいつか役に立つこと。基礎がある者が、最後にはどうしたって強い事。

あの人がしつこく基礎をやらせたおかげで、俺のデッサン力は、一年生最後の評価で5だった。レイですら4だったのに。

なんだか、三次に出れたらいいなと思った。

あの、白くて美しい像を描きたい。

キクマサは、二段ベットの上で眠るフォルテの寝息が聞こえてくるのも気にしないで、とにかく二次が受かっていますようにと思った。だんだん欲が出てきてしまう。

ダメだよ。

“ここまで”で満足しちゃ。

| d
r
a
w

カトレアの言葉が聞こえた気がした。

10：ルネ・ヴィライアー・コンテスト4（筋違い）

どうしても

分かり合えない価値観に、我々は価値を見いだすのか

「凄いや、俺達まだ残ってるよ！！」

中央掲示板を見て、まるで受験生のように自分の名前を探す。フォルテは、自分とキクマサの名前が残っていたのに興奮して叫んだ。周りもざわわしてどうも落ち着きがない。喜びの声や嘆きの声が一気に耳に入ってくる。

「あ、レイもルナシーも残ってる…。あの2人もやるもんだね」

「……ほんとだ」

キクマサが、ズボンのポケットに手をつ突っ込んだまま、ほうと視線を掲示板に戻した時だった。

「なあにが“やるもんだね”よ。私達よりよっぽど、あなたたちが残ってる方がびっくりよ」

「……………」

聞き覚えのある澁刺とした声。振り返るのが恐いくらい。

「ダメよ、レイ。そんなこと言っちゃ」

威勢の良いレイと、それを中和するかのように、柔らかい声のルナシーが、いつの間にかキクマサ達の後ろにいた。フォルテは一度ため息をつくと、

「あのな、お前がここまで残るのは、ルネ・コンが始まる前から予想済みだったさ」

「あら、じゃあ予想外だったのは私の方かしら」

ルナシーはクスクス笑いながら、フォルテを覗き込んだ。金の長い髪が肩から流れる。

「…そんなことはないさ、ルナシー」

フォルテは少し困ったように頭をかいた。キクマサは笑いそうになる。

側を通る男子学生は、必ずといっていいほどルナシーに目を止める。

彼女は学年のマドンナだ。

「大体何だよ…何の用だ…。嫌みを言いに来ただけだろ」

フォルテはそっけなく、少し冷めた声で言った。レイは顔をしかめ、フンとそっぽむくと、

「…ええ、そうよ。…どうせ次はあんたの苦手な石膏デッサンよ。一緒に最終試験に行けないのが残念だわ!!」

いつも以上にきつい口調で、フォルテを睨みながら言った。キクマサはレイとフォルテを交互に見比べる。

なんだか、いつもの感じと違わないか？

ルナシーもそれは感じているようだった。

レイは腕を組んだまま、早歩きで立ち去った。慌ててルナシーが後を追う。

「……………レイと何かあったの？」

キクマサは意味もなく小声になる。

「別に…………俺最近嫌われてるから」

彼は笑ってそうは言うけど。

キクマサは、そうだろうかと疑問を持った。どちらかと言うとフォ

ルテがレイを避けてる気がする。彼女が近づこうとすると、一線を引く。

仲が良いのか悪いのか、いまだに分からない。

「レイ…、どうしたの急に」

カツカツ足音をたて早歩きのレイに、小柄なルナシーは小走りで追いついた。

レイはむっとして、心配なくらい沈んでいた。

「……あいつ、今日も私を見なかったわ」

「……フォルテ？ どうしたの、喧嘩でもしたの？」

ルナシーはさっきのフォルテとレイの態度で、何かを悟ったようだ。

「ちょっとレイ？ 大丈夫なの？ 明日は三次があるのよ…。彼には悪いけど…フォルテのことなんて忘れちゃいなさい」

ルナシーはかわいらしい声で、なんとも思い切ったことを言う。でも、そうでなければ、彼女がせっかくの実力を出せないのではないかと不安に思ったから。

「……………そうね。あんなやつ落ちちゃえ」

レイはぼつりと呟く。

その時だった。

前から2、3人の女子学生が、なんだか怖い顔でこちらに歩いて来た。

ルナシーは眉間を寄せ、困ったようにしている。

「やだわ…………ジェシカよ。あの子何かとレイを敵視しているじゃない…」

ルナシーがそう言うので、レイはそちらをめんどくさそうに見る。

「何か言われる前に、無視して立ち去ればいいのよ」

肩ほどの巻き毛をハーフアップにした、同じ学年のジェシカ・バーナード。一年前の入試で三番目だったのが彼女だ。お嬢様なのだろうが、わがままで、自分が一番でないと嫌なタイプ。

常にトップのレイを、異常に敵視しているのは皆知っている。廊下を渡る、その気取った足音といったら。

ジェシカが何人かの取り巻きと共に、レイとルナシーの進行方向に立ちふさがった。

「あら…レイデル・リローズ。ごきげんよう…ルナシーも」

ジェシカは意地悪そうなつり眉を、片方だけ上げた。

「…何の用？ ジェシカ、邪魔よ」

レイは機嫌が悪いのもあって、最初から手厳しい。ルナシーは隣でハラハラしている。

ジェシカは少し目を細めると、顎を上げどうにもレイを見おろしたらしい。

「あら…せっかくおめでとうって言いに来たのに。あなたも私も三次に進めるのだから。それに…」

ジェシカはチラツとルナシーを見た。

「ルナシーさんは分からないけれど、私とあなたは最終に残れるでしょうね…。私今ね…特別にプロの講師に最終の対策をしてもらっているのよ。歴代の課題から、どのような絵が受かっているのか…。それを知っているか知らないかって大きいと思わない…？」

ジェシカの余裕な口振りに、ルナシーはむっとして、「嫌みな人ね」と呟いた。

「…何が言いたいの？」

「…バカね、少しは焦ったら？ 一年前に付いた“一番”の称号もそろそろ期限切れよ」

ジェシカがクスクス笑いながら言うことに、レイはまるで呆れかえっている。その態度が、彼女の全身から出ていた。

「ちょっとあなた…受験じゃないのよ。一番の称号？ 何それ…私以上にあなたがそれにこだわってどうするの…？」

「…何ですって…？」

ジェシカは声音を低めた。表情が、先ほどの薄ら笑いから、一変して堅くなる。

「だってそうじゃない。笑わせないでよ。講師って何よ。受かりやすい絵って？？ それで、ルネ・ヴィライアーになれると思ってるの！？ そんな心構えだからあなたは私に勝てないのよ！！！」

レイは何かのネジが外れたように、ズバズバと言いたい事が溢れたようだった。ジェシカは口をパクパクさせて、驚きで目を見開いている。

「ちょっと…レイ。あなた無視するんじゃないの！！！」

「いいでしょう！ こいつには一度言わないと気が済まなかったのよ」

彼女は人差し指をジェシカの制服のリボンに突きつけた。

「あなたの技術は模範的よ。まるで教科書のように。でもね、あなたの絵には先が無い。自分の力で自分の新天地を開拓していかない限り、あなたは成功しないわよ。いいこと…っ、筋違いちゃん！！！」

レイの勢いは止まらなかった。ジェシカは「何てことを…」と半分放心状態で聞いていたが、ジェシカの取り巻きも、反論する余地がない。

あまりに的を得ているから。

レイは、「フン」とジェシカを尻目に、腕を組んで立ち去る。ルナシーは渋い顔で、わたわたしながらジェシカたちを見る。少し居たたまれないなと思ったが、

「…あなたが悪いのよ。“今”のレイにつつかかるから…」

あーあと何度も首を振りながら、彼女たちに言い聞かせた。そして、遠くのレイを追う。

しばらくして、向こうからジェシカの甲高い声が響いた。

「レイ、どうしたのよ、あなたらしくもない。」

ルナシーは、部屋のソファに深く座り込んだレイを覗き込んだ。

「ルナシー……私ジェシカにひどいこと言っちゃった。先が無いなんて、絶対に言っちゃいけないことだったのに……」

レイは頭を抱えて、大きくため息をついた。ルナシーはレイの肩を抱く。

彼女は唇を噛んだ。

「私、ただ単に、フォルテへのイラつきをジェシカにぶつけたただけだわ……。最低……」

「仕方がないわよ。いつもあなたにつっかかるジェシカも悪いもの。でも今度会ったら謝るといいわ」

「……………そうね」

レイはやつと顔を上げた。小さく泣きそうに笑うと、ルナシーを見てコクンと頷いた。

優しい風が、出窓から流れ込む。

これが“あの悲劇”を生むとも知らずに。

「スゴいな、レイ。さっきレミオに聞いたけど、レイ、あのジェシカに“筋違い”って言ったらしいぜ」

キクマサは練り消しを買って、部屋に戻ってきた所だった。

フォルテは「は？」と、今まで読んでいた雑誌を閉じると、帰ってきたばかりのキクマサの言葉を気にした。

「いつになくキツいな。モテないはずだよ。…まあジェシカが筋違いってのもわからんでも無いけど」

フォルテは立ち上がって背伸びをした。キクマサは机のイスに座ると足を組んで、じつと探るようにフォルテの方を向く。

「お前が怒らせたからだ。最近レイを避けてるだろ」

「……………」

フォルテは無言だった。

キクマサはデッサン用具を確認しながら、丸くなった鉛筆をナイフで削ぎ始めた。

「レイは二年生でルネ・ヴィライアーに最も近いんだ。変な態度で、彼女を困らせるなよ。試験に集中出来なかったら可哀想だろ」

キクマサの淡々とした正論。

フォルテは少し黙っていたが、小さくため息をついたのが分かる。

「……………だからだよ、キクマサ。レイは絵に生きなきゃいけない。だから……………俺から離れなきゃ」

「……………？」

キクマサは、ゆっくり顔を上げる。フォルテはそつと出窓に近寄り、薄く淡い夕暮れを眺めた。

ルネ・ヴィルトンからの夕暮れは絶景で、心を引き出して写すようで。

フォルテの表情は落ち着いていた。まるで、いつもの彼じゃないように。

ジェシカ・バーナードのご立腹様は、すさまじいものだった。部屋に帰ってからと言うもの、ソファアのクッションは引きちぎるし、植木鉢は壁に投げつけるし、

彼女の髪なんて乱れて、息も荒い。

「あの女…っ、私に向かって“先がない”ですって…っよくも……」

出窓の花瓶を落とす。ガラスの破片が、暗い部屋の中で怪しく光る。彼女にルームメイトは居ない。いびりすぎて退学したのだ。

「……許せないっ！！ あの女…っ！！！」

机の上の物を、片っ端から床に落としまくる。叩きつけては息を荒げて次を探す。

その時だった。

机の上に、古くて、でも装飾がとても美しい箱があった。何とも妖しい空気。

ジェシカにはまるで見覚えが無かったが、吸い込まれるように箱を開いた。

「……………何よこれ……」

箱の中には、一本のナイフ。外の箱と同様に美しい装飾が施されている。

彼女は顔をしかめた。

“鉛筆でも削って下さい”

ナイフと共に入っていた手紙には、一言そうとだけ書かれていた。

ジェシカはナイフをそっと手に取った。

宙にかざすと、組み込まれた石が淡く光ったように見える。

何て美しいの。

ジェシカはただただそのナイフを見つめた。

冷たい石の感触。

誰がくれたのかも分からないのに、手放せなくなる。

妖しい月明かり。

美術品の魔力。

変な気持ちだが、フツフツと湧き上がって、何だか気分が良い。

これが、我々の最初に触れた、魔力を秘めた美術品。

美しさなんて、恐ろしさと同じ事。

我々はまだそれを知らなかった。

| d r a w

11：ルネ・ヴィライアー・コンテスト5～失明～

僕の右目を

君にあげられたら良かった

その日の夜は、窓を明けて寝ても暖かくて、だからきつと胸騒ぎがするんだ。

シンとしているのに、どこか騒がしく感じる。

月も遠いのに、目の前にあるみたいだ。

キクマサはそつとベットから出た。

今日は何だか、眠りたいのに眠れない。よく分からないけれど、別に明日の三次が気になるわけでも無いのに。

どうしてだろう。

キクマサの予感は、もしかしたら当たっていたのかもしれない。
でも、まさかこんなことになるなんて、誰が思っただろう。

全ては、三次試験が始まろうとしていたときの事だった。ここまで残った生徒が、静かに鉛筆や木炭を削っている音がする。目の前の石膏像が、静かに布を被って試験を待っている。何の石膏像が分らないのに、静止した存在感、物としての造形から、音の無い息づかいが聞こえてきそうだ。

そう。それは、そんな静かな時間だった。
どうして、こんな事が起こったのだろう。

今更何を思っても遅すぎるけれど。

キクマサもフォルテも、ルナシーもレイも、それぞれがそれぞれの席で、周りの人達と同じように、試験が始まる時間を待っていた。

時計の、チクタクという音。

その静寂を破ったのは、一人の女子学生。

「……どうかしましたか……？ ジェシカ・バーナード」

試験監督のネイリー先生が、まず、彼女の異変に気が付いた。

ジェシカが急に立ち上がったのだ。

先生が再び声をかけたが、返事をしない。

「……………」

ジェシカは無言で、スタスタとある人の元へ行った。

レイのもとへ。

「…………？ ちょっとあんた、もうすぐ試験よ」

レイは不信に思っ眉根を潜めた。

他の生徒だってそうだ。

その時、悲劇が起こった。

「きゃああああ！！！！」

女子学生の甲高い叫び声。連鎖して起こる悲鳴と、席から逃げる人の音。

彼女がイスからガタンと落ちて、床に倒れ込んだ事実。

右目を震える手で抑えながら。

血が、指の隙間から流れて、流れて、落ちる。

「レイっ！！！！」

「っ Jessie、止めなさい！！！！」

硬直しきった空間を斬るような声。ネイリ―先生は目を見開いて、Jessieの前に立った。他の監督の先生も、彼女の腕を取り押さえ、手から例のナイフを奪う。

ジェシカは訳の分からないことを叫びながら、暴れまわる。ルナシーは半分泣きそうになりながら、レイに駆け寄った。

「誰か…っ！！ 誰か医者を！！！！ 早く！！！！」

ルナシーの声で、周りの何人かの生徒が教室を出て行った。一気にざわざわし始める教室。

キクマサはもう何が起こったのか分からずに、右目から血を流すレイに駆け寄り、青い顔でレイの名を呼ぶルナシーを見た。

そして、フォルテを探した。

「……………」

キクマサは時間が止まったかと思った。

だってフォルテが、驚きと、絶望を確信したような瞳で、

一筋涙を流したから。

ジェシカは狂ったのだろうか。

地に伏せるレイを見下ろしながら、イカレたように笑っている。

「様はないわね、レイデル・リローズ。…あなたさえ居なければ、私は一番になれるのよ。…あなたさえ居なければっ！！！！！！」

「止めなさい！！！！ ジェシカっ！！！！」

先生達も息を荒げて、彼女を止める。バタバタと、他の部屋からもルネ・ヴィルトンの教師たちが駆けつけてくる。

座ったまま、泣きじゃくっている女子生徒もいるし、震えが止まらない人だっているようだ。

当然だ。

ナイフで他人の目に切りかかるなんて正気じゃない。

ジェシカは天を仰いで、小気味よく笑った。

「……あーあ、目が無けりゃ、いくら天才様でも絵は描けないわ」

「黙りなさいジェシカ。あなたもただじゃ済まなくてよ」

ネイリ―先生は、怒りに震える瞳で、それでも平常心を保とうとしていた。信じられない、信じたくない事実。何度も首を振っていた。

「まさか……こんな事をしてしまうなんて……。あなたにだって素質が合ったのに……っ、誰よりも努力してたじゃない…ジェシカ！！！！」

先生の言葉は痛切で、その言葉に、ジェシカは笑うのを止めた。何だか、何かがプツンと切れたかのように、抵抗する力すら無くて。

「……だって先生……それでも天才には叶わないでしょう……？ 私よりも上に誰かがいる限り、誰も私の絵を見てくれないじゃない！

「!!」

ジェシカは張り詰めていたものを、涙をこぼした。彼女はレイへのコンプレックスが、きつと誰より大きかったに違いない。キクマサは複雑な思いに、拳を握った。

その時、

「だから、レイの目を刺したっていうのか!!! ふざけるなよ!!!」

フォルテは、今まで見たこともないくらい、憎しみに溢れた形相でジェシカ・バーナードに向かってつかみかかるうとした。

キクマサは、マズいと思ってフォルテの前に立ち、彼の胸ぐらをつかんで止める。

「止める…っ、フォルテ!!!」

「離せキクマサ!!!…レイが…っ!!!」

レイが。

フォルテの言いたいことは、痛いほどわかる。

キクマサは涙をこらえて何度も頷いた。フォルテは怒りと憎しみに、涙をにじませながら、ゆっくりとレイを見た。

「世界が…っ、彼女を待っていたのに」

彼女の絵を待っていたのに。

やがて、バタバタした足音と共に、何人かの医者がやって来て、レ
イを担架に載せて連れ去った。
ただ、血の跡を残して。何て量だ。

そしてすぐに警察がやって来た。

ジェシカ・バーナードは抵抗する事もなく、素直に連れていかれた。
と言うよりも、生気が無くなったように、ぼんやりしていたと言っ
た方がいいかもしれない。

いったい何が、こんな悲劇を生んだのか。

こんな悲劇を。

当然、その日あるはずだった三次試験は、一週間後に延期された。生徒の中には、ルネ・コンを辞退したり、カウンセラーが必要な人もいて、色々なことが後に尾を引きそうだった。

メディアもメディアで、この報道は世界を揺るがせた。

あれから2日がたった。レイの容態も分からないし、ジェシカがどうなったのかも分からない。

誰もが、その話題に触れたそうにしながらも、触れようとしない。

フォルテはあれから物凄く静かだ。無理も無い。

今日は雨だった。

フォルテは静かに本を読んでいた。さつきから一向に進んでいないけれど。

「大丈夫か…フォルテ…」

「……大丈夫じゃない」

そりゃそうだ。キクマサは顔をしかめた。

フォルテは本を閉じ、いつになくぼんやりとしていて、何を見ているのか何も見ていないのか。

「何で…こんな事になったんだろう…。全部俺のせいだ」

雨の音がうるさい。フォルテの声がかき消されてしまいそうだ。

「…何でお前のせいになるんだ」

「俺のせいだよ。俺がレイにあんな態度を取らなければ、こんな事にはならなかった。……こんな事を望んでいたわけじゃないのに…」

「……………」

フォルテの気持ちは痛いほど分かる。キクマサだって、この一年、ずっとフォルテとレイを見てきたんだ。

いくら文句を言い合っていたって、彼らはお互いを大切にしていた。それだけは分かっている。

レイの目はもう戻らない。

あの時、あの事件があった時、たとえそれを予感していたって、真実を知るのは辛すぎる。

「……………どういことですか…ネイリー先生……………」

ルナシーは震える声で、聞き返した。先生の言った言葉を信じたくなくて。

キクマサも、フォルテも言葉を失った。

「……………レイデル・リローズの右目は……………もう見えることは無いでしょう。……………残念ですが」

ネイリー先生の目が赤く腫れていた。きっと誰もが悔しくて悲しいのだ。

「……………レイは……………これからどうなるんですか……………？ 絵は……………」

絵は、描けるのだろうか。

フォルテの声は、恐いくらいに落ち着いていた。キクマサもルナシーも、その先が知りたくて、でも知りたくなくて。不安な面持ちで先生を見上げた。

「……後は、彼女次第です…」

ネイリ―先生は、曖昧な表現をした。でもそうとしか言えない。
後は、レイの選択次第。

でも、今までと同じようにいかなのは紛れもない事実。
絵を描いていく者として、片目を失うのは大きすぎるリスクである。

「フォルテの奴…っ、どこ行っただ…」

それは、延期された三次試験の日の事だった。

朝起きたら、フォルテが居なくなっていた。ケータイにいくら電話しても繋がらない。

もうすぐ三次試験が始まるというのに。

「キク…っ、フォルテいた？」

「いや……どこにも居ない」

ルナシーも、この校内中フォルテを探し回っていた。

「…あのバカっ！！ 一体何を考えてるんだ！！！」

キクマサが、よく分からない怒りで、セットしたばかりの髪をかきむしっているときだった。

ケータイが鳴るのをポケットの振動で気がつく。

それがフォルテであることは、表示を見てすぐにわかった。
キクマサはすぐに繋いで、

「フォルテ！！！！ お前何やってんだよ！！！」

彼が何か言うより前に、一度怒鳴らないと気がおさまらなかった。

『おおぅ……キクにしちゃ威勢がいいな……怒ってる？』

ケータイの向こうの声は、紛れもなくフォルテであった。

「当たり前だろ！！ 俺とルナがどれだけ探したと思ってるんだ……っ！！！！ もうすぐ三次試験が始まるのに、間に合わないぞ！！！」

『……………』

少しの沈黙の後、フツと笑うような吐息がケータイ越しに聞こえた。

『俺、ここでルネ・コン辞退するよ……………』

「…………え…」

キクマサは、今フォルテが言ったことが、少しの間理解出来なかった。

「…………な、何で…せつかくここまできたのに……………」

キクマサの動揺に、ルナシーは心配そうに様子を伺っている。
電話の向こうのフォルテは、大人びた声で、やけになっていると言
う様でも無い。だからこそいつそうちらが戸惑うのだ。

「…今、レイの病院に来てるんだ…。俺はレイと…来年頑張ろうと
思う……………」

「……………」

キクマサは一つ息を付いた。

「……………それで、お前がいいなら……………」

来年、ここまで残れるかも分からない。

レイが、戻ってくるかも分からないけれど。

それでもキクマサには、こうとしか言えなかった。

『…………レイは、絵をあきらめない…。俺は、それをちゃんと見届け
なきゃ』

フォルテらしくもない。
でも、それで良いと思った。

彼の選んだ選択は、きっと正しかった。

レイは、暗い病室で、たった片方になった目を虚ろにさせていた。
結局自分は、人生で最も失ってはいけないものを失った。しかも、
自分が招いた惨事だ。

「……………」

今や痛みさえ感じない。
半分になった視界。

不意に、病室のドアを叩く音がした。
どうせ、看護師さんが、包帯でも替えに来たのだろぅと思っていた。

「……………やあ…レイ」

「……………」

レイは絶句した。

どうして。

なんであいつがここにいるの。

フォルテが…。

「……………あ…あんた…、何で…」

だって今日は三次試験の日なのに。私には、もう手の届かない場所。フォルテは、ただじっとレイを見ていた。イスに座るでもなく。暗い部屋で確かめる彼女の右目を、何とも言えない面持ちで見ている。

「……………痛い…？」

「……………」

レイは首を振った。

「痛みすら感じないの…。バカみたい…」

バカみたい。

こんな姿、フォルテにだけは見られたく無かったのに。

バカみたい。

「……もう、分からないの。両目だったころの視野の広さも……
あなたまでの距離だって……」

片目を失うリスクの大きさは、失ってみて分かるもの。

レイは、片目の包帯を抑えた。

バカみたい。

私には絵しかないのに。

「……まだ、終わった訳じゃないだろ。レイ……」

その時フォルテが、静かな空間を破った。

「……フォルテ……」

「許さないからな……。お前が絵をやめるなんて……」

レイはフォルテを見上げ、彼の真剣な表情に、突然胸が苦しくなるのを感じる。カーテンすら開けてない病室の暗がりには、フォルテとレイは見つめたっていた。

彼女は、泣きそうなのを我慢できなかった。

何度も首をふりながら、希望を見いだせない自分のそのままを口にする。

「……無理よ。前のように描ける訳がないわ……」

そう。

こんな風にあっけなく、私の時代は終わる。フォルテにだって分かっているはず。

数秒の静寂が、痛いくらいに長く感じた。

「……………なあ……………覚えてるか……………？」

ふいに、フォルテがレイに問いかけた。

「どっちが先に絵を描き始めたのか」

「……………」

レイも、フォルテもただ黙って見つめ合っていた。

「最初に始めたのは……………あなたよ……………。だから私はあなたと一緒に絵画教室に通いたくて……………」

「そうだ。でもお前はすぐに俺を出し抜いた。才能があっただ……………。……………。どんどん高みへ行ってしまった」

悔しさが無かったと言ったら嘘になる。

でも、悔しさ以上に、憧れの方が大きくて、ずっと、世界は彼女を待っていると思っていた。

彼女の絵がいつか、この世界にセンサーションを巻き起こすと、それを見たいと思っていたのだ。

「一番最初に、お前の絵を見つけたんだ……俺が……っ」

フォルテは、泣きそうに笑った。

レイは、ふらつく距離感の計れない手で、必死に彼の頬に触れた。

そう。

あなたが私を、この世界に導いてくれたの。

「……ええ。あなたが私を、連れてきてくれたの……こんな所まで……っ」

はまりにはまっていった。

あなたのせいよ。

カーテンの隙間から、わずかに光が差し込んで、

泣きながら抱きしめ合う二人を照らしていた。

l
d
r
a
w

12：魔術師の弟子

この世の美術の理を
この世の美術の役割を

いつたい誰が知っているのか

「絵画科のエリーゼ先生が、僕らをお呼びになるなんて珍しい…」

淡い、アプリコットブラウンの髪の男子学生が、静かに微笑んだ。
彼の後ろには、黒髪で長身の青年が控えている。

二人は絵画科とは違う制服を着ていた。茶色いブレザーに、赤く細い、紐のリボン。

絵画棟の中の、生徒たちから離れた部屋で彼らを待っていたのは、
眼鏡をかけた厳格そうな女性だった。

「…お座りなさい、ルネ・ゴールドロッド。ルネ・シルバーロッド

…」

彼女はニコリともしないで、淡々と彼らを呼んだ。

ルネ・ゴールドロッドと呼ばれた手前の学生は、アプリコットブラウンの髪を耳にかけると、何かを悟ったように再び微笑んだ。クスクス笑いながらイスに腰掛ける。後ろの青年も、後から彼の隣に座った。

「…わざわざ、あなた方彫刻科のヴィライアーを呼び出したのは、先日我が校で起こった事件について知りたいことがあるからです…」

エリーゼ先生と呼ばれた女性は、目の前のテーブルに数枚の写真を並べた。

それは全て、あのジェシカが持っていたナイフの写真だった。

「…これは……」

ルネ・ゴールドロッドは一枚を手にとって、宙に掲げる。

たった一瞬だけ、彼の瞳が淡く金色を得た気がした。

「我が校で先日起こった事件については、語る必要は無いでしょう…。ひどい出来事でした」

エリーゼ先生は感情の読めない表情で。それでもやはり、この出来事に憤りを感じていると思わせる口調だった。

ルネ・ゴルドロッドと呼ばれた、割と小柄な青年は、彫刻科のルネ・ヴィライアー団長。
名を、パリス・ヴァレリーといった。

「……なるほど。先日の痛ましい事件は、このナイフが原因ではないかと……。エリーゼ先生はそうお考えなのですね」

パリスは相変わらず読めない笑みで、写真をそつと机に置いた。

「……ええ。ジェシカ・バーナードに非がなかったとは言いませんが、普通の人間ならあのようなことは出来ません……」

「……どうでしょうかね」

エリーゼ先生が言い切った事に、パリスは少し間を置いて、

「でも、あなたのお考えは正しい。このナイフは魔力を秘めた美術品“アール・カーヴァ”。……まあ、ランクGといった程度でしょうが。それでも弱い心はつけ込まれる……」

パリスは写真に指を突きつけた。彼の穏やかな表情は、裏腹に謎めかしい。

エリーゼ先生は瞳を細めた。

「……ジェシカは、美術品に吞まれたと……？」

「そうですね。美術品とは美しくて恐ろしいもの。特に“アール・カーヴァ”になってしまったら」

そしてパリスは、ふと視線を斜めに移す。

空気がヒヤリとした気がした。

「…それにしても、彼女はどうやってそのナイフを手に入れたのでしょうか……」

そつと顎に手を添え、彼は眉根を潜める。エリーゼ先生はふと顔を上げた。

「アール・カーヴァとはそうそう手には入るものではありません。しかし…どうも最近……これらの流動が著しい」

パリスの言葉にエリーゼ先生は静かに頷いた。

「…ええ。“誰が”彼女にナイフを渡したのか…。それが問題でしょう」

「そうなるでしょうね。基本的に、“いかがわしい”者はルネ・ヴィルトンには侵入できない。…ルネ・ヴィルトンの生徒と考えるのが妥当でしょうね。」

パリスは特に表情を変えずに、見解を述べる。それは、とんでもなく大きな問題だったのに。

エリーゼ先生は、視線を彼に向けた。

「あなた方以外にアール・カーヴァの存在を知る者が、この学校にいると…？」

「……それはそうでしょう…。美術品に近しい者なら、たどり着く可能性はありますから…。きっと、少なくともと思いますよ……」

「……………」

エリーゼ先生は無言で、何かを思い巡らしている。それは、美術品に対しての不安か、人間に対しての不満か。

その時、パリスの隣に座っていた黒髪の青年が、貫いていた沈黙を破った。

「…パリス…そろそろ時間だ…」

彼は、パリスの方を向くと、切れ長の瞳を流す。
淡々とした、落ち着いた低い声音。

「ルーン…もうそんな時間ですか。そろそろ行かないと、ヴィンセント先生に怒られますね」

パリスは立ち上がった。エリーゼ先生と目を合わせると、また意味深に微笑んでいる。

「…わざわざ僕らに聞かなくても、絵画科のヴィライアーには優秀な鑑定士がいらっしゃるではないですか。彼はどうしたんです？」

「…カイ・ヴォストンは今、急な仕事で居ません。それに…魔力のある美術品については、あなた方に聞いた方が」

「………そうですか」

エリーゼ先生は軽く眼鏡を押し上げ立ち上がった。

「ご苦勞様でした。ルネ・ゴールドロッド。ルネ・シルバーロッド。」

あなた方もお忙しいところを…。ヴィンセント先生によりしくお伝え下さい」

彼女は軽く頭を下げた。パリスとルーンも立ち上がり、それに合わせてお辞儀をする。

彼らの長いローブが、緩やかに波打った。

「いえ…アール・カーヴァの問題ともなれば、我々に無関係な話ではありません。寧ろありがたい」

「……………」

エリーゼ先生は、パリスを見た。

彼の背負っているものを見越した。

「…あなた方…彫刻科のヴィライアーは、どの科のヴィライアーとも違う。…目的も…役割も」

「それはそうです。こういう言い方は僕もあまり好きではありませんが、ルネ・ヴィルトンとは、我々彫刻科のヴィライアーのために出来たようなもの…」

そして彼はローブを翻した。

「ではご機嫌よう。エリーゼ先生…」

エリーゼは一人で部屋に佇んでいた。一秒前まではあの2人がいたと言っても良い空間が、ふと静かになった。もともと、そこには誰もいなかったのではないか。そう思わせる程、静かな空間。

あの二人がいなくなって、分かったことがある。

空間が緊張していたこと。

一瞬で、空気が緩やかなものになったのを肌で感じる。

彫刻科のルネ・ヴィライアー

この世の美術の理を、

この世の美術の役割を、

最もよく知る者たち。

「……魔術師の弟子……」

エリーゼは、彼らの居なくなつた、その一点を見つめ、ぽつりと呟いた。

彼らの事を語れば、いずれ、ルネ・ヴィルトンの真実にたどり着く。ジハードという名のもう一つの物語。

避けては通れない、神話を巡る物語。

いずれ、時は満ちる。

全ての物語は繋がっているから。

I
d
r
a
w

13：ルネ・ヴィライアー・コンテスト6～黄金期～

僕らが真摯に絵と向き合えたのは、

きっと、彼と彼女のおかげだろう。

「どうだい、キクマサ。最終試験の絵は」

「自信は無いよ。でも満足だ」

淡いスポットライトに照らされた、自分の絵を、こっぴどい大きな舞台に掲げられるのは不思議な気分だった。

キクマサとルナシーは、2人して最終試験に残れた。あの、レイの事件と、フォルテの決意。二人の覚悟。

それを目の当たりにしてから、僕らは絵に向かう態度が変わった気がする。

今日は最終審査の日だ。残った20人が、約二週間で、自由に絵を描く。

その展示の準備が今終わった。

「ここまで来ちゃったら、もうやることなんて無いな。あとは待つだけだ」

「…うん。俺は全然満足だ」

キクマサは、フォルテに手伝ってもらって、すでに展示を終えていた。

今日の午後から審査が始まる。

よもやここまで来るとは。

自分の絵が、こんなふうに光を浴びるようになるなんて。

ここに残れただけで、キクマサには十分だった。

幸せだ。

「…キク…」

背後から静かに、ささやくような鈴の声。

淡暗いギャラリーの、薄い光。

「そろそろここから出なきゃ…審査が始まるわ」

「ルナ…、もう終わったの？」

「ええ…。ジェイル先輩に手伝ってもらったから。」

ルナシーは軽く笑った。彼女の言うジェイル先輩とは、去年の推薦ヴィライアー。

今年、ルネ・ヴィライアーになるであろうと言う候補の一人だ。

キクマサも名前くらいは知っていた。

「もう…なるようにしかしかないわ。」

ルナシーも、満足そうだ。

僕らはいわゆるダークホース。
所詮は新人。

だからこそ、欲も無く落ち着いて、描きたいものを描けたから。

「あ、キクマサ先輩！！ フォルテ先輩！！」

ギャラリーから出た時だった。

聞き覚えのある声音。

白いふわふわのくせっ毛。

黒のベレー帽。

「あ……」

キクマサとフォルテは同時にその方を振り返った。そして彼を見つ
け、記憶を巻き戻した。

「ああ……、この前のベレー帽君。」

フォルテはハイハイといったように頷いた。キクマサは片方の手を
ズボンのポケットから出すと、「よう……」と手をあげた。

ルナシーは首を傾げ、キクマサを見上げて、

「……どなた？」

と尋ねた。

しかしキクマサは、はてと固まる。
視線をフォルテに流す。

フォルテは「おいおい」と小声で呟いてから、目の前までやってき
た彼に、

「えーと……、ヘルクロウ・ラヴィーニ……!」

と、まるで問題を答えるかのように人差し指を突きつけた。

ヘルはびっくりして、

「は、はい！！ な、な何ですか！？」

背筋をピシッとさせて、大きな目をさらに見開いた。

キクマサはやっと名前がわかったところで、何事もなかったかのよう
うに、

「…何やってるんだ？ こんな所で。」

ヘルを見下ろした。彼は笑顔で、

「あ、俺、残ったんです！！ 最終審査！！！」

驚くべきことを言つてのけた。

2年生三人はもちろん度肝を抜かれた。あんぐりと口を開け、「はい？」と言つた感じだ。

だって、1年生でここまで来るのって、そうそうないことだから。

ヘルは、多分一番そういうのに疎い。

高学年になるにつれ、きつとここまで来る難しさが分かるから。

「マジで??? それって超凄くない??? ほんとに超」

フォルテは真面目にそう思った。

キクマサは、多少面食らったが、共に高学年に立ち向かう下級生が増えて、そういう意味では嬉しくなった。

「まあ…お互いどうなるか分かんないけど、頑張ろうな」

「は、はい！！ありがとうございます！！キクマサ先輩」

ヘルは嬉しそうににっこり笑って、目をきらきらさせた。

しかし、ふと宙を仰ぐと、何かを思い出したように、

「あ、でも…1年生でここまで来たのって、俺だけじゃないんですよ。もう一人、クレハ・ドルフォードっていうやつがいるんです。」

「……………」

今年の1年生は侮れない。

3人は顔を見合わせた。

「……………入ります」

軽いノックの後、彼はその部屋に入った。
標識は理事長室。

彼は絵画科ルネ・ヴィライアー団長

ハク・リュオンだった。

黒髪に、切れ長の瞳が、彼の存在感を象徴している。

「よく来たね。リュオン」

部屋の奥の机に腰掛けた、一人の中年の男性。
机に肘をついて、指をくんでいる。

黒とまではいかない短い焦げ茶の髪を、紳士的に整えてある、優男の風貌。

彼が、このルネ・ヴィルトンの理事長

エリック・オーデールだった。

他にも、理事長の妹のエリーゼ先生。
教頭のガイル・アンドリユー先生が、理事長の側に立っていた。

「…まあ、座りたまえ」

理事長の一声で、三人は金の細工の、高級そうなイスに、それぞれ

腰掛けた。

「本題に入ろうか。…まあ、今日の午後から、今年のルネ・コンが始まるわけだが」

理事長は広いこの部屋の、わずか三人を見下ろして、

「現ルネ・ヴィライアーと絵画科の教員による採点が、例年通りおこなわれるわけだ。…リュオン、ヴィライアーの統率は君の責だよ」

「……分かってます」

リュオンは腕を組んで答えた。

「しかしまあ…今年は低学年の層が厚いですなあ。例年ならば、最終審査まで、二年生が一人いれば良い方だというのに…」

ガイル先生は丸い眼鏡を鼻に押し当て、そのリストの紙を見つめた。

「…ええ…、今年はある事件によって、コンテストに参加する生徒が大幅に減りました。しかも、最有力候補だった4年生のユリウス・デニスが、最終審査の直前に胃腸炎で入院。3年生のハルト・ウィリアムズはスイスのファームステイから帰ってきていけませんので、このコンテストに参加していません」

「……………」

リュオンは頭痛がする思いだった。
理事長も低くうなると、

「…ユリウスはもう何年も前から、ルネ・コンの有力候補なんだけどなあ…。精神力が問題だね、彼は。……ハルトは何というか、自由人だよなあ…」

「大問題ですよ。実力の無い者にヴィライアーになられると…俺が困る」

リユオンは「どうなさるおつもりです」と言わんばかりに、理事長の方を向いた。

「いえ…デメリットばかりではありませんよ。低学年から選ばれる者が増えれば、長い間ヴィライアーでいるものが増えるということ。そういった、ヴィライアー経験の長い者が卒業したとき、どういった表現者になるのか…楽しみではありません」

エリーゼ先生はクールにそう答えると、目の前の紅茶のカップを手を取った。

「エリーゼ先生の言うことは一理ありますぞ。心配なさるな、ルネ・テクタイト。今年はむしろ豊作ですぞ」

ガイル先生は、ダリのような髭をなでた。

「かの有名なラヴィー二家の長男も最終審査に残ってますし。いえ…臍盾など致しませんよ。…それに…」

ガイル先生は理事長室に掲げれた、歴代理事長の写真をゆっくり眺め流した。

そして、端のひとりの男性を見た。

「旧理事長の奥様の弟子も残っていると…。ここまで残ったのだから、やはりカトレア夫人は相当な教育者ですな」

「…そうだな。鼻屑する気はないが、お母様が、どういった者に目を付け、その者がどういった絵を描くのか、興味があるよ。……あの人の目にかなう者など、そうそう居ないはずだ」

理事長は瞳を細めた。遠い何かを思い出すように。

リュオンは黙って聞いていた。しかめっ面なのは元々だが、この話に興味を持たなかったわけではない。理事長から目を背けると、

「…期待はずれだったら許しませんよ」

「はは。リュオン…大丈夫さ。ルネ・ヴィライアーに導かれる者、何かしら持っているのだから」

ルネ・ヴィライアー・コンテストは平等を保つために匿名制。

全ては紙一重な絵の審査。

ここまで残ったものならば、誰が選ばれたっておかしくはない。誰が落ちたっておかしくはない。

全ては紙一重な一枚の絵によって、運命が分かれる。

天使も悪魔もそこにいる。

わかっているはず。

絵を描くというのは、そういった意味で難しい。

梓はたったの七石。

リュオンはルネ・ヴィライアーの集まっている部屋まで、一直線で帰ってきた。

部屋の外の廊下で、ひとりの男子学生が窓の外を見ている。

ふと、リュオンに気がついた。

「…おかえり、リュオン」

「…ティアン…」

眼鏡をかけた、その青年は5年生のルネ・ターコイズ。

団長補佐のティアン・レーゼスだった。

「今年は豊作だよ」

「お前も先生達と同じことを言うんだな」

リュオンはティアンに並んで、窓から外を見た。

悠大ともいえるルネ・ヴィルトンの敷地。
ギリシャの青い空の色。

「…ジェイルとカイは去年の推薦ヴィライアーというのを抜きにしても、今年確実になれるだろうね。あの二人には、ヴィライアーでいてもらわなくちゃ…」

ティアンは眼鏡の奥で、ほくそ笑んだ。

彼は優秀な補佐だ。

リュオンを幼い頃から支えてきた。

「…ルネ・ヴィライアーになることは、このルネ・ヴィルトンを象徴すること。…想像以上に過酷なことだ。俺たちが一番わかってる」

リュオンは切れ長の瞳を、さらに細め、低い声でつぶやくように言った。

「…でも、美術界にどれだけ必要な存在か…。世界の美しいものを見に行ける…その舞台に上げれる」

自分の表現者としての、

一番大切な物を、知りに行ける。

「俺たちは今年が最後だ。…俺にとって……一生できっと、最後の自由」

「……………」

未来の決められた者の、最後の時間。

「……心配しないで。間違い無く、今はルネ・ヴィライアーの黄金期だよ……」

ルネ・ヴィルトンの歴史の数だけ、ルネ・ヴィライアーの存在がある。

もちろんそれが、この学校の全てではないけれど。

それでもヴィライアーの存在が、歴史を左右してきたのは言いつまでもない。

今までも、これから、沢山のヴィライアーがいる。

でも、この代のヴィライアーが、後に、

黄金期と言われ、長く語り継がれることになるのは、

全ては、この代のヴィライアーによって、大きく何かが動くことになるから。

リュオンは穏やかな窓辺から現実へと戻った。

そして、ヴァイアーたちのいる、その部屋の扉を開ける。

彼の、

彼らの選択が、

きっと、世界を変えた。

I
d
r
a
w

14：ルネ・ヴィライアー・コンテスト7 最後の審判

それは、

最後の審判

“ 青底 ”

海辺を歩いていたら、波に乗って、一つの小瓶が転がってきた。

何だろう？

僕は、そつとその小瓶を拾い上げた。

おや？

ビンの中に紙があるぞ。

僕はその紙を取り出して広げた。

「はじめまして。そしてさようなら。

この星はもうダメです。

今夜、最後の水を飲みました。

僕はこの手紙をコロニーの前の沼に投げます。

いつか、いつの日に
いつかの過去や未来で、

誰かがこの手紙を拾ってくださいように。

3005/5/10」

海が泣いている。

この手紙は海の底に沈んだ、未来からの手紙だった。

風が僕のそばを通り抜けた。

誰かに呼ばれた気がして、振り返った。

／以下省略

「海をこんな風に表現するのか。恐れ入ったな…」

美術館ばりの展示ギャラリー。

ルネ・ヴィライアーの一人、4年生のルネ・ガーネットであるシャ
ンデリー・リオールが、青い海の絵の前で佇んだまま、その絵のイ
マジンストーリーに身を委ねていた。

シャンデリー・リオールとは、金髪壁眼の、ルネ・ヴィルトンでも
非常に有名な人物である。

ここ10年で、唯一の2年生からのヴィライアーだ。

見目麗しい所もあって、彼は一躍学園の王子と称えられた。

そんな彼が見ていた絵は、細かい技術の光る、隙のない海の絵。

「リオ…!」

彼の腕に抱きついた一人の女子学生がいた。

「シーダ…、どこに行ってたの？」

「シャルロとちよつとね。…リオこそ、立ち止まっちゃって」

シーダと呼ばれた、その女子学生。

4年生ルネ・カーネリアンの、シルフィーダ・ケイドである。

「見てごらんシーダ。この絵…」

「……………」

リオに促されて、シーダはその絵を見上げた。

青と白と。

見えない海底に隠された物語。

シーダの目の色が変わった。

「……………素敵……………。美しい海なのに…、美しさを描いてるわけじゃないのね」

美しさとは

綺麗なものだけではないから。

* シャンデリー・リオール（ルネ・ガーネット）

* シルフィーダ・ケイド（ルネ・カーネリアン）

「……………」

みんながあっけに取られた絵がある。

スノーフリーク・ロズベルトは、ぽかんとした群衆の中で、相変わらず無表情だったのだが、

内心その絵に思うところがあった。

“ 地下迷宮 ”

土を踏む。

埋もれる。

キラキラ。

ドカンゴン。
ドカンガンゴン。

キラキラ。

落ちたと言っか滑ったと言っか

キラキラ

上を見る。

手を伸ばす。

チ力チ力。
土が光る。

砂の妖精。
優しい怪物。

一番恐いのは、自分自身。

赤の色。

／続く。

「……………連載物？」

スノーは一人顔をしかめた。

彼にとつて、この絵を描いた人物はよく知っている人であり、また、絵があまりに強烈かつ野性的で、いかにもアカデミックとはほど遠い自由気ままなもので、すぐに分かる。

「すつげーな…とうとうルネ・ヴィルトンもこういうのに手を出すような時代になったんだな…」

“斜め前の人”が、小声でそんな事を言っていた。

確かに今までは、こういう絵の種類の人がルネ・ヴィライアーになることは無かったから。

何を描いているのか、ハッキリとは分からない絵。

ビビッドの絶妙な駆け引き。

メインは自ずとわかる、そんな色との会話。

何も考えていないようで、数ある正解を導き出す、ある意味で物凄い絵画。

「凄いわね。デタラメそうで、でも間違っていないもの」

スノーの隣に、いつの間にかシャルロがいた。

彼女は、スノーとは裏腹に、アーモンド型の瞳に驚きの色を浮かべ

ていた。

“斜め前の人”は、「お、来たね小さいお姉様」とか、よけいなことを言ったので、彼女はそいつをにらむと、「…後で見てください。フレイ」と、小声だが、怖い口調だった。“斜め前の人”は、そそくさと逃げる。

「全く…」

彼女はブツブツ言いながらも、その絵を見上げた。
スノーも再び、視線を絵に戻す。

「これって…もの凄く計算されているわね…」

「……まあ、本人はわかってないかもしれないけどね」

「……知ってるの？」

シャルロは顔をしかめた。不思議そうというか、胡散臭そうにスノーを見上げる。

「………多分ね」

スノーはシャルロと視線を合わせずに、眉根を潜めた。

「花の絵って、スタンダードだけど、それ故に難しいわ」

「…コスモスかな…凄いや、極端に細い筆で仕上げてるね。…良い表現だ」

レッドはまじまじと、驚くべきそのタッチを見つめた。

「……待って…」

ナギはその絵から遠ざかり、振り返る。
その時の、何ともいえない静かな驚き。

爽やかな空気。

「驚いた…。花と花の間に人がいるわ」

「…何だって？」

レッドは小声で聞き返し、小走りでナギのところまで下がった。

何て遠近感。

人物は不確かなタッチなのに、確かな存在感だった。

“ 憧れ ”

私とあなたには、この花畑分の距離がある。

私は花の隙間から、

遠いあなたを目で追った。

私とあなたには、

この花畑分だけ距離がある。

ある日あなたは居なかった。

私はいつものように、あなたを覗いていたのに。

どこにいるの？

私は花をかき分けた。

コスモスが散る。

向こうがわに出たとき、

日差しの眩しさに目を覆った。

太陽の恩恵が、

あなたの視力を奪ってしまっていた。

／以下省略

静かに、厳かに、審査は続けられた。

絵に答えは無い。

「……大らかそうで、どこか強い。…人物像がわかる気がするよ」

理事長はある絵の前で、落ち着いた声で言った。

エリーゼ先生はその時の理事長の顔を、いつまでも忘れないだろう。

宝物を見つけた、少年のような顔だった。

“ 生き恥 ”

過去の罪も、忘れたわけじゃ無かった。

忘れていいわけない。

雨とラベンダー

霧とクロッカス

雲のような、私の憧れ

風のような私の恩師

私は生き恥をさらして、あなたを追います。

私の人生を変えてくれた人よ。

私は生まれ変わったりしません。

このまま、過去のしがらみを背負ったまま、

明るい世界を歩みたい。

／以下省略

エリーゼにも、理事長にも、絵には描かれていない、誰かを見た。
それは、人物すら居ない、抽象画だったのに。

でも、それはよく知っている人のような、

よく知っている感情のような気がした。

「お母様は凄い人ね…。偉大だわ」

「おや…エリーゼ。君もこれは、お母様だと思うかい…?」

理事長は横目でエリーゼを見た。微笑む目元に、小さなシワをつくる。

エリーゼは、メガネの奥の瞳を、その絵画から離すことなく、

「少なくとも、私にとっては、お母様よ…。」

絵から読みとる物語。

正解は無く、

また、一人一人あると言ってもいい。

彼らはキクマサの絵に深い感動を覚えた。

目の肥えたこの二人すら、心を動かされたのだ。

それは、キクマサがきつと、絵を描く楽しさを一心に込めていたから。

欲もなく、ただ、絵を描ける喜びと感謝を

奇跡的なものを描いていたから。

最終審査に残ったのは20人。

審査員は絵画科のルネ・ヴィライアーと、60人余りの教授たちだった。

投票は採点制。

その合計点で、すべては決まる。

リュオンは相変わらずしかめっ面で、自分の採点用紙を見ていた。

自分の中で、答えは出ている。

絵から読みとれる、その人間性や、あふれる個性。

ルネ・ヴィライアーとして欲しい人材。

今年は思いの外に面白い。

イマジンストーリーを通して、訴えかける絵が多い。

もちろん全てがそうではないけれど。

去年の、優秀な先輩方の抜けた穴を、埋めるだけの人材は居そうだ。

ボールペンが、番号を刻む。

点数を示す。

赤い絨毯。

大理石の壁。

そうやって、世界に導かれるように、

歴史に名を残す者は運命的に出会う。

リュオンは投票用紙を二度折って、

白い箱に入れた。

最後の審判は下された。

いよいよだった。

新生ヴィライアーの誕生。

六つの玉座に

誰かが座る。

I
d
r
a
w

15：新生ルネ・ヴィライアー

新たに玉座は与えられ、

宝石の王冠を授けられるだろう。

† 掲示板 †

> ルネ・サファイア <
ジェイル・クォーシャン（3年）

>ルネ・ハウライト<
カイ・ヴォストン（3年）

>ルネ・アメジスト<
オノダ・キクマサ（2年）

>ルネ・トパーズ<
ルナシー・ミディエム（2年）

>ルネ・アクアマリン<
ヘルクロウ・ラヴィーニ（1年）

>ルネ・コーラル<
クレハ・ドルフォード（1年）

以上六名を新ヴィライアーとする。

確かにそう書いてあった。

あの最終選考から約三日。

キクマサとルナシーは、掲示板の前でお互い顔を見合わせた。

周りでは、ザワザワ騒がしい。

とにかく1年生と2年生が四人もいる、歴代でも例のないことに、驚いているやら憤慨しているやら、

苦笑いやらで。

キクマサとルナシーはそそくさとその場を去った。

とにかく、人目のつかないところに行かないと、上学年のプライドに火をつけかねない。

バン!!

勢いよく444号室の扉を閉めた。

「…見た…?」

「見たわ。どついう事?」

ルナシーは口元に手を当て、何かなんだかわからないようだった。

キクマサも腕を組んで、その場をウロウロしながら、

「…棚からばた餅ってこういう事かな…」

「何ですって…？」

「いや、日本のことわざなんだけどね…」

まさかというか、とんでもないというか

恐れ多いというか。

「…アメジストと…トパーズか…」

紫と黄の宝石。

荣誉ある称号。

「夢のようだわ。嬉しいけれど、なんだか怖い…」

「……………」

誰もいないその部屋で、埃が光に透けて散る。

静かな日溜まりに、

とんでもない事態に僕は戸惑いを隠せなかった。

その日、フォルテは寝坊した。

起きたらキクマサが居なかったから、あいつ一人で合否を見に行っ
たんだな、と、多少ばつが悪かった。

急いで掲示板を見に行ったときの、

「ええええええ!!!」

と、とんでもない驚きようだったので、やはりキクマサと共に居な
くて良かったかな、といったところだった。

「だってお前起きなかったんだから」

「嘘だ。そこまで本気で起こしにこなかったくせに」

「当たり前だろ。その場でお前に慰められるのは御免だったんだよ」

当然キクマサは受かつてるとは思っていなかったのだ。

ルナシーとは、掲示板前で落ち合ったけど。

「見たかったなあ。お前等のビックリしてるところ」

フォルテは何を想像しているのか。

宙を見てため息をついた。

444号室に、相変わらず籠城していたキクマサとルナシーの所に、先ほど凄い勢いでやってきたのが、このフォルテだった。

「…レイへのみやげ話が出来たなあ」

「……………」

キクマサとルナシーは、ふと顔を上げた。

「…今日、お見舞いに行くのね」

「うん。まあ、あんまり心配すんなよ。あいつ、もうすぐ退院出来るんだから…。大丈夫さ」

フォルテの口調は、とても信頼できそうなほどに、落ち着いた物だった。

この二人なら、きっと大丈夫だ。

ルネ・ヴィライアーの会議室が、いったいどこに存在するのかわからないのに、ルネ・ヴィライアーになってしまった。

「おめでとうキクマサ君！…！」

運がいいことに、レッド先輩が、たまたま目の前を通ったけれど。

「レッド先輩。どうも。…あの、ヴィライアーの会議室って何処ですか？？」

キクマサはそこら辺をさまよっていた焦りから、いきなり聞いてみた。

レッド先輩は相変わらずにこやかに、

「絵画棟の最上階だよ。いいね、その誰もが知ってる常識を知らないところが」

「……スイマセン」

キクマサは、冷や汗ながらに、斜め下を見た。

レッド先輩とエレベーターに乗り込む。
彼に偶然会えて本当に良かった。

「今日の会議は戴冠式だよ」

「た、戴冠式!？」

キクマサは聞き返した。

「そう。宝石をね、貰えるんだよ。君も」

レッドは自らの胸のブローチを指差した。

その、深い煌めきを秘めた、ルビーのブローチを。

「君はアメジストだったね」

「…はい。…確か」

キクマサは多少控えめだ。レッドはそんなキクマサを、きょとんとした目で見ると、

「もつと自信を持ったほうがいい。運だけでなれるものじゃないんだから」

「……はあ」

キクマサはゆっくり頷いた。自信がないというより確信がないのだ。

と、その時だった。

エレベーターが、最上階に行く前に止まった。

誰か乗るのかなと、単純に思っていた。

「あ、団長」

レッドは、乗り込んできたその男に、当たり前前にそうは言えたけど。

キクマサにとってはいきなりすぎる。

ルネ・ヴィライアーの団長である、ハク・リュオンである。

彼は、レッドには目もくれずに、鋭い瞳で、キクマサを見た。

「……わかった。ちょっと待て」

団長は、キクマサが何か言う前に、ストップをかけた。

「お前、オノダ・キクマサだろ!!」

「は、はい……。え……何で……」

キクマサは戸惑った。

リュオンは腕を組んで、

「俺が新メンバーの名前をチェックしてないと思うか？そして珍し

く唯一のアジア系だったから」

ぶっきらぼうな言い方だが、思いの外な事を言う。

「今年は1年生が二人もいるね、団長」

「そーだ。頭抱えるぜ、今年は」

リュオンはエレベーターの壁に背をつけ、眉間にシワを寄せた。

その時、再びエレベーターが止まった。

ドアが開いた時の、リュオンの嫌そうな顔と、乗ってくるその人のうんざりした顔。

「うーわ。頭痛い原因がここにも」

団長は、乗り込んできた女子学生に向かってそんな事を言う。

深い色の綺麗な巻き毛と、スミレ色の瞳。小柄だけど、かなり気が強そうだ。

知ってる。

ルネ・アンバーのシャルロ・グレディアだ。確か4年生の。

彼女はこの学園の賞金女王で有名だ。

「嫌だ。変なのとぶつかっちゃった」

彼女は片腕を腰に当て、団長を見て鼻で笑った。

「何だとてめえ。相変わらず生意気だなシャルロ」

「団長こそ、相変わらずの単細胞具合ね。と言うより、どうしてもあなたが団長に抜擢されたのか、未だにわからないわあ」

シャルロは、印象的な瞳を、クールに流した。赤いルージユが、驚くほどよく似合う。

「何だと〜!？」

団長は、大層お冠状態に近かったが、彼女はツーンとしていた。リユオンは上から彼女にメンチを切る。

しかしシャルロは、

「あ、ご機嫌ようレッド先輩」

「や、やあシャルロちゃん」

団長を無視してレッドに愛想よく挨拶。

その視線がキクマサを捉えた。すぐにピンときたようだ

「あら〜、もしかして新メンバー？」

「あ、はい。オノダ・キクマサです」

キクマサは背筋を伸ばして、早口で挨拶した。

シャルロは、キクマサをじっと見つめ、そして横目で団長を冷やかに見ると、

「ヴイライアーには常識の無い先輩が多いから、君はそうならないようにね」

「お前を含めてな」

団長のツッコミに、シャルロは10センチはあろつかという、黒いヒールで、彼の足を思いつきり踏んだ。

「痛ってええ!!!!」

鈍い音と、悲鳴が、エレベーターに響き渡った。

最上階とは思いの他に遠い。

少なくともキクマサにはそう感じた。

エレベーターの扉が、やっと目的地で開いた。

相変わらず言い争っている、団長とシャルロがまず出て、レッドが出て、げっそりしたキクマサが出た。

「あの二人、とんでもなく仲悪いから気をつけて」

レッドが軽く耳打ちする。

確かに。

見てわかるほどの仲の悪さだ。

何でかは分からないけれど。

最上階は、素晴らしい空間だった。

まるで空中庭園のようだ。

中心部には噴水がある。

歩くたびに、靴の音が響きわたった。

団長たちについていきながら、ガラス張りの壁から透けて見える青い空を眺めた。

白い鳩が、斜めに横切ったのが、印象的だった。

会議室は一番奥に有るそうだ。

木の大きな扉が、彼らの称号を物語る。

リュオンが、その扉を開けた。

「……………」

半円を描く机。

それぞれの席に着いているヴィライアー達。

彼らの視線が、こちらに一心に向かった。

「…お座りなさい。もうすぐ会議が始まりますよ」

前にいる女性の教授。

エリーゼ先生だ。

「エリーゼ先生はヴィライアーの主任なんだよ」

再びレッドが耳打ちしてくれた。

部屋を見渡して、ルナシーを見つけた。彼女が手招きをし、その隣の席に座る。

まだ全員が揃ったわけではなさそうだが、やはりルネ・ヴィライアーの集い。

何というか凄みがある。

その中に、自分が居るといふ、

この不思議な感覚を何と言ったらいいのか。

この学校の、

誇りと期待を一心に受ける

ルネ・ヴィライアー。

宝石の玉座。

キクマサは一つ深呼吸した。

今、ここに居る俺を、

カトレアさんはどう思うだろう。

夢のような事態に困惑して、忘れかけていた事がある。

カトレアさんは、

世界の美しい物を見てこいと言っていた。

ここで満足したら負けだ。

やっと、ここまで来た。

世界への切符を手に入れたのだ。

美術に、

芸術に、

あらゆる名誉と称号に、翻弄されないように。

今座っている椅子から、転がり落ちてしまわないように。

I
d
r
a
w

16：戒めのアメジスト

未知と想像の象徴

ギリシアの神々による戴冠の儀式

幻想的なアメジスト

「遅れてすみません!!!」

仰々しい空気を裂くように、大きな声で扉を開けた者がいた。

ヘルクロウ・ラヴィーニ（１年）とクレハ・ドルフォード（１年）
だった。

キクマサは、白いフワフワの髪の毛のヘルは知っていたけれど、
その隣の、赤毛の少年は知らない。

二人は、啞然としている面前で、息を整えながら、

「ヘルがいけないんだ！！体力がないもんだから！！」

「な、なにい！？ あれだけ道に迷って、あげくに根拠の無い君の
直感に振り回されたんだよ！！ 君みたいな野生児とは違うんだ！
！」

勇気ある少年達だ。

先輩たちの前で、遅れてきたというのに喧嘩を始めたわけだから。

バチバチにらみ合っている２人の前に、ご立腹な団長が現れた。そ
して…

ガン

人差し指を、何かちょっと立てた、あの痛いげんこつが投下されたのだ。

二人は、ギヤアと、悲鳴を上げてうずくまった。特にヘルなんて、親にも殴られたこと無いのに、と言ってもおかしくはない。

「てめえらしい度胸だな。遅れた拳げ句に、こつち丸無視で喧嘩しやがって…」
団長は、二人より遥かに身長が高いので、より一層凄い迫力だろうなと思った。

ヘルなんて、血統書付きの白いチワワみたいになってる。

「だって先輩、ここ分かんなかったんだもん」

赤毛の方は、頭をいまだにさすりながら、なんと反論してきた。キクマサはあんぐりして、手に汗握った。

確かにそうだけど。

泣く子も黙る、団長様だぞー！

少なくとも、今のキクマサの団長へのイメージは、これだった。

しかし団長は、

「……確かにまあな」

顔は相変わらず怒ってそうに見えたのに、意外とすんなり認めた。

キクマサは、ほっとしたような、拍子抜けのような気もして、息をつく。

それまで、沈黙を貫いていたエリーゼ先生が、

「…早くお座りなさい、ルネ・アクアマリン、ルネ・コーラル。…
ルネ・テクタイト、あなたですよ」

無表情が、むしろ恐ろしい。ヘルとクレハは、二つ名に慣れているので、ピンとこなかったのか一時キョトンとしていた。

全員が、この場に揃ったことは、感極まりない事なのだろう。

新生ルネ・ヴィライアー。

エリーゼ先生は、一番前の大きな教卓から、この集結を確認していた。

「…今年も、こうやってルネ・ヴィライアーが選ばれ、集められるのです。今年の新メンバーの方は、ようこそ…この場所にやってきました。歓迎いたします…」

エリーゼ先生の言葉は、小難しいことは何一つ言っていなかったのに、とても響く。

「栄光に、溺れてはいけません…。あなた達は、その身を持って、芸術家の生き様を、この学校の生徒に示さなければならないのですから」

万人に、理解されなくても、

芸術とは、いつも歴史の一部として、目に見える形で後世に残るのだ。

エリーゼ先生は、赤い宝石箱を教卓の上に置いた。

鍵穴と、鍵の行方。

それは、本当に宝石箱だから。

その箱が開けられたら、全てが始まる。

全てが。

戴冠式とは、よく言ったものだ。

栄光の証し。

役目を忘れないための鎖。

キクマサは、紫の称号。アメジストの恩恵を受けたから。

エリーゼ先生は、宝石箱から、紫水晶の埋め込まれたブローチを取り出した。

その、謎めかしい輝きを。

「ルネ・アメジスト…未知と想像の象徴…。あなたの才能をかつているのは、きっと私達だけではないでしょう。精進なさい」

「……はい……」

キクマサは、その言葉の意味がよく分からなかったが、頷くしかなかった。

手渡された、そのアメジストが、冷たくて、重たくて。

軽いけど、重たくて。

恐いくらいに綺麗で。

新しいヴィライアーが、与えられた宝石の美しさに、

どうか、押しつぶされませんように。

一通り、戴冠式が終わった後の事だった。

宝石を身につけ、不思議な感覚に陥っていた新メンバー達と、それを興味津々に見ている先輩方。

エリーゼ先生は、宝石箱を厳重に鍵かけた。

すでに中身は無いというのに。

「申し送れました。私は、ルネ・ヴィライアー主任の、エリーゼ・オーデールです。基本的には、絵画科四年生の担当です。そして……」

エリーゼ先生は、部屋の横の長机に座っている、若い男性教師に視線を向けた。

「今年の副任は、リース・ラヴィーニ先生です。研修は、私達2人が引率します」

エリーゼ先生に紹介され、リース先生が立ち上がった。

若くて、ジーンズのよく似合う先生だ。キクマサは余り関わったことはなかったが、絵画科教員の中では、一番若いのではないかと思う。

「えー…、先ほど紹介されました、リース・ラヴィーニです。主に絵画科一年生担当で…、あ…お気づきの方いると思うけど、めでたくルネ・アクアマリンになったそのベレー帽の彼は、僕の甥っ子です」

何と。

なるほどラヴィーニ家の名を持つもの、やはり侮れない。

ヘルは恥ずかしそうにうつむいていた。

「今年の幹部を紹介いたしましょう。絵画科ルネ・ヴィライアー団長が、テクタイトのハク・リュオン…。副団長が、パールのメルベ

リー・セレネームです…。」

エリーゼ先生に視線で促され、五年生の2人が前に出てきた。一人はおなじみの団長だったが、もう一人の女性は、長いプラチナブロンドの髪の毛の、柔らかな清楚な雰囲気を持つ、有名なメルベリー嬢であった。

彼女は、絵に描いたような、美しいお嬢様だ。

団長は、今更挨拶なんかする気はさらさらなくて、天井からモニターを下ろした。

そこには、いきなりピラミッドの写真が映された。

「さっそくで悪いが、ルネ・コンが長引いたせいで時間が無いから。今年最初の研修は…」

団長は赤いポイントレーザーで、ピラミッドを無駄にグルグル囲んだ。

「想像できるだろうが、“エジプト”だ。見てみる、このピラミッドを……。まあ…エジプトを知るのは、美術を知る上で、基盤的に大切な事だ。無駄な研修にするなよ…」

団長はそう言い終わると、メルベリーに目配りした。メルベリーは

軽く微笑むと、目の前のホワイトのノートパソコンを操作する。

モニターはすぐに変わった。

「研修は来週には出発する。カイロと、アブシンベル大神殿…そしてギザの三大ピラミッド…」

団長が名を出す都市や遺産を、追うようにモニターが移る。キクマサは、勿論エジプトになんか行ったことはない。それでも、想像をかき立てる写真を食い入るように見ていた。

実際は、きっとこんなものじゃない。

こんな、想像なんてすぐに越えていく。

隣のルナシーも、同じように黙ってモニターを見つめていた。

「研修期間は約一週間。パンフレットを配布するから、目を通すように。……あと、カイは今日居るのか…？ 居ないか」

団長はヴィライアーを眺めた。どうやら一人居ないらしい。

キクマサは多少拍子抜けた。さっき、ヴィライアーが全員揃ってるのかと思って、あんなに胸が熱くなったのに。

恥ずかしいじゃないか。

「カイは今日も仕事か… たく…、研修だけでも参加させるぞ。ティアン… 手配してくれ。」

「… わかってるよ」

ティアンと呼ばれた、メガネの五年生は、その読めない表情でうなづいた。

我々新人から見たら、いまいちよくわからないやりとりであった。

「売れっ子の鑑定士さんは、いつも忙しいねえ。」

レッドが、机に肘をついて、かなりマツタリとした口調で言った。

「売れっ子だろうが、鑑定士だろうが、ヴィライアーである以上は、義務をはたしてもらわないとな。いくら世間があいつを“鑑定王子” とはやし立てようとな」

キクマサは目が点になった。しかし、ルナシーは何だか分かったように小さく声を上げ、瞳を大きくさせる。

団長は、例の“鑑定王子”の話にウンザリしたように、

「あんな不登校野郎の話は無駄だ。本題に戻るぞ…。えゝ…」

団長は、背後のモニターを振り返った。

「研修は、ただの旅じゃない。しっかりと目に焼き付ける。いいか…新人ども…。絵だけ描いていても、絵は描けない」

団長は、前の机に手をついた。

彼は、とても確信的な事を言っていた。

「絵は、内容が必要だ。内容は、どうやって思いつくんだ…。発想は、どこからやってくるんだ…。それは、経験だ」

生まれてきて、今まで生きてきた、その経験。

同じ世界を見ていたって、何通りもの見方に気づく。

世界の美しさ、面白さに気がつく。

「絵だけ描いてればいいと思うな…。技術だけが先走る絵は最低だ。…長い人生の中で、いつまでも絵を描くためには、ここで、この時代に、あらゆるものを見に行くんだ。いづれ、どれだけ大切なことだったか思い知る…」

芸術家にとって、これほど大切に、

これほど気付きにくいことはないけれど。

団長は、前のめりだった上体を起こした。
彼の言ったことは、もっともだ。

キクマサは、雷にうたれたようにビリビリきた。

そうだ。

「……………」

カトレアさんが言っていたことは、この事なんだ。

「ここにいる奴らは、実際稀な経歴の奴ばかりだ。芸術において、
どんな人生を送ってしようと、それら全てが大きな武器になる。や

ること成すこと、無駄なんてないぞ…。全部吸収しろ。ヴィライアーの研修は、そのための大きなチャンスだ」

団長は、鷹のような瞳で、一同を見渡す。

「ヴィライアーとしての役割を果たせよ。おまえらのゴールはヴィライアーじゃないんだ…」

ゴールなんて無い。

あえて言うならば千年も二千年も後にやってくるから。

芸術は、いつまでも歴史に残る。

研究される。

時代を示せる。

今残っている、歴史上の絵画は、いつまでも語られている。

そうだ。

それは、これからやってくる未来だって。

キクマサは、重くのしかかる何かに負けたくなくて、胸につけた、紫のブローチを握りしめた。

その、象徴を。

このブローチは、戒めだった。

今の歴史を刻む義務が、我々にはあるのだ。

l
d
r
a
w

17：トパーズの仮面

我々が、絵画を通して今の時代を刻むと言っのなら、

どうして“ここ”に彼女が居ないのだろうか。

ルナシーは、団長の言葉を聞きながら、ぼんやりとそんな事を考えていた。

そんな、大それた義務を持っている人はなかなか居るものじゃない。

でも、彼女はそうだった。

そうなるべき人だったのに。

ならばなぜ、神様は彼女から宿命を奪ったのか。

「…………ルナ…、どうした…？」

それは、会議のちょっとした休憩時間であつた。五年生は慌ただしいが、それ以外は割とリラックスしている時間。

隣に座っていたキクマサに声をかけられた。

どうやら、私のもやもやした葛藤が面に出ていたらしい。

「…ちよつと…考えごとをしていたの…。ごめんなさい」

「……何であやまるの」

キクマサは顔をしかめた。

ルナシーは伏し目がちに瞳を細める。

だって、こんな事言えるわけない。

少なくとも、私はルネ・トパーズになったのだ。

それでも私はレイを諦められない。

私よりもずっとふさわしい。それは、一年前にあの子と会った日から、

あの子の絵を始めてみたときから、分かっていたことだ。

「……びっくりした…部屋にお姫様が居たかと思った」

初めて出会った時のことだった。彼女は私にそう言って驚いたけれど。

私はきつと、もっと驚いた。あの一番上に掲げられた衝撃的な絵画を前に。

どうしてこんな絵が描けるのだろう。

鳥肌がたった。

「……レイのこと考えてるだろう」

不意にキクマサが呟くように言った。
ルナシーは顔を上げる。

ザワザワ、会議室の中はそれぞれの話題で騒がしいのに、ここだけ
いやに静かな気がした。

「考えても仕方がないのに…」

「……そうね」

ルナシーはこういう考えが、今や意味のないものだとちゃんとわか
っていた。

キクマサもわかっていた。

ルナシーはキクマサを見ることができなかった。

彼は、ちゃんと受け止めているのに。

自分はいまだにトパーズを直視できなかった。

「レイに悪いと思ってるの？」

「…そうじゃないわ。ただ、レイならきっと、未来に残る絵を描け
ると思っていたから…」

ルナシーは、先ほどの団長の言葉を意識せずにはいらなかった。
キクマサは、少し間を置いて、

「……それは…ルナにはできないの？」

「……」

単刀直入で、ダイレクトな切り返し。

ルナシーはハツとしたように、キクマサを見上げた。

「……レイがいなかったとはいえ、ルナはヴィライアーになったのに……」

「……キク……。私を見損なった……？」

ルナシーは、少しだけ悲しそうに笑った。

キクマサは、その言葉に多少ヒヤツとしたが、

「いや…、俺にもその気持ちは…よくわかるよ…。ルナを見損なうなんてあり得ない。でもさ…、もしレイが、この世界に必要なだったら……きつと帰ってくるよ」

根拠もないのにそう言ってしまった。

ルナシーは、とても驚いたような顔をしていた。

再び会議が始まった。

今度は、エジプト研修についての細かい説明だった。

ルナシーは多少上の空で、モニターの向こうの世界よりもっともつと遠くを見ていた。

キクは凄い。

先ほどのちょっとしたやり取りで、ルナシーは本気でそう思った。

前々から、彼は多少、そう言つところがあるなとは思っていた。
私の一歩前を歩くところが。

何だかクールそうで、でも意外と抜けてて、そう言うところが実に面白い人だと思っていた。

ただ、彼の過去に何があったのかはわからないが、ここぞという時には本当に冷静だ。

彼も、私と同じようにレイの絵を見ていたと思う。

悔しさすら通り過ぎてしまふ、先に立つ憧れを。

あなたの、レイの絵をみる瞳は違った。

私の絵なんて、気にもかけていなかったくせに。

キクマサと初めて会った日の事は、今でも覚えてる。

私とあなたは、きつととても印象的な出会いをした。

だから、私たちが仲良くなるのに時間はかからなかった。

彼は私をルナと呼び、私は彼を、キクと呼ぶ。

そして、あなたの絵を、初めて見た。

「……………」

他の誰もが気付かなくなっただって、私はわかった。

レイとは違うタイプの天才。

恐ろしいまでの将来性。

彼自身がそれに気付いてなかったけれど。

私だけは気付いていたの。

あなたは、ルネ・ヴィライアーに成るべくして成ったのよ。

何で、こんな人たちが居るんだろうと思っていた。

絵を描くのが大好きなのに、私はたまにわからなくなる。

フォルテは多少私と境遇が似ていたかもしれない。

でも彼は、絵よりも大切なものがある上での絵画科のように思う。
それが何かはわからないけれど。

一度だけ、フォルテに聞いたことがある。

「レイの絵を……ずっと見てきたのでしょうか。……自信を無くす時ってない？」

フォルテは、暇さえあれば鉛筆を削っていたから、その手を止めて、
「……そりゃあ……昔はあったよ。でも……多分俺って相当なファンなんだよね。レイの絵の」

レイに絶対言わないでって言われたから、誰にも言っていないけれど、

とても素敵な考え方だと思った。

この時ほど、レイを羨ましいと思ったことはない。

レイが大好きだった。
彼女は自分の才能を、全く鼻にかけない。私とは正反対で、常に前向きだ。

羨ましくて、眩しくて、

眩しくて苦しかった。

何で、こんな人が居るんだろう。

そんなことを考える時もあった。

なのに

あの日、私たちの秩序は崩れ去った。

レイが、片目を失ったあの日。

頭が真っ白になった。

私は彼女を恨めしく思っていたくせに。

あんなに悔しい思いをしたのは初めてだ。
彼女がもう、絵を描けないなんて。

自分すらわからなくなった。

私は彼女に、絵を描いてほしかったのか、そうじゃないのか。

モニターが、スフィックスを映していた。

視界は正直だ。

嫉妬心が悪いものだとは思わない。

私はそういう女だ。

誰も知らない。

キクマサだって。レイだって。

フォルテは、ちょっと気付いていたかもしれない。

表ではあっけらかんとしているくせに、あの人は本当は凄く賢い。

多少読めないところがあるし、割と客観的に人間を観察している。

でも、それも多分私しか気付いていない。

自分で言つのもあれだけど、みんなからの私のイメージって、きつと、

やさしくて、かわいくて、いつもにこやかなルナシー。

女の子らしくて、気が利いて、学年のマドンナ。

そう言ってくれるのは実にうれしいけれど、

なんて意味がなくて、つまらなくて、

なんてばかばかしいの。

誰にも、私の仮面は外せない。

外させやしない。

「…ルナ…大丈夫？」

いつの間にか、モニターの画像を見るために暗かった部屋が明るくなっていた。

隣のキクマサが小声で聞いてくる。

ルナシーは、何てことないように微笑んで頷いた。
そろそろ切り替えなくては。

突然、会議室の扉が開いた。

ネイリー先生だ。

「推薦ヴィライアーが決まりましたわ……」

彼女は確かにそう言って、エリーゼ先生に目配りをした。

エリーゼ先生は軽く頷くと、

「いったん会議を止めましょう。今年の推薦ヴィライアーが決まったようです……」

キクマサとルナシーは目を合わせた。

そう言えば、そんなものがあつたな、と。

自分達は二年生だから、これを目指していたのに、いつの間にか忘

れていた。

一瞬部屋中がザワザワしたかと思ったら、みんなの視線が扉に集中した。

ネイリー先生は、扉から少し離れて、

「大丈夫ですか…？」

その“誰か”を呼んでいた。

キクマサとルナシーは、それが誰だかわかると、

驚きと、興奮と、押し寄せる胸の鼓動に声が出なかった。
どうしたって、声が出なかった。

扉の元には、フォルテがレイを支えながらやってきた。

レイは片目に眼帯を巻いて、いつもの彼女のように凜と立っている。

ルナシーは、口を手で覆った。

小刻みに震えながら、目を見開いて、彼女を見ていた。

その瞳から、ゆっくりと涙がこぼれた。

「……ルナ……」

キクマサは、ルナシーを見て、レイとフォルテを見て、そして再びルナシーを見た。

ルナシーは、立ち上がってレイに駆け寄った。

幻でも見ているのかと思った。

レイが居る。

考えすぎて、きつと夢でも見てるんだわ。

「推薦ヴィライアーは、二年生の、フォルテ・ゴッドバルトと、レイデル・リローズです。」

ネイリー先生は、確かにそう言うと、そつとルナシーの方を見た。彼女もまた、ネイリー先生と目を合わせた。

信じられないという、ルナシーに向かって、先生はやさしく微笑んで頷く。

胸が苦しい。

信じられなくて、うれしいなんてものじゃない。

先ほどまでの葛藤に、この瞬間答えを出した。

レイは、きっとこの世界の歴史に残る。

神様は、彼女に障害を与え、そしてきつと、

それすら乗り越えた伝説を与えるのだろう。

そして、レイは私にも必要だったのだ。

彼女が居たからこそ、今の私がルネ・ヴィライアーとして存在するのであり、

キクマサが同じように、ここに居るのであり、

そして、フォルテが居たからこそ、レイがここに居るのだ。

誰一人、欠けずに、必要な存在だったのだ。

私はレイに駆け寄った。
何も考えてはいなかった。

あなたが再び、絵を描くために筆を取る。

私はそれを、望んでいたのだろうか。

「ルナ……！！！！」

レイは、おぼつかない足取りで、駆け寄るルナシーを受け止めた。
ルナシーは、しっかりとレイを抱きしめると、

「お帰り…レイ…」

涙声でそう言った。

レイは、片目を潤ませながら、

「わ…私ね…絵を諦められないの…」

「ええ…、そうに決まってるわ…」

ルナシーは、レイの顔をしっかりと見た。
その眼帯を。

「こんな所で終わる、あなたじゃないもの」

今にわかるだろう。

彼女が帰ってくるか来ないかで、私たち四人の運命が、きっと変わってしまったであろうことを。

キクマサはさりげなくフォルテを見た。

フォルテは、キクマサの視線に気がつくと、

『説得するの、けっこう大変だったんだぜ』

と言わんばかりに、肩をすくめた。

静まり返った、他のヴィライアーをよそに、

これだけは、この四人にしかわからないドラマだった。

I
d
r
a
w

***drawコラム　　＼絵画科ルネ・ヴィライアー＼**

＼絵画科ルネ・ヴィライアー＼

ルネ・ヴィルトン美術学校の中で最も多いヴィライアー数である。称号は全て宝石から成り立っていて、どういう基準で割り当てられるのかは、いろいろな説が立てられているものの、はっきりとはわかっていない。今の所、最も活躍しているのは四年生組である。基本的に、天才肌の変わり者が多い。

<五年生>

- *ハク・リュオン…「ルネ・テクタイト」/団長
- *メルベリー・セレネーム…「ルネ・パール」/副団長
- *ティアン・レーゼス…「ルネ・ターコイズ」
- *レッドリー・ヘッドバーン…「ルネ・ルビー」/男子寮長
- *サイオンジ・ナギ…「ルネ・ダイヤモンド」

<四年生>

- *シャンデリー・リオール…「ルネ・ガーネット」
- *シルフィード・ケイド…「ルネ・カーネリアン」
- *フレイ・レステヴァン…「ルネ・エメラルド」
- *スノーフリーク・ロズベルト…「ルネ・オパール」
- *シャルロ・グレイディア…「ルネ・アンバー」

<三年生>

*カイ・ヴオストン…「ルネ・ハウライト」/国際鑑定士
*ジェイル・クォーシャン…「ルネ・サファリア」

<二年生>

*オノダ・キクマサ…「ルネ・アメジスト」↑主人公
*ルナシー・ミディエム…「ルネ・トパーズ」↑ヒロイン
*フォルテ・ゴッドバルト…「ルネ・クリスタル」
*レイデル・リローズ…「ルネ・ペトリファイウッド」

<一年生>

*ヘルクロウ・ラヴィーニ…「ルネ・アクアマリン」
*クレハ・ドルフォード…「ルネ・コーラル」

/以上18名

主任ノエリーゼ・オーデール(36)
副任ノリス・ラヴィーニ(24)

次回のセミナーは<二年生>です。

I
d
r
a
w

18：エジプトプラン1〜暗雲〜

世界遺産と呼ばれるものがある
なぜ、それが生まれたのか

人間が、やっとその重要性に気付いたからだ

根本的な、この地球にとっての

エジプトプラン

「ねえ…何だか今年、いやに研修早いと思わない？　去年ってこんなにすぐあったかしら」

「…そういえばそうだなあ…」

廊下がザワザワしている。

四年生のルネ・ヴィライアーが、その威光を放ちながら闊歩しているからだ。

彼らほど、カリスマ性に富んだ学年はない。

「考えすぎなんじゃねえの。たまたまだろ…深読みし過ぎなんだよ、シャル口様は」

その中の一人、フレイ・レステヴァン（エメラルド）は、気怠そうにあくびをした。

彼は、アッシュブラウンの髪の、多少チャラつとした風貌の男だ。

シャル口は彼を冷ややかに睨んだ。

フレイのあくびにつられたのか、スノーまでもが眠そうだ。

「……でも…シャル口の深読みって、基本外れないけどね」

「スノー、たまには俺の味方もしろよ。ルームメイトだろうが」

フレイは、隣のスノーを、期待度の低そうな、諦めかかった目で見
る。

スノーは気にも留めずに、もう一度あくびをした。

「まあまあ、喧嘩なんかしないで…。みんな見てるよ」

リオは、火花の散りかねないこの場をおさめようと、必死だった。
それでもなくても目立つのだから。

「……………」

でも、実際問題、一番目立つのはリオだった。

彼は、ルネ・ヴィルトンきつての美男子だったから。

しかし今更、この学校の女子たちは、彼をどうすることもできな
かった。

「……………」ところで、シーダがどこに居るか、シャルロ、君知らない？」

「……………」先生の所よ」

彼にはすでに、彼女のためなら地獄にだって行ける、と豪語できる
くらい大切な人が居た。

同じく、四年生のヴィライアー、シルフィード・ケイド（カーネリ
アン）だ。

今彼女は、先生に呼び出されていていないけど。

リオは「そうか…」と、微かに微笑んだ。

金髪碧眼の、まさしく王子様。性格も非のつけようがないくらい完璧、と言われている。

でも、彼が最も輝いて見えるのは、シーダのことを見ているとき。シーダのことを話しているときだった。

それは、彼を慕う女性から見れば、複雑なことだろうけれど。

しかし、四年生ヴィライアーにとってこの二人のバカップルぶりは、いつものことであつた。

「よくあんなうるせえ母親みたいな女と、長続きするよな」

フレイの嫌味もいつものことだった。

シーダは、ツヤツヤの髪を二つに結って、背筋を伸ばして、エリゼ先生の元を訪れていた。

「入ります、先生……」

彼女は、扉をノックして、先生からの返事を待つて、それから部屋に入る。

「呼び出したりしてすいませんでしたね…、ルネ・カーネリアン…」
エリーゼ先生は、机の上に山積みになった資料を横にずらすと、眼鏡を押し上げた。

「いえ…なんかいけない事したかなって、ヒヤツとしましたが」

「あら…あなたのようなしっかりした生徒は、他に居ませんよ…。
このルネ・ヴィライアーに、あなたのような人が居て安心している
所なのですから」

「はあ…問題児ばかりですからね…」

シードは、四年生全員の顔を思い出して、大きくため息をついた。
私がすっかりなくてはって、普通の人なら思う。

「本題に入りますが、あさつてのエジプト研修についてです…。
現在、エジプト流行している感染症はあるでしょうか。今だけでなく、過去にはやった病や、気をつけた方がいい事…」

「それは…たくさんありますよ。水にも気をつけないといけませんし…。砂漠に行くのならサソリにも気をつけないと…。というか、行きませんよね。そんな所」

シードは、おそろおそろ聞いてみた。しかしエリーゼ先生は、心配になるくらい涼しい顔だ。

「それはわかりません。この研修…なにが起こってもおかしくないですよ。状況によっては、医者もガイドも呼ぶ事ができなくなる事

もあるでしょう。この私にも、エジプト研修がどうなるのか、予想もつかないのですよ」

「それは、一体全体どういう事ですか。そんな事…、今まで一回もなかったじゃないですか」

シーダは、先生の言葉に、理解が示せなかった。いったいどういう事だ。

「ここでその答えを言う事はできません。言ってしまうば、答えを想像する事もできない」

「答え…？ 想像…？？ 何の話ですか」

わからない事ばかり言うものだ。
シーダは眉根を潜めた。

しかしエリーゼ先生は、平然とした顔で、

「この研修は、今までのものとは大きく違います。とある人物から、依頼されて行くものだからです。ただ、事が起こったとき、最悪な事態は避けなければいけません。だから、あなたにだけ少しお話をしました」

「……………」

シーダは、とにかく、先生が何を悟らせたいのか、必死につきもつとしていた。

「…納得は行きませんが、わかりました。…何がおこるのかは教え

られないけど、あらゆるパターンを見越して、内密に対策しておけると言う事ですね」

シーダは、説明口調だ。

エリーゼ先生は、正解と言うようにほくそ笑んだ。

「やはりあなたは賢い。こればかりは、団長および副団長には任せられない。幼い頃から医療を学んできたあなたですから。そして今も……」

「先生……私の事は誰にも言わないでくださいね。特に、リオには……」

彼女は、少し視線を落として、自分の腕を握る力を強める。

知られたくない。

特にリオには。

「……ええ。わかっています。あなたがこの学校に居る理由を、私たちは理解しているつもりですよ」

先生は、机の上に再び資料を置きながら、彼女に語りかけた。

「……すみません先生。私……ルネ・ヴィライアーで居るの、おこがましいとは思っているんです。リオや……シャルロみたいに、才能がある訳でもないし、将来画家になる訳でもない……」

シーダは、窓から、ルネ・ヴィルトンの空を見た。

絵を描くのは好きだけど、これは私の生きるべき道ではない。

なのに、ヴィライアーでいる事の矛盾を、考えない事はない。誰もが、絵を描きたくて、ヴィライアーになりたいと思っっているのに。

「…なにも、芸術家だけが、ヴィライアーのとるべき道とは限りません。絵を学び、世界を知った人が、他の分野で斬新な発想を生み、歴史を作る事だって必要なのです…。それに、私たちは、実力の無い者をヴィライアーにしたりしません」

「…はい」

シードはゆっくり頷いた。

先生の言葉は、いつも力強い。口調は淡々としているのに、その内容が。

「わかりました。内々に引き受けましょう。……赤十字の名の下に」

私には、彼らを守る義務がある。

「ねえ…わかつてる？ 研修って遠足と違うんだよ」

ヘルは、さっきからリュックサックにチョコレートばかり詰め込んでいるクレハにいいよ突っ込んだ。

「…俺にとつちや大事なアイテムなんだよ。三時間に一回は食べないと、ヤバいんだって。俺、チョコラーだから」

「何だよ……チョコラーって」

ヘルは、相変わらずマイペースを貫くクレハに、頭を抱えた。

「懐中電灯いるかな。だって、ピラミッドとか見るんだろ。」

「あのねえ…俺たちが見るのって、観光客が見るのと同じようなものだよ。…発掘しに行くんじゃないんだから」

「えーそうなの！！？」

クレハは、非常に残念そうに、変な声を上げるとカクンとうなだれる。

それでもちやつかり、懐中電灯をリュックに詰めていたけど。ヘルは、育ちのいいおぼっちゃまらしく、着替えの衣類をカバンに詰めていた。

「なあヘル、エジプトって近いのか」

「何言ってるの。目と鼻の先じゃない」

「ドイツより近い？」

「……？ うん、そりゃあ…海を越えなきゃいけないけどね」

クレハは、下唇を出して、眉根を寄せた。非常に真似できない顔だ。

「あゝあ、何て顔だよ」

ヘルが突っ込むと、その顔をこちらに向けたから、たまらなく吹き出した。

「どう思います？ リュオン…今回の研修、今までと何か違いませんか…？」

メルベリーは、団長の腰掛ける向かい側から、お茶を持ってきた。不意打ちだったので、驚いた。

リュオンは、今回の研修のプランを、くまなくチェックしている所

だった。

一度咳払いをして、メルベリーの持ってきたオレンジペコーを一口飲むと、

「今回は、あらかじめ、指定された研修だ…。エリーゼ先生は何か隠しているな…」

無理矢理口調を落ち着かせて言った。

「大変な事にならなければいいのですが」

「…どうかな。ルネ・ヴィライアーの教員は容赦ないぜ。…多少の危険は何とかなると思ってる」

団長は、しらじらと答えた。実際、奴らは、ヴィライアーをあからさまに過保護に扱わない。

多少無茶しないと、つかめない事があると、知っているからだ。

メルベリーは、自らのティーカップの淵に手を添えると、揺れる飴色の水面を眺めた。

色素の薄い、プラチナブロンドのまつげが、頬に陰を落とす。

リュオンは、メルベリーを横目で見た。彼女が来ると、空気が澄む気がする。

今まで、色んな美人を見てきたけれど、ここまで儚げな、慎ましかな女性は、今の所彼女しか知らない。すこく気が利くし、献身的だし、文句のつけようの無い、完璧なお嬢さんだ。

さすがのリュオンも、彼女をむげに扱いはしなかった。

「…？　どうかしましたか？」

「いや……別に」

団長は視線を逸らすと、再びプランの紙を見た。

何かが起こる予感がしてならなかった。

エジプトの歴史は深く遠い。

いまだに暗い、混沌とした謎に包まれている。

これは、我々が初めて触れた、世界の真実の一つ。

物語を終わらせ、結末を創造する。
答えを想像する。

過去も、今も、未来も、本当は行ったり来たりして、歴史を作っているのかもしれない。

美術品とは、

いったい何のために作られたのか。

何が、始まりだったのか。

I
d
r
a
w

19：エジプトプラン² フライト

ヨーロッパの文明に、大きく影響した、エジプト美術。

ナイルの賜物。

我々は、失いかけた重要な遺産を、守るための、法を定めた。

「世界遺産の始まりって、エジプトなんだよ」

「……そうなの？」

キクマサは目を丸くさせた。

ここは、既に飛行機の中。我々は、ギリシアからエジプトまで、短い空の旅を満喫していた。

「エジプトに“アブシンベル大神殿”って言うのがあるんだけど、
…まあ、お前が知っているとは思っちゃいないさ。それが、世界遺産の始まりだ」

フォルテは、飛行機の中で、サービスで配られたレモネードを飲みながら、いつものように説明係になっていた。

「1960年、世界遺産誕生のきっかけになった、事件が起こる。
…アブシンベル大神殿っていうのは、もともとナイル川上流のヌビア地方ってところにあっただけけど…そこにダムを造ろうってってことになったわけよ」

フォルテは、持ってきていた、エジプトのガイドブックをキクマサによこした。

そこには、四体の巨大な像が守る神殿が載っていた。

「“アブシンベル大神殿”や、ヌビアの遺跡群は、貴重な文化財にも関わらず、水没の危機にさらされた。…でもな、ダムを造る事自体を責められやしない。エジプトに住む人たちにとっては、必要不可欠のものだったから…。ま、確かにそうだよ。裕福な国にすむ俺たちが、ダムを作るなっつたって、説得力無いよ。現地の人たちには生活がかかってんだから」

「……なるほど」

キクマサは大きく頷いた。

ダムを造るせいで遺産が沈むなんて言ったら、裕福な国のやつに限って、それは駄目だとかって反対するけれど、
ものの見方次第で、見える景色は違うのだ。

「実際、こういうのって、すっごく難しい話なんだけどね。確かに、遺産とかって、これからの時代に残さなきゃいけないんだから。“アブシンベル大神殿”は沈みかけたけど、救済キャンペーンでダム湖よりも高い丘の上に移設された。これがきつかけなんだ。世界中が注目して、見守った事で、各国の文化財はその国だけの問題じゃなくて、“人類共通の遺産”っていう認識が生まれた。これが、一番凄い事だよ」

「助かったのか…その神殿」

キクマサは、少し安心した。てつきり今は湖の中なのかと思った。フォル手は苦笑いする。

「まあね…かろうじてかな。ブロック状に切り取られて運ばれたから、元のままとはいかなかったけどね」

「うわ……超耳痛いんですけど…」

フレイはとても不機嫌そうな顔をしていた。

「あんだ… じっくりも駄目よねえ。飛行機」

シャルロは彼を見て、馬鹿にしたように笑う。
はなからフレイを助ける気はないようだ。

しかしシーダはほっとけないように、身を乗り出すと、

「いつも言ってるでしょう。耳抜きしなさい。ほら鼻つまむ!!」

容赦なくフレイの鼻をつまんだ。

「痛ってえ!!」

「鼻から息を出そうとして。耳がパチンって言ったら、成功よ」

フレイはもはや言われるがままに行動するしかなかった。

どうやら成功したようで、シーダは彼の鼻を離した。

フレイの隣で、スノーが無言で、その一部始終を観察していた。そしてどうしてもよくなったようで、寝返りを打つ。

「…母親と不良息子のようねえ」

シャルロは、呆れたように、足を組み直す。

シーダはやっと自分の席に正しく着いた。

「シーダは、困った人を放っておけないんだよ」

「あんたがそんな調子だから…、まあいいけど」

ニコニコしているリオにも、大概呆れるけれど。
スノーは、一人マイペースを保ち、アイマスクをつけて夢の中だった。

エジプトとギリシャは近く、歴史上深く関わり合った国だ。

青い海を越えると、見えてくる砂漠と、異国の空気。最初に降り立ったのは、首都カイロだった。
もちろんククマサにとっては初めての地で、体中で感じるエジプトの空気に、圧倒されたのは言うまでもない。

「え、いよいよエジプトに着いた訳だが……、おいその一年！
！ 俺の話を聞け！！ 次浮かれてたら、ピラミッドに閉じ込めるからな！！！！」

団長は移動バスの前方で、“研修のしおり”をメガホンのようにして、はしゃぐ一年をしかる。

ヘルは、ピラミッドに閉じ込めると言うフレーズにびくついたが、クレハはおかまいなしで、窓から見えるあらゆるエジプトを叫んで

いた。

いよいよ団長は、丸まったしおりで、スコーンと、勢いよくクレハの頭を叩いた。

「だ〜ま〜れ〜!! 小猿野郎〜!!!!」

「痛ったあ!! 何すんだよう団長!!」

「そりゃ、こっちの台詞だ。営業妨害で訴えるぞ」

団長の恐ろしい顔の前で、クレハは何事も無いかのようにきょとんとしていた。

どうやら、クレハには常識が通用しないらしい。

レッドはさわやかに笑うと、

「すごいねえ、リュオンと渡り合えるなんて。君大物になるよ」

前の座席を何度か叩いている。

団長は、眉根を寄せた状態で、困り果てたようにダンと足踏みする。バスの中でそんな事したら危ないけれど。

「いい加減な事言っな。そしていい加減、俺の話を聞いてくれ」

切実に聞こえて、キクマサは自分だけでもちゃんと聞いてあげようと思った。

個性豊かなメンバーをまとめるのだから、団長って言うのも楽じゃない。

カイロの中心部にある、大きな大きな、それは立派なホテルが、我々の、エジプト研修の拠点だった。

「何てこった。こんなホテル泊まった事なんか無いよ」

「……同じく」

キクマサとフォルテは部屋を開けたとたん、一度絶句して、よくよく見渡して唾を飲み込んだものだ。

ヴィライアーの男子を二手に分けて、大部屋に泊まるといった感じだった。

この下級生組は、キクマサ、フォルテ、ヘル、クレハ、そしてまだ見ぬ三年生のカイ・ヴォストンだった。

団長曰く、彼は今日の夜に到着するようで、

「それまでは、この幼稚園児どもの面倒はお前ら二年生が見ろよ」

ということだった。

「……カイ先輩かあ。いまだに実物と話した事無いなあ」

部屋で、やっとくつろいでいるところだった。大きなふかふかのソファにもたれかかりながら、夕食までは自由時間だと言っのだから、思う存分だらけていた。ヘルとクレハは部屋中を駆け巡り、大きな屋根付きベットのトランポリンにして遊んでいた。最近、ヘルまで元気な子だ。

「知ってるんだ……」

キクマサは、大きな液晶テレビをつけ、なんか面白い番組でもやってないかと、チャンネルをいじっている。

「知ってるもなにも、ちょー有名人だ。よく鑑定物の番組に出てるよ。あんな若いのに、国際鑑定士の資格持ってんだから」

フォルテの口調から、凄い事なんだろうとは思ったけど、いまいちピンとこなかった。

まず、鑑定士って何。

と、そのときだ。

たまたまつけたテレビのチャンネルに、一人の青年が映った。

凄くイケメンと言う訳ではないが、まじめそうで、なかなか体格の良い、好青年と言った所だ。

黒い短髪と、テレビ慣れした笑顔。

“そのおいしさ、まさに世界レヴェル”

青年は、ペットボトルの飲料を、勢いよく飲んで、何だかとてもすっきりした顔をした。

そして、その飲料を前に突き出して、

決め台詞。

「こいつは憎いですね」

“先生も認める、この一本”

スーパードリンク

「ループル美術館の旅、当たります」

「……………」

「……………」

テレビの光と、何も知らない一年生の無邪気な声だけが、その空間の全てだった。

「……………見た？」

「……………うん。まさか、あれがカイ先輩？」

フォルテは、小刻みに頷くと、あごに手を持って行って、深く唸った。

先ほどの驚きが、今更興奮に変わったようだ。

「凄いな、カイ先輩。これで5本目のCMだよ。先輩の決め台詞は、流行語大賞にノミネートされたんだから」

「……………」

先ほどの説明ではわからなかった彼の凄さが、身にしみるほど理解できた瞬間だった。

I
d
r
a
w

20：エジプトプラン〜お疲れの鑑定王子〜

夢を見た

長らく封印していた、世界の真実に辿り着く日の事を

錆び付いた鍵が今にきつと、扉を開ける

その日夜になつて、本人に会うまでに、いったい何度カイのCMを見たか。

彼はちょうど夕食後の、会議時にやってきた。

「すみません！！ 長らくお待たせしました！！」

「やっつと来たか、この野郎！！！！ お前がここに来るまでに、お

前の新作CM何回見たと思っただよ!!! さつさと座れ、アホ!!!」

団長は、浴びせるように暴言を吐く。カイはのけぞって、その衝動に耐えていた。

彼は今まさにやって来たばかりという格好で、大きな旅行トランクを持っていた。

そのトランクを会議室の隅に置くと、そそくさとなが机に付く。大きくため息をつき、ひどくお疲れのようだ。

「喜べ。やっと、我々絵画科の研修着が、デザインチェンジされた。去年までの研修着を作っていた、ファッションデザイン科のメンツが、とうとう卒業して行ったからだ。今年のは、去年までの芋ジャ―とは違うぜ」

団長は、前の机に、段ボール箱を置いた。

「各自、サイズにあったものを持って行くように」

先輩たちはザワザワしている。

去年のものがいったいどういう風に酷いのか気になる所ではあるが、今年のは凄く良い物であった。

「格好いいね。確かに制服より動きやすいな」

黒い上着には、沢山のポケットと、胸には銀の細長い板に、“R・

V・O”と彫られていた。（ルネ・ヴィライアー of オイルの略）腰にはベルトが付いていて、ポーチを取り外し出来るなど、何かと便利そうだ。

ただ、こんな立派な研修着が要るほどの何かをするのだろうか。探検でもするって言うのか。

ちゃんと揃えられたブーツと、ヘルメットみたいな帽子が、かなり気懸かりだった。

「要するに、その服は“体操服”みたいなものだ。まあ、制服で行く研修もあれば、研修着でないとマズい研修があるわけよ…。それは事前に団長が指示してくれるだろ」

リース先生が、段ボールの箱を整理しながら、我々の不安そうな顔に気付いたのだろう。

さりげなく話しかけてきてくれた。

「お前ら幸せだぜ。去年までの研修着は酷いもんだった。あれは趣味の悪いジャージに等しいぜ」

「何で、そんな研修着だったんですか？ 仮にもルネ・ヴィルトン

のファッションデザイン科が作ったんでしょ？」

フォルテは、首を傾げた。

リース先生は、何だか嫌な事を思い出したような顔を見ると、「あー」と曖昧に説明しだす。

「四年前のファッションの団長が、当時の絵画科の団長とすっげー仲悪かったんだよ。あげくあんな研修着作られて、嫌がらせされたって訳。俺もそのとき四年生だったからな。紛れもなく被害者だよ」

先生は苦笑いした。

部屋に戻ると、噂のカイ先輩が重たそうなトランクを引きながら、ふらふらしていた。
だいぶお疲れだった。それはそうだ、この歳であんなに働いてるんだから。

しかし、彼は二人を見つけると、

「お、ちょうど良かった。君たち二年生？」

パツと表情を変えて、その場にトランクを捨て置いた。
キクマサとフォルテは、はいと頷くと、

「初めまして先輩。俺、二年生のフォルテ・ゴッドバルトって言います」

「…オノダ・キクマサです」

ペコリと頭を下げた。

カイも釣られて頭を下げると、

「あ、ご親切に。カイ・ヴォストンです。三年生です」

「知ってます！！　だって先輩は有名人ですから。さっきもCM見ました」

フォルテは何だが、有名人を前に多少テンションが高い。

カイは苦笑いで、

「え…スーパー・コークの？　参ったな…また団長にドヤされる。
…CMは鑑定協会の陰謀ってやつだよ。俺を利用して、鑑定ブームを巻き起こしたいらしい。馬鹿だよ全く」

照れ隠しなのか、本気なのか、謙遜気味だ。

「でも、カイ先輩の活躍で、鑑定物の番組増えましたよね。確かに」

「はは…いつまで続くかな。ブームって言つのは去るものだから」

彼は、すごく感じのいい人だと思った。

背が高くて、バスケット選手みたいな体格だ。鑑定士ですって言われても、初お目見えの人はなかなか信じられないだろう。髪も短髪で、どうみてもスポーツ選手だ。

でも、そんな彼が、誠実そうな態度で、虫眼鏡片手に鑑定していると言うギャップが、世間の方々にはたまらないのだ。

キクマサはカイを観察するように見ていたが、その視線に気づいたカイもキクマサの方を向く。

「で、君が噂のカトレアさんの弟子か」

「……カトレアさんを知ってるんですか？」

キクマサは、思いもよらない名前が出てきた事に驚いた。

カイは歯を見せて笑う。

「うん。あの人が俺を、鑑定の世界に導いてくれたんだ。もう、遠い昔の事だけだね。カトレアさんは元気かい？」

「……どうでしょう。急に居なくなりましたから。あの人の事だから元気だとは思いますが」

あの人が、今どこで、何をしているかなんて、想像もつかない。だって、想像がつく事を、超えて行く人だから。

心配じゃない訳じゃないけど、元気でないはずもない。殺したって死なない人だ。あの人こそまさしく。

カイも、息を吐くように頷いた。

古代エジプト文明は、紀元前4000年にさかのぼると言う。

ナイル川を源とし、繁栄して行つた王朝。

ピラミッドやスフィンクスなど、謎の多い遺産を数多く残しているのがこの国だ。

「……どういう事ですか？ エリーゼ先生。」

「ですから、そのしおりに書いてあるスケジュールは全て中止です」

リュオンは、口をぱくぱくさせながら、何と言いつ返せば良いのか分からなくなっていた。

緻密に練った計画を捨てて、いったい何をすると言うのか。

エリーゼ先生は、表情を一向に変えなかった。

リース先生もしらばつくれている。

メルベリーも驚いて、口元に手を添えて、瞬きをした。

「エジプトのカイロまでやってきて、“ギザの三大ピラミッド”も、“アブシンベル大神殿”も見ないで、いったいどうするんですか！俺たちの納得する答えがありますか！？」

「落ち着きなさい、ルネ・テクタイト。エジプト自体、毎年必ず向かう研修国です。ギザのピラミッドはいつだって見学できるでしょう。……しかし、あなたたち……まだ行った事のない所があるでしょう」

エリーゼ先生は、リュオンを諭す。

エジプトにおいて、ピラミッドにも勝るとも劣らない、世界の歴史を刻む場所。

リュオンは、何かにピンときたようで、まさかと頬に一筋の動揺が流れた。

「……そんな……まさか“王家の谷”ですか……？」

その言葉に、メルベリーは声も上げずに驚いた。

エリーゼ先生は瞳を細め、ゆっくり頷く。

「その通り。我々が明日向かうのは、エジプトのファラオの眠る、

“王家の谷”……。それも、最近秘密裏に発見され、世間も知らない発掘途中の謎だらけの間……」

「そんな……いくらルネ・ヴィルトンでも、発掘権のない我々がそんな所へ行くなんて……可能なんですか？」

リュオンは相変わらず眉根を潜めていたが、いい加減落ち着こうと

していた。

エリーゼ先生に限って、いい加減な事を言う訳がないと理解していたし、今までだって突拍子のないプランを達成したこともあるのだから。

「……可能です。依頼主がいるのですよ、この研修には……」

「……………」

先生は、これ以上の質問を受け付けるつもりはなかったし、リュオンもまた、これ以上は聞かなかった。
聞いた所で無駄なのだ。

“王家の谷”で我々がする事など、本当は誰にも分からない事なのだろうから。

説明された所で、ちっぼけな我々ごときが、理解出来る訳がないから。

その場に行って、リアルタイムで感じるしか無い。

l
d
r
a
w

21：エジプトプラン4、王家の谷

学校で習う歴史って、どうしてもあんなに無機質なんだろう

遺産や文献から分かる、歴史の欠片を繋いで、結んで、それでも、唯一分からないのは、名を残す偉人たちの心の内である

出来事や、結果は分かっているても

どうしてそうなったのか

何を思っただけそうだったのか

どうしても分からない事だから

ふと、キクマサは目を覚ました。

カーテンの隙間から、チラチラと見える空はまだ薄暗く、ぼんやりした頭では、今が何時なのか考えようとしなかった。ただ、うつらうつらした頭の片隅で、先ほどまで見ていた夢のヴィジョンが繰り返されていた。

暗示的な、象徴的な、“鍵”が、水の底に沈んで行くヴィジョン。

誰かがそれを、必死に掴もうとしていたのに、決して、捕える事ができずに、暗い水底に消えていった。

「……何だっただろう」

凄く喉が渴いた。

部屋の男子は、まだ寝ている。

決して起こさないように、とにかく外の風に当たりたくて、

バルコニーに出た。

「……………」

驚いた。

そこから見える景色の、何と不思議な様。
薄くたなびく白い空に、朝の日の光。

エジプトの、ここはきっと中心地。

高層の建物も、歴史的な建物も入り交じって、その隙間から見える物。

「…すつげ、ピラミッドじゃん……」

異次元のように、不釣り合いなのに、向こう側には世界的に有名な遺産がそびえ立っていた。

ビルの隙間から見える、その出で立ちが、

何だか切なくて、心にしみる。

古の時代には、こんな不自然な切なさは味わえないのだから。

その日、ルネ・ヴィライアーが向かったのは、有名なギザの三大ピラミッドでも、世界遺産の原点、アブシンベル大神殿でもなかった。

「な、何だつて！？ 王家の谷！！？」

フォルテの驚きようと、顔の輝きから、その場所の凄さは容易に想像できた。

ヴィライアー達がザワザワしている。

「そうだ。しかも、俺たちが向かうのは、最近見つかった墓だ。とある複雑な理由から、その墓の存在は世界に公表されていない」

団長は、落ち着いた口調だったが、内心その研修に疑問があつたのは確かだ。

フォルテは、その言葉に何を感じたのか、少し顔を潜めた。

「あの……その墓から何か見つかったりしたんですか……？」

「……いや、その墓は、墓と言うよりも、とある墓の延長と言った方がいい。王家の谷の墓は、発掘が始まった頃には、盗賊に荒らされていてほぼ壊滅状態だった。それでもなお、ほとんど手つかずで見つかったファラオの墓」

古代エジプトの謎の中でも、最も秘密めいた、しかし最も注目されているファラオ。

「……まさか…ツタンカーメン……！？」

フォルテは瞳を見開いていた。
彼の頭の中には、様々な情報と、歴史のつながりのような糸が、し
ゆるしゆると動き始めている。

団長は、フォルテの方を向くと、眉を動かした。

「気になるか、ゴッドバルト。お前の親父さんは有名な考古学者だ
もんな。だったら、これがどういう意味か分かるだろ。ツタンカー
メンの墓は、手つかずで発見されたにも関わらず、その時代や、こ
のファラオに関する情報はいっさい出てこなかった。しかもツタン
カーメンの名は、他の遺跡からもことごとく消されている。……な
ぜだ？」

団長は、ひっそりと静まり返っているメンバーに、その疑問を投げ
かける。

「しかし、先日発見された墓には、その名がしっかりと刻まれてい
たらしい。しかし、公表できないのには理由がある。その間には、
重い扉にも見える、巨大な壁画と……」

「“鍵”だけが、見つかったんだ……」

キクマサには、いかにそれが世紀の大発見なのか分からなかったが、ただ気になったのは、“鍵”という物のフレーズ。夢に出てきた、あの鍵は、ただの偶然だろうか。

“王家の谷”に向かうバスの中で、キクマサはその事について、少しだけ考えていた。

だって、町の隙間から見える、ピラミッドと砂漠を無視してなお、我々は、それを見に行くのだから。

フォルテは、さっきからずっと険しい顔をしていた。

キクマサは、彼がこの手の話にやけに詳しいなと思っていたけれど、有名な考古学者の父がいる事は、今日初めて知った。

「なあ…フォルテ。これって凄い事なのか？」

キクマサは、切り出した。

フォルテは、キクマサに話しかけられて、少しハツとしたようだが、軽く頷くと真面目な顔で。

「…うん。…と言うより分かんないや。ツタンカーメンの情報って、本当に少なくてね。ほとんどが考古学者達の見解と言うか、想像っていうかね。……ツタンカーメンの時代が荒れていたのか、この頃

の王の名前って、あらゆる遺跡から消されているから、何かあるんだろうけど……」

フォルテはそこで、言葉を止めた。

それ以上をキクマサに言うことは無かった。

彼には、少しだけ分かっていたのだ。

考古学、歴史の合間合間に存在する、“鍵”の存在を。
隠された真実の、神懸かり的な力を。

呪いのな、その重要性。

知ってはいけないのに、知らなければ、前に進めない矛盾した歴史。

それに手を出したら、

何を失い、何を手に入れるのか。

果たして、その真実を、僕らに受け止められるのか。

それすら、イメージできないと言っのに。

I
d
r
a
w

22：エジプトプラン⁵、記憶の間

記憶の間と呼ばれた部屋

扉と鍵を守っていたその部屋を作った者は誰？

なぜか時刻を示すオレンジの空の頃、彼らは王家の谷についた。
沢山の発掘跡や番号、印の書かれた、いかにもまだ発掘中の墓であると言っその景色。数人がまだ作業中であつたが、既に物静かだ。

「こちらが案内人のセティさんになります。彼は昔からこの王家の

谷の墓守をしている方であり、研究者でもあります」

エリーゼ先生が現地の案内人、セティさんを紹介する。エジプト人らしい白い服に、浅黒い濃い顔、髭の長い顎。彼はとてもにっこりと笑って、挨拶をする。

「では、まいりましょう……ルネ・ヴィライアーの皆さん。ツタンカーメンの呪いにお気をつけて……この墓を発見した者は、“偶然”にも20人が相次いで死んでしまったと言いますから……」

「……………」

行く前にその話はないだろうと思ったが、ルネ・ヴィライアーは気まずそうにお互い目を合わせたりしている。

セティさんは「冗談ですよ」と言って、ほっほと笑っているが、なんて冗談に聞こえない冗談な事か。

彼が案内するのに導かれ、そわそわするヴィライアーは列を作って指定された墓に入る。

暗く、作りたての穴の中。どうしようもなくひやっとするような、土の色の闇の中に。

流されるままに歩いているキクマサであるが、フォルテは少々怪訝そうである。いつもの彼と違って、やたらと真面目で精悍な顔つきだ。頼りがいがありそうに見えるはずが、いつもとの違いに多少心

配になる。考古学者の親父さんがいるせいか、フォルテはその手の話に詳しく通じている。

だからこそ、思う事もあるのだろう。

「……ねえ、キク……大丈夫かしら……」

隣からルナシーの声が聞こえた。

先頭のセティさんが持つ光源の、ぼんやりとした灯が心もとないくらいに、周りがわずかに見える。

ルナシーはいつの間にかキクの隣にいて、何だか神妙に、こわごとと周りを見ている。

そりゃあ、そうだ。墓の中なんて怖いし、しかもツタンカーメンの縁の地であるからこそ、リアルに体がヒンヤリとする。

「……怖い？」

「少しね……でも、前を歩く先輩達は何て事無さそうにしているわ……研修に慣れているのね……」

「フォルテも平気そうだよ。自分の世界に浸っちゃって、全く話さないんだ。珍しいだろ？」

洞窟のようになった長い通路を歩くヴィライアーの反応は、様々であった。

一年生のヘルは、特にこういうものが苦手な小心者であるため、ガタガタして足が進まないようである。

クレハは「すっげーすっげー」と、相反した反応を見せ、動けないヘルを引つ張る。この二人は本当によく気が合うなと思う、そのくらい正反対だ。

四、五年生は流石に研修慣れしているので、怖さ半分、期待半分と言つように、少々余裕のある足取りである。

「……呪われちゃったら、どうしよっかな」

「あんたは呪いが逃げるわよ」

五年生のナギとレッドは、相変わらず二人で笑っているし、四年生は五人仲良く固まって、普通に道を歩くようにスタスタとスムーズだ。

後ろでクレハが「ギャハハ」と笑えば、前から「ウルセーぞ一年！！」と怒鳴り声が飛ぶ。

その間に挟まれた二年生は最も普通の人のように、いちいち衝撃にビビったりしている。

そうこうしているうちに、どうやら目的のポイントについたようだ。セティさんは皆を振り返り、真面目そうな表情で居る。

「ここに注目してください」

彼が指差した所には、古くに掘られた壁画と、小さな暗い穴が見える。気がする。

「この壁画と鍵穴が発見され、私は古くから墓守の間に伝えられる

話を思い出しました。黒い歴史は、鍵をかけ封じられている。真実を知る事が出来るのは、その扉を開け、中に入った者だと……」

彼はフツと光源を消した。瞬間的に暗くなる墓の中、誰もがきつと恐怖を感じた。

「これから、何があっても驚かず、冷静に勇敢に、物事の真を見極めてください。あなた達ならば、きっと上手くいくでしょう」

セティさんの声だけが聞こえると思ったら、ボウと浮かび上がるように光る、鍵穴の存在を見た。

誰もが息を飲み、次に起こる事を待っている。予想すら出来ないけれど。

セティさんは鍵を懐から取り出した。

ほとんど見えなかったが、どこか古いような鍵だと思う。

彼はそれを光る鍵穴に刺し、一度ゆっくりと回した。

カチッ……

その音は、鍵を開ける音だったのか。

それとも、歴史の大時計の針が一つ、動く音だったのか。

まばゆい光と旋風が、開かれ出した扉の間から溢れ流れてくる。
ヴィライアー達はその場からどうする事も出来ずに、ただ目映い光に目をつむり、激しい衝撃に翻弄されている。

流れに身を任せるように、彼らは光の中へ、

歴史の扉の中へ吸い込まれていった。

静寂と暗闇の中、セティさんが再び光源を灯した。
しかし、そのときこの場にいたのは、エリーゼ先生とリース先生だけであった。

先ほどまでいたはずのヴィライアーは、跡形も見受けられない。

「…………おつどろいた……話に聞いていたとは言え、現実にも目の前で起こると、もう目を疑いますよ」

「リース先生……この事は他言無用ですよ」

「分かってますって、エリーゼ先生」

先生二人は、この状況を見越していたらしい。

エリーゼにいたっては、この研修の真意すら心に留めている。

セティは長いひげをなで、目の前に再び閉じられた扉を見上げた。

約半年前に発見されたこの扉。

それまで、誰も見つける事が出来なかったと言うのに、ある日突然、前触れも無く発見された。

扉を開く時期を、神様がそろそろだとおっしゃったのだろうか。

「……………どうか、悲しい歴史に捕われたファラオをお救いください……………」

セティはゆつくりと壁画に手を当て、再び開くはずの無いそれを悲しそうに見ていた。

既に鍵穴は無く、先ほどの事が嘘のようである。

ツタンカーメンの歴史は、誰もが興味深くしていながら最も謎が多い。

彼の名は、あらゆる墓から削り取られている。

歴史に真実を求めるならば、可能性はいくらでもあるし、もしかしたら真実なんて無いのかもしれない。

それでも、哀れな魂を太陽神の元へ導いてくださるのなら。

セティは、既に役目を終えた鍵を握っていた。

古い、錆び付いた鍵であつたが、いつになく冷たく重かった。

l
d
r
a
w

23：エジプトプラン〜ヒエログリフ〜

過去の全ての物事は、

良くも悪くも、全て、人類の遺産でありますように

ルナシーは目を覚ました。

日差しがじりじり暑くて、とても息苦しかったからだ。

ゆらゆらと、単発的に途切れる視界の中で、夢か現実か分からない世界を見た気がした。

「……………ここは…」

ここは、一体どこなのだろう。
彼女はゆっくり立ち上がった。

柔らかい草の絨毯に、南国にあるような木々。清らかな、そして小さな湖。

ルナシーはその湖の袂で膝をつく、理解できない状況と向き合おうとしていた。

私はさつきまで、ルネ・ヴィライアーのみんなと一緒に、王家の谷の一つの遺跡に居た。

セティさんは、何も言わなかったけど、きつとあの場所こそが、“記憶の間”であつたに違いない。

とても、不思議な感覚だつた。

日没の時間を憂うように、たった一欠片の光が、あの空間を生み出していた。

一瞬、煌煌と輝く光の中に、浮かび上がった、古代の石盤。

その鍵穴。

不思議な感覚だつた。

私は、たった一瞬の、その石盤と鍵穴を、懐かしくさえ思ったから。

古代のノスタルジーに、耐えられなかったと言つのか。

ルナシーは、淡々とそんな事を考えていた。
ここはどこだろう、と考える前に。

ルナシーは、自分の映る水面に、視線を落としたまま、周囲の空気を
感じ取った。
その時だった。

「ルナ！！」

水面に、誰かが映った。

私の背後に、彼が現れたのだ。

「無事でよかった！」

「……フォルテ！！」

「話は後だ。俺たちが落ちたのは古代エジプト。鍵は封印していた
歴史を開いたんだ」

フォルテは何だか焦ったように、急いでルナシーを立ち上げさせた。
彼の、言っている事は意味不明だった。

「何を言っているの、フォルテ」

「今は、説明してる場合じゃないよ。このオアシスの中に、盗賊が
いる。分かるかい」

フォルテは彼女を誘導して、草むらに隠れた。すると、反対側の草
むらから、大柄の男が出てきた。

色黒でガタガタの歯並び、彫りの深い顔。

手には、先の曲がった剣を持っている。

ルナシーは息をひそめた。危うく声をあげてしまいそうになる。大男はぎよるぎよるあたりを見渡すと、再び元の場所へ帰っていった。

一時ルナシーとフォルテは物音立てずに、気配を隠していたが、フォルテが長く息を吐いて、

「もう良いんじゃないかな、ルナ」

小さくなっていた彼女の背をポンと叩いた。

ルナシーは、眉根をひそめてフォルテを見上げる。

「あれは何？ いったい私たちはどうしてしまったの？」

「落ち着いて、ルナ。気持ちには分かるけど」

フォルテは、もう一度周りを確かめた。盗賊の気配は、この辺りにはなかった。

「……ここはきっと、古代のエジプトだよ。俺たちは過去に落とされた」

「どうしてそうだと分かるの？」

「……それが、“鍵”の役目だから。……父さんの言った事は、本当だったんだ」

フォルテは立ち上がると、青い空を見上げた。エジプトの空は、青い。

感じた事のない時代の空気をこの身で感じる事に、どうしようもな

い喜びと、とりとめもない不安を感じる。

伝説は、本当だったんだ。

歴史は巻き戻る。

ルナシーは、分からないままだった。

きっと、フォルテにしか分からない事なのだろう。

「……ここが古代のエジプトだと言うなら、私たちはどうすれば良いの？ みんなは……」

ルナシーは自分の言葉にハツとした。みんなはいったいどうしたのだろうか。

私たちと同じようにこの時代に落とされたと言うのなら。

フォルテも、複雑そうにしている。

「……みんながこの時代に落とされた可能性は大きいよ。全員かどうかは分からないけれど……。とにかくもとの時代に戻らなくちゃ……」

彼は冷静だった。いつものような、おちゃらけた彼ではなく、思慮深い。

「……戻れるの？」

「……戻れるさ。……この物語を正しい結末に導く事が出来たらね」

簡単そうに言った、彼の顔は、暗く複雑である。

ルナシーは、そう言う所にすぐに気がつくから。

「盗賊に見つかったら終わりだ」

フォルテは声を潜めた。

草の間をすり抜けるのに、ちょっとした音でも立てようものならヒヤッとする。

「特に君は女の子なんだから」

フォルテは神経過敏になりながら、あたりをきよろきよろしている。

「あら、どうして。女の子だから助かる事もあるわよ」

「君は、もう少し自分の事を理解した方が良いね」

ルナシーは、くすくす笑っていた。

フォルテが何を言わんとしているのかはわかっていたが、あえてそう反応していたのだ。

「……君は美人なんだから」

「私には何て事なくそんな事が言えるのねえ、フォルテ。：レイにもそう言えたら良いのにね」

フォルテは一度固まって、複雑そうな顔でゆっくり振り向いた。

淡い、オーレオリンの髪が、葉っぱを横切る。

「君の言っている事は、意味不明だ」

ルナシーは意地悪そうに笑うと、ここぞと言つてのける。

「あら、まるでいつものあなたじゃないみたいよ。いつからそんなに賢そうになったの」

「からかわないでくれ、ルナシー。こんな非常事態に」

彼は、本気でピリピリしていた。
今の彼に冗談は通じないらしい。

ルナシーは、ため息をついた後、とても冷ややかな瞳で彼の背中を見つめた。

何て、読めない人。

感情を露わにしていそうで、冷静で分からない。

レイやキクを心配していないはずなのに。

その時だった。ふいにフォルテが止まったから、ルナシーは彼の背中にぶつかりそうになった。

「どうしたの？」

ルナシーの質問に答えもしないで、彼は目の前の崖に駆け寄る。

近くで水の音がするから、小川があるのかもしれないけど、この岩場の切り立った崖は、あらゆるところに窪みがあつて、少し湿っぽかった。フォルテはその一つの窪みに駆け寄つて降りていったのだ。

「待つてよ、どうしちゃったのよ…もう」

ルナシーは眉根を潜めて、周りを確認しながらついていった。

フォルテは窪みの中の壁に手をあてて、上、下、右左を確認しながら、仕切りに何かを呟いていた。

「…凄い…壁に文字が…」

彼は、少し下がって、全体を見渡した。

ルナシーも彼の視線を追う。

「ヒエログリフだ…」

それは古代エジプトの文字で、合間合間に壁画が彫られていた。フォルテは一時その壁を見つめた後、

「…エジプトの神話だ…太陽神ラーを奉つてるんだ」

「あなた…古代文字が読めるの？」

「ヒエログリフなら少しね。全部じゃはいけどもちろん…ただ、大切な単語と、壁画の神様の“アトリビュート”で想像は出来るかな…」

フォルテはルナシーの目線に立って、左上を指差した。そこには、意味の分からない古代文字に囲まれた、横を向いた神の姿が描かれていた。丸い太陽を背負っている。

「あれが太陽神ラーだ。太陽のヒエログリフが見えるかい。ラーはエジプト神の主神であり、太陽の神だから。アトリビュートだよ」

「アトリビュートって？」

ルナシーは、先ほどからでてきている謎の言葉に疑問を抱いた。フォルテは、いまだにその壁画を隅々まで見ながら、

「神々を判別する、象徴的な物さ。持ち物だったり、姿形だったりするけど」

一つ一つのヒエログリフを確かめていた。

「……サ・ラー…は、ラーの息子。ファラオの事だ。…この壁画、きっとこの時代でも古いものだ」

「どうして…？」

「だって、この時代がツタンカーメンの時代なら、ラー信仰は古くてアメン信仰とアテン信仰が盛んな時代のはずだけど……」

フォルテは相変わらず専門的で、あまりこういうものに通じていないルナシーにとっては、うさくさいばかりであった。

「何ですって？」

「太陽の神様さ。エジプトにとっては太陽神って言うのはとても大切だね。エジプト神にも、沢山の太陽神がいるんだ。ラーをはじめ、アメン神、アテン神……」

フォルテが太陽神の説明をしようとした時だった。

気付いた時にはもう遅かったのだが、窪みの外には既に何人かの男がこちらをにやにや見ながら囲んでいる。

フォルテとルナシーは一瞬背筋が凍ったような気がした。

「動くんじゃないぜ、異国のお方よお」

その人だかりの中から、長い上着を羽織った浅黒い肌の男が現れた。頬に大きな傷があり、彫りの深い瞳は冷たく二人を見据えている。きつとこいつがお頭なのだ。

今ここで殺されたら現実の世界の私はどうなるんだろう。ルナシーは既にそんな事さえ考えに至る。

「今死んだら、俺たちってどうなるんだろう……」

今まさに、同じ事を考えていたフォルテが、両手を上げた降参のポーズのまま、希望のなさそうな声音で呟いた。

ああ神様。

エジプトの神様。

我がギリシアの神様。

ここで死ぬだけの、ただそれだけのために呼んだのではないでしよう。

こんな所で、むざむざ殺されるくらいなら、どうか、

オシリスの前に祝福されし者でありますように。
カーロンの船が穏やかでありますように。

フォルテは必死になって他教色々な神に祈った。

オシリスは、死者の国の神。
カーロンは冥府への渡し守。

ヒエログリフは、まるで絵画のようだ。
そのウジャトの目は我々を見ている。

I
d
r
a
w

24：エジプトプラン7、オアシス都市“カルガ”

我々が、この世界に呼ばれた理由はきつとある

どうか、太陽神に栄光あれ

「聞き分けの良い奴らめ。賢いのか、ただの腰抜けか……」

「……………」

あっさり捕まってしまったルナシーとフォルテは、荒い縄に縛られてオアシスの崖沿いを歩かされていた。

「お頭、こいつらどうするおつもりでい。見た所異国者に違いねえが、見た事ない格好をしているぜ」

「珍しいだけ価値はあるだろ。…なあ、美しいお嬢ちゃん」

お頭はそう言うと、卑屈な笑みでルナシーを覗き込んだ。ルナシーは、暑いのに凄く寒い寒気を感じた。
お頭から目を背ける。

「……お前達、一体全体どこからやってきたんだ。このオアシスは、都から遠く離れているのに。見た所“足”も無いようだ……」

お頭は、今度はフォルテの方を向いた。

「おい、小僧。お前ら何もんだ」

「ギリシア人です……」

「ギリシア人だと。何でこんな所にいる……」

「そんなの、俺たちが知りたいさ……。いったい俺たちをどうする気だ」

フォルテは、用心しながらお頭を見上げた。

お頭は、彫りの深い瞳を細めると、あざ笑うように。

「……そうだな。どうしてやろうか。奴隷にしてやろうか、いつそ殺してやろうか」

「……………」

二人には今の所、深い後悔と、絶望しかなかった。

「ボサツとするな。奴隷」

崖沿いを歩かされながら、フォルテはこの国について考え込んでいたものだから、フォルテの縄を持っていた大男に後ろから蹴られた。勢い余って、フォルテは前に倒れた。

「フォルテ！！」

ルナシーはフォルテに駆け寄ろうとしたが、縄がそれを許さない。フォルテは、ルナシーに目配りすると、小さく首を振った。事を荒立てたくないと言う事だろうか。

お頭が怪訝そうに振り返った。

「何やってるんだてめえら」

「お頭、だってこの奴隷、さっきからボサツとしてるもんだから」

「下手な事するんじゃない。逃げられでもしたらどうする。人間極限まできたら何だって出来るんだぜ。このオアシスから、誰一人“一歩も”出したらいけねえんだ」

お頭は、大男に罵声を浴びせると、フォルテに、

「悪かったな、小僧」

と謝ってきた。

「……………」

ルナシーとフォルテは顔を見合わせる。

先頭を歩いていたお頭は、ある崖の前で立ち止まった。

そこには、先ほどのヒエログリフの書いてあった窪みとは比べ物にならないほどの、沢山の文字が記されてあった。

そして中心部には、巨大な扉が壁画として描かれていたのだ。

フォルテは息をのんだ。

「偽扉だ……。バーが通る扉……」

壮大で、圧倒される重々しい壁画。ハヤブサの姿をして、頭部に太陽を掲げた神が描かれている。

ルナシーはその神の姿から目をそらせずにいた。

「お前……ギリシャ人の癖に、嫌に詳しいな」

お頭はフォルテを見下ろした。

フォルテは顎にてを当てたまま何かまだ考えている。

「でも、偽扉は基本的に墓に描かれるものだろ……。死者の魂……。エジプトで言う“バー”が自由に出入りできるように。何でこんなへんぴなオアシスの中に……」

「……この偽扉は目くらましだ。」

お頭はそう言うつと、その扉の前に、手をついた。

そして、一体何と言ったのだろう。

彼は何かを唱えたのだ。

「……最高神ラーよ……あなた様こそが、ただ一人の太陽の神」

ただそれだけが聞き取れたとき、お頭は懷から手に余る大きさの鍵の様な物を取り出した。

ルナシーやフォルテがひやつとしたのは言うまでもない。

まるで、セティさんが記憶の間”で使ったあの鍵を彷彿とさせたからだ。

丸い輪っかのついた、十字架にも見える。

「…アंकだ。エジプトの神器の…」

二人があっけにとられている時だった。

お頭が“アंक”をその壁画に突きつけた瞬間、羅列したヒエログリフが光を得て、開かないはずの扉が開いたのだ。

そう。

あの時のように。

「ここは、辿り着ける者にしか辿り着けないオアシス都市“カルガ”」。太陽神ラーの恩恵を受ける都市だ」

フォルテは目を疑った。

開いた扉の中には、外から見ただけでは到底分からなかったのだが、何と見渡す限りの町があったのだ。人々が行き交い、とても活気が良いのに、どうして微かな声さえも扉が開く前までは分からなかったのか。

お頭につれられて、その都市に入っていった。

向こうもこっちも、もの珍しそうにじろじろ見ている。

「……どういう事なのフォルテ」

「…分からない。こんなの聞いた事も無いよ…」

ただ、分かる事と言えば、この都市はきっと“隠れ里”なのだろうということ。

あの非科学的な扉に守られているのだ。

町の人々の警戒心の視線も、いたいほど分かるから。

お頭は二人を縄で縛ったまま、重たい扉の部屋に入れた。
外には見張りをつけてまで。

お頭は、中心にある石造りのイスに腰掛けた。

「まあ、好きな所に座りな。お前達は運がいいぜ。扉をくぐるとき、太陽神ラーによって裁きが下されなかった」

「……………何だつて？」

フォルテは突っ立ったまま、お頭を見下ろした。
ルナシーは壁にくっついていている長椅子に座って、一つ大きく息をついた所だった。

「この都市はラーによって守られている。かつての“ラーの神官団”が創った都市だ。もし、王宮のスパイが潜り込もうとしたら、あの扉で裁きを受ける仕組みになっている」

「……………王宮？ どういう事だ？」

フォルテは何もかもが分からずにいた。
ただ、彼の好奇心だけがぐるぐる頭を巡っている。

「……………」

お頭はフォルテをじっと見上げた。
そして、ルナシーにも視線を向け、またフォルテに戻る。

「……何を言ってるんだ。そもそも、お前達は何なんだ。どうしてこのオアシスにいた」

「……それは……」

お頭の疑問は最もだった。

でも、だからといって、未来から来たなんて言っただって、理解できないだろう。

どうすれば良い。話が一向に見えてこない。

フォルテは息をのんだ。

「俺たちは、ずっと遠くから来た。…気付いたらこのオアシスにいたんだ……。俺たち以外に、こんな格好をした奴は居なかったのか？」

「……お前達の他に……？ いや、いなかったぜ……誰かがこのオアシスに入ると、俺たちに分かるようになってる」

何だ。

この違和感。

フォルテはお頭を睨んだ。

ただの盗賊にしては、彼からはとても不思議な凄みだけを感じる。悪い気は到底しないのに、ただ者でない事は分かるのだ。

「俺の名前は“タハール”。このオアシス都市カルガの頭で、太陽

神ラーの神官だ」

「……………」

フォルテは唐突に自己紹介してきたタハールに目を見張った。全然盗賊でも何でもなかったのだった。

タハールは、あんぐりとしている二人を、ただ見据えて、

「今や、この国のファラオに先は無い。“アテン神”だけしか認めようとしな。民は飢え苦しみ、神の定まらない混沌とした空気は、闇を生み出す」

ひやりとする視線を作り出していた。

フォルテは一度息を飲むと、自分の心の中に落とされる好奇心を抑えるのに必死であった。それでも、知りたいと言っ気持ちはどんどん溢れてくる。

「……俺たちは何も知らない。分からない。…できれば、全部教えてほしい」

この国の、今のすべてを。

フォルテは、ある種の焦りと興奮を覚えていた。

ここには、本では分からない“真実”がある。知りたい事が、沢山ある。

知りたい。
全てを。

タハールは、額の中心を押さえて、ガクつと前にうなだれた。そんなジェスチャーの中でも、合間には、二人への警戒心も解いてはいなかったのだが。

「呪いだよ。“セト神の呪い”って呼ばれているけどな。神の決まらないこの国は不安定になり、やがて恨みを残した人々の“バー（魂）”は、呪いとなり、厄災となる。少し前に“セト神”を祭っていた者たちが皆殺しにされ、それから呪いはこの国に漂っている」

「今の……このエジプトのファラオは？」

フォルテはたまらなくなつて聞いた。

カタルは一度瞳を閉じ、再び開けた。

その時の瞳の、憎悪に満ちていた事。

「……アクエンアテンだ……」

その名を口にした時の、憎しみのこもっていた事。

我々は、無機質な歴史しか知らない。

どうしてそうだったのか、何を思ってそうしたのか。

その決断を下すのに、どれだけ苦しんだのか。

歴史はそれを語らない。
心は分らない。

だから、よく見ておいて。

悪も、正義も、簡単に一言では済ませられないと言つ事。

残酷も、失敗も、

負けも勝ちも、

愛も憎しみも、

野望も欲望も、

全て、結果だけを教える歴史の教科書を、否定しようとは思わない。

ただ、想像していこう。

それは、黒歴史の幕開け。

三柱の太陽神を巡って、繰り広げられた、隠された歴史。

エジプトの未来を左右した物語。

I
d
r
a
w

25：エジプトプラン〜中庭〜

どうして人々は、神を求め
神を信じ、崇め

どうして戦うのか

あれは確かに扉だった。

あの光の中で、時空を行き来する歴史の扉。

それを開いた鍵。

それを許したのは誰だったのか。

「……………つわあ！！！」

静かな意識の世界から、キクマサは急に目が覚めた。
パンと、大きな音がしたのだ。

「……………??」

「あら、やっとお目覚めね」

目の前には、深い色の巻き毛の女性が、彼の目前で手を叩いたポーズのまま居た。

キクマサは状況の理解に苦しむ。

彼女は、四年生のシャルロ・グレディア先輩だ。

「……………え……………？先輩……………??」

「あら、覚えていてくれて光栄だわルネ・アメジスト。あんたは二年生のオノダ・キクマサ君よね」

彼女はぼかんとしているキクマサをよそに、立ち上がると、膝をパンパンはたいた。

キクマサはあたりを見渡す。

そこは、静かで薄暗い庭のような場所だった。高い壁に囲まれ、真ん中に池がある。

パピルスが水面から伸びて、ひっそりと佇んでいる。

「どういうことですか？…みんなは……………」

「分からないわ。目が覚めたら、ここに私達三人しか居なかったんだもの」

「……………三人??」

キクマサは、周りの景色の変化に圧倒されて、すぐそこに転がっている彼に気づきもしなかった。
黒髪の男がうつ伏せで気を失っている。

「だ、団長!!」

キクマサは慌てて彼に近づくと、肩を揺さぶった。

「やだ…。そいつ起こすの?」

シャルロはあからさまに嫌そうだった。キクマサは、どうしてわざわざこの三人なのだろうと思ったが、今は団長を起こさなければと、何度も肩を揺さぶった。

程なくして、彼は意識を取り戻す。

「……………何だ……………」

完全に状況の掴めていない、曖昧な意識のまま、団長はムクリと起き上がった。

「…よかった、団長」

「……………あ?……………あれ、何でお前……………あれ??」

団長はキクマサを不思議そうに見て、周りの風景の異常に視線を流

した。

四角く切り立った壁に囲まれた箱庭のような場所。流石の団長もこの状況では間の抜けた表情だ。

「やっとお目覚め？ 見て分かると思っけれど、この場所に、私達三人しか居ないわよ」

シャルロは腕を組んで、目の前の石ころを団長の方に蹴る。

「さっきまで、俺達は王家の谷に居たのに……」

キクマサは、ふとフォルテヤルナシー、レイの事が気になった。彼らは一体どこに居るのだろう。

ズボンのポケットからケータイを取り出して開く。しかし、

「……あれ?? ケータイが真っ暗」

充電は十分にしてきたはず。海外でも使えるやつなのに。それを聞いたシャルロは、自分の赤いケータイを出して、一時何かしていたがため息をつくとそれを再びポケットに入れた。

「ダメだわ。まるで通じない」

「……………」

団長は黙っていたが、じっと周りの様子を見て、険しい顔をしていた。そして、

「……ケータイなんて通じるはず無い……。ここは、古代エジプトだ……………」

低い声でそう言った。シャル口とキクマサは彼の方に、ハッと顔を向けた。特にシャル口は眉根を寄せると、

「……本気？　なにバカな事……」

「ああ、そうだ。ばかげた話だが、多分そうなんだよ」

彼は確信めいた口調だった。表情は相変わらず強面だけど。シャル口は当然いかがわしげに腕を組んでいる。

「……根拠は？」

「別に。そんな気がするだけだ」

「嘘ね。あんた何か知ってるんでしょ……」

シャル口の鋭い視線が、団長に向いていた。キクマサは二人の先輩のやりとりを訳も分からず追っていた。

団長は、シャル口を見下ろし、ここにまたピリツとした空気が流れる。

キクマサは気が気でない。その時だ。

カツ……。

壁の方から一つの足音がして、彼らは振り返った。

出口か、入り口か。くり貫かれた口から一人の女性が現れた。白い

衣装を着た、肩までで切りそろえた黒髪の女性。

女性は三人を見つけると、瞳を大きくさせた。

女性の側にいた側近のような女官が、小さく悲鳴をあげ、青ざめている。

「…お…王妃様。こ、この者たちは…」

「静かになさい。気づかれてしまいます」

王妃と呼ばれた女性は、三人に目を向けると、

「そなたたちは…？」

ただ一言、それだけ問いかけてきた。

団長は腕を組んだまま偉そうに、

「ルネ・ヴィライアーだ!!」

と、啖呵を切る。彼はこの状況に動揺していないようだ。

「バカ!! そんな事言ったって意味ないでしょう」

「じゃあ何て言えばいいんだよ」

シャルロが団長につっかかり、二人はいつもの言い合いになってしまった。

しかし、その時、例の王妃の表情が少し変わったのを、キクマサは見落とさなかった。

口元に手をあて、

「……ルネ・ヴィライアー……」

小さく呟いている。そして、三人を探るように見ると慣れたように微笑む。

「……ここでは何ですから、よろしければ客間へお通しいたします」

「あの……」

キクマサは彼女に問いかけた。振り返る彼女から、不思議な香油の香りがする。

「ここはどこですか……？ あなたは……」

あなたは誰ですか？

分からないことだらけの状況を、教えてくれる人がいるのならば。

「……ここはルクソールの王宮です。私の名は“アンケセナーメン”……」

その名を聞いたときの、シャル口と団長の驚き様は、きっと空気に伝わった。二人は同時に顔を上げたのだ。

王妃アンケセナーメン。

キクマサは、歴史上有名なその名を、この時はまだ知らなかった。

「今夜はこの部屋でお休みください。王妃様は、明日こちらに伺うと言っております」

女官が通してくれた部屋は、石造りの淡白な部屋だった。

「王妃様は内密にとおっしゃっております。あまり物音を立てませんように」

彼女はそう言いつと、そそくさと立ち去っていった。部屋の中は、三本のローソクしか光源がなく、とても薄暗い。三人はローソクを側に置いて、固まって座った。

「……どういう事なの…?」

シャルロは冷ややかな目で団長を見る。団長はうつうつしそんな顔をしたが、

「おい、どういう事だ。新人、簡潔に述べてみよ」

キクマサに振って、その場をしのいだ。振られたキクマサはただの被害者。こういうのを無茶振りっていうのだろうか。彼は困ったが、あえて全く関係ない事を尋ねた。先程から、ひどく気になっていた事だ。

「……さっきの人…アンケセナーメンって、先輩知ってるんですか…？」

「おい、質問の答えになってねえぞ。とんでもない新人だな」

団長はあぐらをかいて、苦笑いをした。シャルロは肩の髪を払うと、

「それでいいのよ、キクマサ君。あなた面白い子ね」

意味深に笑みを浮かべた。

「だ、だから…アンケセナーメンって……」

「気をつける新人。この女はマジでヤバいから。目付けられたら身ぐるみはがされるぞ。いろんな意味で」

団長はキクマサの言葉をかき消した。

「……あの……だからアンケセナーメンって……」

「何言っているの団長。誤解を生むようなこと言わないで。それに私、お金にしか興味ないもの」

「金の亡者が。モテないぜ」

「……あの……」

キクマサの入る余地がない。

二人のケンカはますますヒートアップする。

「どの口が言っているのかしら。くだらないこと言う前に、私達に説明することがあるはずよ」

シャルロ先輩の口調はあくまで冷静なものだった。団長は、「可愛くねえの」と嫌みを残して、キクマサに向き直る。静かな空気の中、それでも二人の先輩に隙はなかった。

「新人。えー…、ルネ・アメジストだったな…。まあ、なんだ。最初の研修で偉く当たりだったな。よろこべ」

キクマサの肩にポンと手を置き、まるで、よろこべという名のドンマイに聞こえる。

キクマサは何のこっちゃ分からなかった。

「回りくどいのよ。核心だけ述べて」

「てめえは黙ってろ」

再び二人の先輩の間に火花が散る。どうしてこんなに仲が悪いのか。

「…アンケセナーメンっていうのは、あの有名なツタンカーメンの奥さんだ。歴史上な。さっきの女がそうとは限らないが…。ただ、服装や建物を見ても、現代ではなさそうだ」

深刻なような、でも割と落ち着いた口調の団長に、シャルロは相変わらず胡散臭い視線を向けている。キクマサは、さっきの女性を思い返していた。あつという間に部屋に案内されて、状況を把握するところではなかった。

それに、あの人…。

「あの人…ルネ・ヴィライアーっていう言葉に聞き覚えあるのかな…」

「……何…？」

団長が顔をしかめて、小声で聞き返してきた。シャルロも視線だけキクマサに向ける。キクマサは慌てて、

「いや…、何ていうか、あつさり受け入れてくれたじゃないですか…。俺達の事…」

「……………」

シャルロは石段に座って足を組むと、

「…確かに。普通はこんな怪しい格好をした奴を、客間に招いたりしないわ…。ましてや宮殿よ。それにさっきのお付きの人…」

巻き毛を片側に流す。これは彼女の癖だ。

「……内密に、お静かについて言っていたわよね」

「…何笑ってやがる」

「いやね…あまりお静かに出来ないなあって思っで。……気づいてる？」

「……………？」

彼女がそう言っで、顔を上げたときの、ヒヤリとするような冷たい微笑み。

キクマサは一瞬、息が止まりそうになっだ。

団長は一度だけ瞳を大きくさせる。そして、いかかわしそうな顔を入り口に向けたとき、きつとすでに、我々は籠の中の鳥だっだ。

ローソクの炎が、三人の影を作っでは、幻のように揺らめかした。

見えない敵に、止まっだ吐息。

歴史を変えてはいけない。
でも、我々は“何か”を変えなければ、話にならなかった。

| d r a w

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8468x/>

draw

2011年10月26日15時10分発行